みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

サタワル島の数占い：その基本体系について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石森, 秀三 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004552

サタワル島の数占い
——その基本体系について——

石　森　秀　三*

Number Divination on Satawal, Central Caroline Islands

Shuzo Ishimori

This paper describes the so-called "knot divination" (which I prefer to call "number divination" or "divination from number") as practiced on Satawal, in the Central Caroline Islands. This phenomenon was studied during field research conducted in 1978. Divination based on the number of knots randomly tied in coconut pinnas was used by the inhabitants of most of the Caroline Islands until just prior to World War II. Few people, however, now believe in this kind of divination. I was instructed in the secrets of "number divination" on Satawal Island by one of the few old diviners who recalls the major features of the process.

Divination begins with the stripping of a coconut frond pinna into four segments. The diviner then ties a random number of knots in each of the strips and counts the knots in each one. The knots are counted into independent groups of four. The sequential number of the last knot on each strip is the significant number as it is combined with its corresponding number of the second strip of the pair. The two sets of paired numbers derived from the four frond strips are interpreted for the omen. The actual number of possible combinations is 16 times 16, or 256. The names and omens of all 256 combinations were ascertained, and the stories of 139 combinations which tell why good or bad omens are given to a particular combinations were collected.

The myth of how man acquired the art of divination tells of a mythological canoe that belonged to the spirits of heaven being let down to earth and teaching man the art. It is most significant that the 16 spirits represent the 16 combinations of numbers derived from the random making of knots. A detailed

* 国立民族学博物館第4研究部

explanation of the mechanic of divination in relation to the 16 mythological spirits that act important roles in deciding omens is given, as is a description of divination rituals. Finally, the importance of the number four (its multiples and divisions) in divination, as well as on many ceremonial occasions, is noted.

Ⅰ. はじめに
1. 問題の所在
1) 秘術としての数占い
2) 数占いとキリスト教
3) 本稿の目的
2. 調査地および調査方法
Ⅱ. 3種類の数占い
1. pwe
2. pweniyés
3. pwenifiriytip
4. pwenimmwáylong
Ⅲ. 数占いの宗教的背景
1. 数占いの起源伝承
1) Satawal 島の伝承
2) Namoluk 環礁の伝承
2. 数占いと yaanú
3. 16人の yaanúyeŕemas
4. 数占いのカヌー
Ⅳ. 数占いの基本体系
1. 占いの方法
2. 256の koran
3. koran の分析
Ⅴ. 数占いの比較考察
1. Saipan 島の数占い
2. Namoluk 環礁の数占い
3. Truk 群島の数占い
4. Yap 島の数占い
5. Woleai 環礁の数占い
6. 比較考察
Ⅵ. おわりに

Ⅰ. はじめに

1. 問題の所在

1) 秘術としての数占い

ミクロネシアのカロリン諸島の島々では，ココヤシ (*Cocos nucifera* L.) の葉に結び目をつくり，その数によって，吉凶を占うことが古くからおこなわれていた。この種の占いはいままで，欧米の研究者によって，“結び占い” (knot divination) とよばれてきたものである。ココヤシの葉に結び目をつくって占いをすることからそのように名付けられたものである。しかし，正確にいうならば，それは適切な表現とはいいがたい。なぜなら，この種の占いでもっとも重要なポイントは，結びの“数”であり，その数の組み合わせによって吉凶が決められるからである。そのため，本稿では，この種の占いのことを，“数占い”とよびならわすことにする。

カロリン諸島において，数占いが存在することを最初に記録にとどめたのは，18世紀の初頭に Guam 島に居住していたスペイン人 Juan Antonio Cantova 神父で

あった。神父は，1721年に Guam 島の近くで座礁した，一隻のカヌーの乗組員を保護した。そのカヌーは，中央カロリン諸島の Puluwat 環礁からきたものであった。そのときに，これらの Puluwat 環礁からきた人びとが，ココヤシの葉をもちいて結び目をつくり，その数によって吉凶を占っていた，と報告している [CANTOVA 1728: 233–234]。それから約1世紀ののちに，ロシヤの探検家 Otto von Kotzebue にひきいられた調査隊が中央カロリン諸島の島々をおとずれ，隊員の一人である Adelbert von Chamisso が，Woleai 環礁において数占いを調査し記録にとどめている [KOTZEBUE 1821: 204]。また，ほぼ同時期に，Guam 島で調査をおこなった，フランスの探検家 Louis de Freycinet が，Guam 島に居住する中央カロリン諸島からの移住者が同様の占いをおこなっていたことを報告している[FREYCINET 1827: 114]。

その後，1899年に，ドイツがミクロネシアのほぼ全域を手中におさめるにいたり，多くのドイツ人学者が各地で学術調査に従事することとなった。その結果，これらの学者によって，ミクロネシアの各島の社会と文化に関する民族誌がつぎつぎとうみだされた。そのうちのいくつかの民族誌のなかに，数占いについての記述がみられる。Palau 群島に関しては J.S. Kubary [1888], Yap 島に関しては S. Walleser [1913] と W. Müller [1917, 1918], Truk 群島に関しては L. Bollig [1927] と A. Krämer [1932], Namoluk 環礁に関しては M. Girschner [1912], Puluwat 環礁に関しては H. Damm と E. Sarfert [1935], Ngulu 環礁に関しては W. Müller [1917], Fais 島に関しては A. Krämer [1937], Ponape 島に関しては M. Girschner [1912] などが，数占いについて調査報告をおこなっている。これらの報告から，数占いがカロリン諸島の全域でみられることがあきらかとなった。

その上に，この種の占いが，社会生活において重要な役割をはたしていたこともあきらかとなった。カヌーで船出するときはもちろんのこと，病人がでたとき，家を建てるとき，漁にでかけるときなど，一日のうちで何かのことをおこなうときには，かならず数占いをしたといわれている。けれども，社会生活における数占いの重要性の指摘にもかかわらず，数占いを体系的に研究する試みはいままでなされなかった。一つの島の社会と文化に関する包括的な民族誌の一部として，断片的に記述されるのみであった。

このように数占いが体系的に研究されることがなかったのは，数占いについての伝統的知識と技術が少数の占い師によって独占され，秘術化されていたためである。カロリン諸島の島々においては，数占いだけでなく，航海術やカヌーづくりなどに関わる伝統的な知識と技術は，特定の熟練者によって独占されており，それらの知識と技

術の継承については，厳格な社会的規範が存在した。つまり，それらの知識と技術は，熟練者の直系親族にうけつがれていくことが多く，それ以外の人が教授をうけようとする場合には，かなりの財貨の贈与を必要とした。同じ島の人間であっても，それらを知ることが容易でない状況にあったわけであるから，民族学者のような完全なる部外者が，数占いや航海術やカヌーづくりなどに関する知識と技術を体系的に教授されることは稀なことであった。

2) 数占いとキリスト教

カロリン諸島の島々における社会生活のうえで重要な役割をはたしてきた数占いではあるが，現在ではこの種の占いがおこなわれることはきわめて稀なこととなった。その原因は，島民がキリスト教を受容したことにある。

カロリン諸島の島々においては，第二次大戦後のアメリカによる信託統治のはじまりとともに，急速にキリスト教化がすすみ，固有の伝統的な宗教が崩壊した。それにともなって，数占いも迷信とみなされるようになり，現在ではほとんどおこなわれなくなった。カロリン諸島における数占いも，他の多くの占いと同様に超自然的世界と密接な関わりをもったかたちで成立していたために，固有の伝統的宗教の否定にともなって，数占いの成立基盤そのものが崩壊したのである。

数占いが社会的支持をなくしたことによって，占いに関する知識と技術の継承がおこなわれなくなった。若い世代が社会的に不要な数占いに興味を示さなくなったからである。それによって，何世代にもわたってうけつがれてきた数占いは，ごく少数の長老だけが知りうるものとなった。そして，それらの少数の長老の死とともに，数占いに関する伝統的知識と技術が完全に消滅する危機にさらされている。

3) 本稿の目的

筆者は，文部省科学研究費補助金（海外学術調査）の交付をうけて，1978年6月から9月にかけて，中央カロリン諸島の Satawal 島で，「中央カロリン諸島における伝統的航海術の民族学的調査」のための予備調査をおこなった。調査は，共同調査者の須藤健一（国立民族学博物館第3研究部助手）とともにおこなったが，その際に筆者は数占いを体系的に修得する幸運にめぐまれた。

Satawal 島では，航海術，カヌーづくり，数占い，カヌー小屋の建築・修理の4分野に関する伝統的知識と技術については，とくに社会的に重視されており，それらの分野の熟練者はそれぞれ，palú[1], sennap, sawpwe, sawpwangin imw という社会

1) Satawal 語の表記は，原則として S. Elbert の *Puluwat Dictionary* に依拠しておこなった。

的称号があたえられている。なかでも，航海の専門家である palú は，社会的にもっとも重要な地位を占めている。その理由としては，palú になるためには，航海に関する天文・海洋の知識だけでなく．カヌーづくり，数占い，民族医学，各種の儀礼など，多くの伝統的知識と技術を一身にそなえていなければならないからである。ひとたび，カヌーで海にのりだしたならば，どのような不測の事態が生じようとも，palú が適確な判断を下して，乗組員の生命を守らなければならないからである。したがって，すぐれた palú は，sennap や sawpwe を兼ねることが多い。

筆者は，Satawal 島における palú の最長老であり，また sawpwe でもある Lamonur 氏から，数占いを体系的に教授されるという幸運にめぐまれた。もちろん，調査期間が短かかったので，数占いについてのすべてを修得したとはいいがたい。しかしながら，1978年12月に Lamonur 氏が逝去されたとの報をうけた筆者は，氏の遺志にむくいるために，不完全ながらも氏から教授をうけた数占いについて報告をおこなうことにした。したがって，本稿は，Lamonur 氏が教授してくれた，Satawal 島の数占いについて，できるかぎり体系的に民族誌的記述をおこなうことを目的として書かれたものである。

しかしながら，占いについては，いくつかの異なる視点からアプローチが可能である。たとえば，社会的脈絡における占いの問題がある。それは，占いをめぐる人間関係などをはじめとする占いの社会的機能の問題である [Park　1963]。しかし，占いはまた，社会的脈絡を離れて，独自の体系をもっている場合があり，その体系を研究することによって，その社会の人びとのいだく世界観を解明する，一つの足がかりとすることができる。Satawal 島の数占いは，後述するように，占いが一つの明確な基本体系をもっており，社会的脈絡とは関係なく，その基本体系を記述・分析することが可能である。社会的脈絡のなかにおける数占いについては，別稿で詳述する予定であり，本稿では Satawal 島の数占いの基本体系にのみ焦点をあわせて，民族誌的報告をおこなうことにする。

また，本稿では，サタワル島における数占いの基本体系の特質をより明確なものにするために，カロリン諸島のいくつかの島々における数占いの基本体系を比較考察する予定である。

2.　調査地および調査方法

筆者が調査をおこなった Satawal 島は，中央カロリン諸島の中部に位置する島である。周囲約 6 キロメートルほどの小さな隆起サンゴ礁の島であり，人口は 492 人で

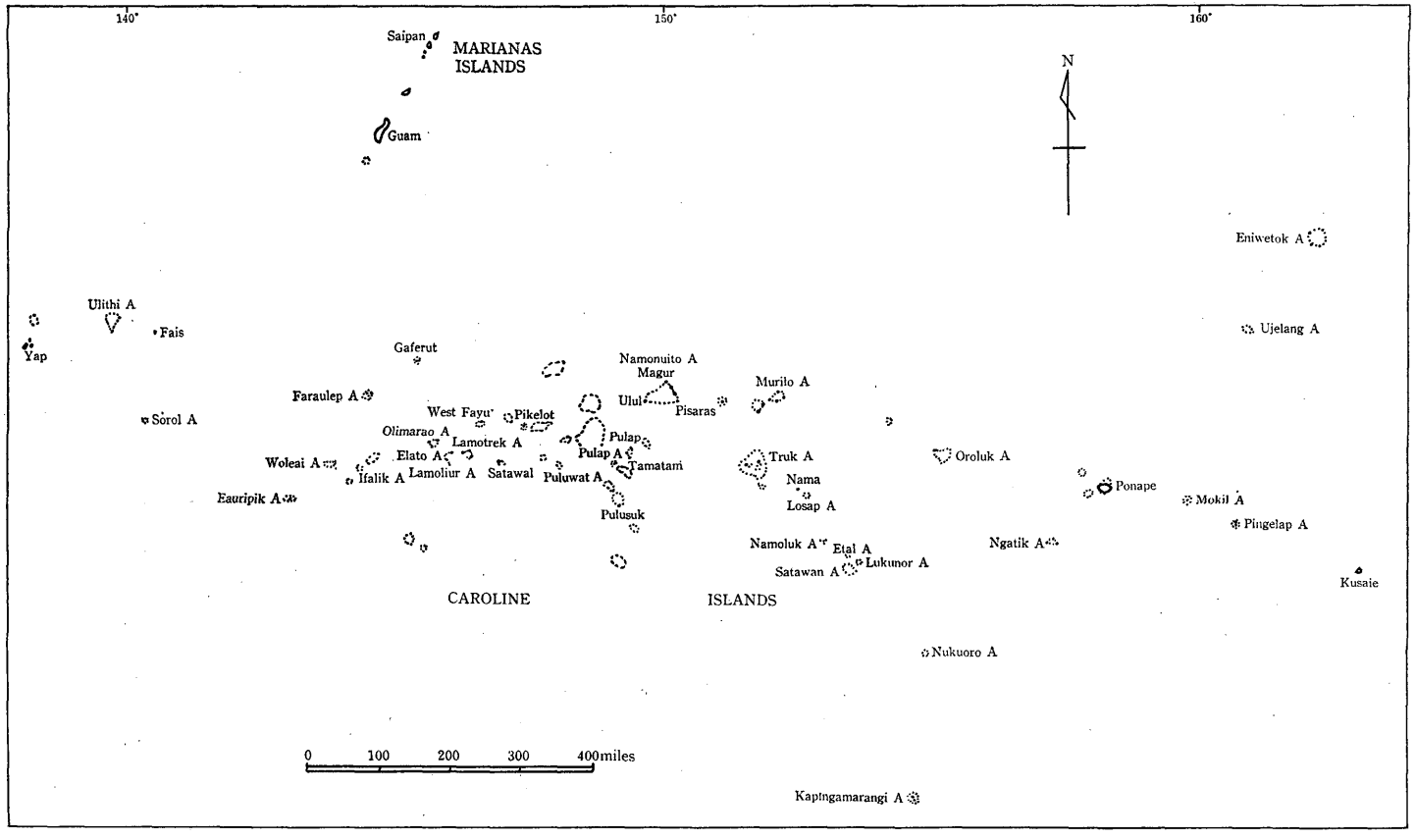
140°
150°
160°
N
Saipan
MARIANAS ISLANDS
Guam
Eniwetok A
Ulithi A
Fais
Yap
Ujelang A
Gaferut
Namonuito A
Magur
Murilo A
Faraulep A
Ulul
Pisaras
Sorol A
West Fayu
Pikelot
Olimarao A
Lamotrek A
Pulap
Woleai A
Elato A
Pulap A
Tamatam
Truk A
Oroluk A
Ifalik A
Lamoliur A
Satawal
Puluwat A
Nama
Ponape
Eauripik A
Losap A
Mokil A
Pulusuk
Pingelap A
Namoluk A
Etal A
Ngatik A
Satawan A
Lukunor A
Kusaie
CAROLINE
ISLANDS
Nukuoro A
0
100
200
300
400miles
Kapingamarangi A

図1 カ ロ リ ン 諸 島

ある(1978年8月現在)。Satawal 島は行政的には,国連信託統治領太平洋諸島 (Trust Territory of the Pacific Islands) の Yap 地区に属している。しかし, Yap 地区の最東端に位置しているために, 地区の行政の中心地である Yap 島から, 約1,000キロメートルも離れている。そのため, Yap 島から生活物資をはこんでくる連絡船が2〜3カ月に一度の割でしかこないので,外来文化を影響をうけることが比較的少なく,ミクロネシアのなかでもっとも伝統文化を色濃くのこす島の一つとみなされている。

Satawal 島には, 調査当時,数占いを熟知する sawpwe が4人いた。筆者は, その4人の sawpwe のうち,最年長者である Lamonur 氏から数占いに関する伝統的知識の教授をうけた。Lamonur 氏は当時約70歳であり, 数占いに関する知識をもっとも詳細にわたって保有しているとみなされていた。Lamonur 氏は, Satawal 島の生れであるが, 幼少の頃に Puluwat 環礁の著名な palú であった Shuttur の養子となった。当時, Puluwat 環礁は中央カロリン諸島のなかでもっとも盛んに遠洋航海をおこなっており, すぐれた palú が多数いたといわれている。なかでもとくに, Lamonur 氏の養父となった Shutter は, 当時もっとも偉大な palú として著名な人であり, Lamonur 氏はその人から直伝で各種の伝統的知識と技術を授けられたのである。したがって, 数占いについても, 養父の知識を継承したものである。

調査にあたっては, 主として英語をもちい, 副次的に Satawal 語をもちいた。そのため, 筆者の調査助手をつとめてくれた Sabino Sauchoman 氏を通訳としてもちいた。Sauchoman 氏は現在24歳で, Truk 群島にある, Xavier High School を卒業しており, 英語に堪能である。その上に, なお幸いなことに, Sauchoman 氏は Lamonur 氏の養子であり, その点でもより円滑に調査をすすめることができた。数占いなどに関する伝統的知識は, 本来, 父親から息子に継承されていくべきものであり, その点, 今回の調査の場合, このルールにのっとったかたちでおこなったので, 何の障害も生じなかった。

しかし, Lamonur 氏にとって, 筆者は部外者であり, 本来, 数占いを教授してはならない関係にある。それにもかかわらず, 部外者である筆者に数占いを教授してくれたのは, Satawal 島の若者が非実用的意味しかもたなくなった数占いについてまったく興味をしめさなくなったためである。そのような社会的背景のなかで, Lamonur 氏は自分がうけついできた伝統的知識が自らの死とともに消えさることを憂えており, 数年前に若者を集めて, 航海術や数占いなどに関する伝統的知識を教授する機会を積極的にもうけたが, 若者はそれほど興味を示さなかったといわれている。そのような社会的状況のなかで, 筆者および共同調査者の須藤健一が, 伝統文化に関する調査を

はじめたために，Lamonur 氏が筆者らの仕事の意味を理解してくれたうえで，積極的に調査に協力してくれたのである。

このような経緯のもとで，Lamonur 氏は筆者に数占いの秘術を教授することに同意してくれたので，それに対して筆者も Satawal 島の社会的規範に準ずるかたちで，伝統的知識の教授にみあうだけの財貨の贈与をおこなった。換言すれば，筆者が sawpwe になるために，Lamonur 氏に弟子入りをしたかたちで調査をおこなったということになる。

なお，Satawal 島については，土方久功氏が，1931年10月から1938年12月まで滞在し，島の生活について，多くの記録を書きとどめている。しかし，数占いについては，それが島民のあいだでよくおこなわれている，と記しているだけで [土方　1975: 161]，その詳細についてはまったく記録にとどめていない。土方氏が，Satawal 島に滞在していた当時は，数占いがまだ盛んにおこなわれていたときであり，部外者がそれについての詳細を聞きだすことはむずかしかったとおもわれる。

なお，本稿は，Satawal 島の社会と文化に関する調査報告の第1報である。ただし，筆者は，共同調査者の須藤健一および秋道智彌（国立民族学博物館第2研究部助手）とともに，1979年5月から1980年3月にかけて，Satawal 島で本調査をおこなう予定である。そのため，本稿での資料の不備などについては，本調査において補充する予定である。

Ⅱ．3種類の数占い

1. pwe

Satawal 島では，ココヤシの葉をもちいておこなう数占いのことを，pwe とよんでいる。カロリン諸島のほとんどの島で，同種の占いがおこなわれていたことが，各島に関する民族誌に記されている。その上，各島における数占いについての名称を調べてみると，ほぼ共通していることがわかる。たとえば，Yap 島では bei [Furness 1910: 130]，Fais 島では be [Lessa　1959: 188]，Woleai 島では be [Sohn and Tawerilmang　1976: 7]，Ifalik 島では bweng [Burrows and Spiro　1957: 235]，Puluwat 島では pwe [Elbert　1972: 139]，Namoluk 島では pwe [Girschner 1912: 199]，Truk 群島では pwe [Bollig　1927: 72] などである。

名称だけでなく，占いの方法もほぼ共通している。ココヤシの葉を爪で切りさき，

それに無作為に結び目をつくる。それから結び目の数をかぞえ，その数によって吉凶が占われる。占いにともなう儀礼などについては，島ごとに独自性があるが，占い方の基本は共通している。

これまでに蓄積された民族誌によると，ココヤシの葉をもちいる数占いとしては，2種類だけしか報告されていない。一つは4条のココヤシの葉片をもちいる場合であり，もう一つは2条の葉片をもちいる場合である。しかし，筆者が調査をおこなったSatawal 島では，そのほかに，1条の葉片だけをもちいておこなう占いもあった。つまり，Satawal 島では，ココヤシの葉をもちいる数占いには3種類あり，それぞれが固有の名前をもっている。1条のココヤシの葉片をもちいる占いは pweniyés，2条もちいる占いは pwenifiriytip，4条もちいる占いは pwenimmwáylong である。pwe という名称はこれらの3種類の数占いの総称としてもちいられている。しかし，一般的には，pwe という場合，4条の葉片をもちいる占いを意味している。それだけ，pwenimmwáylong が社会的に重要な占いだからである。

2. pweniyés

1条のココヤシの葉片をもちいておこなう占いが，pweniyés である。pwe は数占いの総称であり，yés は「ひとつ」を意味している。つまり，1条のココヤシの葉片だけで占うという意味である。この占いは，主として，失せ物がみつかるかどうかを占うときにもちいられる。そのほか，漁にでかけたカヌーが魚をたくさんとってくるかどうかを占うときにももちいられる。

占い方は簡単である。1条のココヤシの葉片に無作為に結び目をつくり，その数をかぞえる。その際に，5までかぞえると，また1にもどる。たとえば，結び目が13あったとすると，3が最後にのこる。問題となるのはこの最後にのこった数である。その数によって，占いの結果がきまる。したがって，この占いの場合には，5とおりの吉凶がありうる。

最後にのこった数が1の場合，súkúto とよばれ，その日が三日月の日をあれば，吉である。つまり，失せ物はすぐにみつかる。また，漁にでたカヌーがたくさんの魚をもってかえってくる。しかし，その日が三日月の日以外，たとえば満月の日であれば，凶である。失せ物はまだみつからないという占いになる。súkúto というのは，「あらわれる，みつかる」という意味である。

のこった数が2の場合，sowuŕuŕ とよばれ，その日が新月であれば，吉である。wuŕ は「あそぶ」を意味する。それ以外の言葉の意味は不明である。

3がのこった場合，liwoylong とよばれ，占いをした日が，半月であれば吉である。li は人間につける接頭辞である。それ以外の言葉の意味は不明である。

最後に，4と5がのこった場合には，その日が満月であれば吉である。ただし，この二つについては，名前があたえられていない。

いずれにしても，この pweniyés の場合には，最後にのこった数字と月の満ち欠けの相関関係によって，占いの吉凶がきめられている点が，一つの特徴となっている。pweniyés は占い方が簡単であるために，占いの専門家である sawpwe だけでなく，だれでも知っている。現在でも，漁にでたカヌーの帰りを待つ人が，カヌー小屋で，この占いをおこなっているのをみかけることがある。

3. pwenifiriytip

2条のココヤシの葉片をもちいる占いが pwenifiriytip である。pwe は数占いの総称，firiy は「よい」，tip は「気分，気持ち」をそれぞれ意味する。つまり，直訳すると，「気分がよいかどうかを占う」ということになる。なぜそのように名づけられたのかというと，むかしは，ほとんどの人が，朝おきて，まずはじめにこれをおこなって，その日の運勢を占っていたためである。つまり，その日一日をいい気分ですごせるかどうかを占ったことに由来している。

占い方は，pweniyés の場合と同様であり，ココヤシの葉片に無作為に結び目をつくり，その数をかぞえるだけである。ただし，この占いの場合には，pweniyés とはことなり，4までかぞえると，1にもどる。たとえば，結び目が13あれば，最後にのこる数は1である。そのようにして，2条の葉片に結び目をつくるので，二つの数が最後にのこることとなる。そして，その二つの数の組みあわせによって，吉凶が占われる。

この占いでは，最終的に，1から4までの数が二つのこることになるので，数の組みあわせとしては，つぎの16とおりの可能性がある。つまり，1+1[2)]，1+2，1+3，1+4，2+1，2+2，2+3，2+4，3+1，3+2，3+3，3+4，4+1，4+2，4+3，4+4である。Satawal 島では，この16とおりの数の組みあわせにそれぞれ固有の名前と吉凶があたえられており，それにもとづいて，占いの結果をうることになる（表1を参照）。

現在の Satawal 島においては，キリスト教の影響で数占いがほとんどおこなわれ

2) 以下，本稿においては，ココヤシの葉片の占いから生じる数の組みあわせを記す場合に，＋記号をもちいることにする。

表1　数の組みあわせの名前と吉凶

①	(1+1)	Tinifak Lukunkuruw	吉
②	(1+2)	Saupes Apinimwapis	凶
③	(1+3)	Lipul Metankainang	凶
④	(1+4)	Pukonimar Raangama	吉
⑤	(2+1)	Inipwai Faanmukorou	凶
⑥	(2+2)	Inaman Mesanweraimw	凶*
⑦	(2+3)	Maomoi Nenimat	吉
⑧	(2+4)	Inimain Faanmukat	吉
⑨	(3+1)	Langaperan Mwarikuor	吉
⑩	(3+2)	Mesauk Esiru	吉
⑪	(3+3)	Taulap Faanpwerpwer	吉
⑫	(3+4)	Lironiwan Faanmeseran	吉
⑬	(4+1)	Inifar Lamwonaur	吉
⑭	(4+2)	Inifou Farikai	吉
⑮	(4+3)	Pweigak Faaynemo	凶
⑯	(4+4)	Sawiya Kassupai	吉

* ただし，満月のときだけ，吉となる。

なくなったが，キリスト教がはいる以前には，すべての成人男子が毎朝，この占いをおこなっていたといわれている。16とおりの組みあわせを記憶すればすむことなので，専門の占い師でなくとも，だれでも知っていたのである。

4. pwenimmwáylong

4条のココヤシの葉片をもちいる占いが，pwenimmwáylong である。pwe は数占いの総称，mmwáy は「よりよい，よりすぐれている」，long は方向を指示する接尾辞で「……の内に」の意である。つまり，気分がよりよいものとなるかどうかを占うということを意味している。

占い方は，まずはじめに1枚のココヤシの葉をとってきて，それを親指の爪で四等分に切りさき，それぞれに結び目を無作為につくる。それらを，写真1のように，小指と薬指のあいだ，薬指と中指のあいだ，中指と人差し指のあいだ，人差し指と親指のあいだに，それぞれはさみ，結び目の数をかぞえる。その際に，pwenifiriytip の場合と同様に，4までかぞえると1にもどってかぞえなおしていく。そのようにして，最終的に四つの数がのこることとなる。ついで，小指と薬指のあいだと薬指と中指のあいだにはさんだ2条の葉片にのこった数を組みあわせる。そうすると，pwenifiriytip の場合と同様に，16とおりの組みあわせの可能性をえる。同じやり方で，中指と人差し指のあいだと人差し指と親指のあいだにはさんだ2条の葉片にのこった数を組みあ

わせる。ついで，それらの二つの組みあわせを，さらに組みあわせる。その結果，16とおりの組みあわせの可能性と同じく16とおりの組みあわせの可能性がかさなるので，最終的には16の二乗，つまり256の組みあわせの可能性が生じることになる。

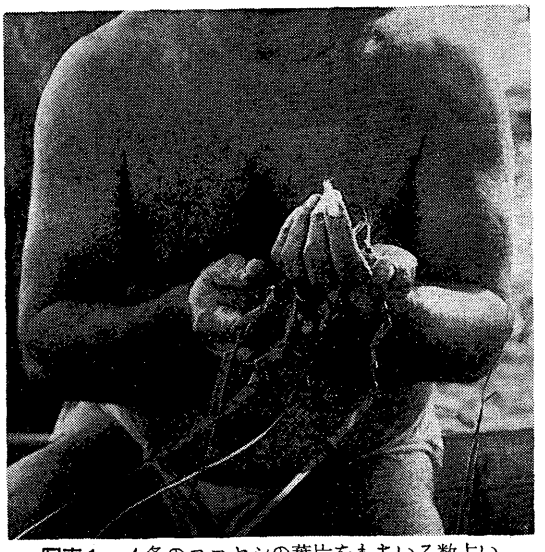

写真1　4条のココヤシの葉片をもちいる数占い

Satawal 島では，この256の組みあわせのことを koran とよび，それぞれに固有の名前と吉凶があたえられている。その上に256の koran のそれぞれが名前の由来伝承をもっている。それらの名前の由来伝承の詳細については後述する。

この pwenimmwáylong は，専門の占い師によってのみおこなわれる。他の人びとは，占い師のもとにいって，占いをしてもらう。本稿では，以下において，この pwenimmwáylong に焦点をあわせて記述をおこなうことにする。したがって，以下において，数占いという場合，pwenimmwáylong のことを意味する。

Ⅲ．数占いの宗教的背景

1．数占いの起源伝承

1）Satawal 島の伝承

Satawal 島をはじめとする中央カロリン諸島の島々でおこなわれていた数占いは，固有の伝統的宗教との密接な関連性のなかにおいて成立していたものである。そのような数占いの宗教的背景を知るための足がかりとして，まずはじめに数占いの起源に関する伝承をとりあげることにする。以下に記す伝承は，Lamonur 氏が語ってくれたものである。

一隻のカヌーが天上世界 (weilang) から地上世界 (weisal) におりてきて，住む

ところをさがしもとめた。まずはじめに，Kusaie 島を発見し，そこに住みついた。けれども，4カ月間だけ，そこにとどまったのちに，ふたたび西にむけて船出した。Kusaie 島をでてから，まずはじめに，Ponape 島に立ち寄り，ついで Truk 群島と Puluwat 環礁をおとずれた。Puluwat 環礁をでてから，間もなくApinyanu と名づけられた海域で，カヌーの乗組員の一人である Inifar がカヌーの最前席にすわりたいことから，そのとき最前列にすわっていた Pukonimar にケンカをしかけた。結局，Inifar が争いに勝って，最前席をしめ，Pukonimar は最後尾にまわることとなった。

それから，カヌーはなおも西にすすみ，Ifalik 環礁にたどりついた。その夜，カヌーの乗組員の一人である Tinifak が海にとびこんで，島まで泳いでいった。島についてから，人を探したが誰一人みつからなかったので，浜辺の大きなカヌー小屋にいったところ，そこに一人の男がいた。その男は皮膚病におかされていた。Tinifak はカヌー小屋の前にきて立ちどまり，小屋の男にむかって，「お前はだれだ」とたずねた。すると，その皮膚病の男は，「俺は俺だ」とこたえた。それから，男は Tinifak にむかって，「お前はだれだ」とたずねた。それに対して，「わたしは Tinifak だ」とこたえた。すると，その男は，「この島では，そのような名前は耳にしたことがない。いったい，お前はどこからきたのだ」とふたたびたずねた。それにこたえて，Tinifak は「わたしののったカヌーがつい先ほど，この島にたどりつき，カヌーはいま環礁のなかに入るための水路の入り口のところに停泊している。カヌーからは，わたしだけがおりてきた」といった。かさねて，その皮膚病の男は，「お前はどこにいくつもりだ」とたずねた。Tinifak は「われわれは定住するための島をさがしもとめている」とこたえ，それからなおもつづけて，「われわれはすぐにこの島をでていくけれども，この島でわれわれが住むことができる場所をつくっておいてくれないか」とその男にたのんだ。そして別れぎわに，「わたしの名前は Tinifak だ。それだけは忘れないようにしてくれ」と言いのこして，その場を去った。

Tinifak が去ってから，その皮膚病の男は，自分のいるカヌー小屋の前のところを，Tinifak が自由に出入りできる場所とした。

Ifalik 環礁をでたカヌーは，Yap 島にむかった。Yap 島に少しだけとどまったのちに，またすぐにそこを出発して，ふたたび東にむかい，Ifalik 環礁にもどってきた。Ifalik 環礁についた日の夜に，Tinifak がふたたび海にとびこんで，泳いで島にむかった。島にたどりついた Tinifak は，すぐに皮膚病の男のいるカヌー小屋にむかった。その男はやはりカヌー小屋のなかにいた。Tinifak はその男にむか

って,「自由に出入りできる場所をさだめておいてくれたか」とたずねた。すると,男は「もちろんだとも,このカヌー小屋の前がそれだ」とこたえた。そのことに満足した Tinifak は,その皮膚病の男に,「数占いを教えてやろう」といった。

それから,Tinifak は,その男に数占いを教えはじめた。まずはじめに,Tinifak は「われわれのカヌーには,16人がのっている。わたしの名前は Tinifak だ。のこりの者たちをかぞえあげてみよう」といって,16人の名前をよみあげていった。「Pukonimar Raangama, Saupes Apinimwapis, Inimain Faanmukat, Lipul Metankainang, Maomoi Nenimat, Lironiwan Faanmeseran, Sawiya Kassupai, Pweigak Faaynemo, Mesauk Esiru, Langaperan Mwarikuor, Inifou Farikai, Inipwai Faanmukorou, Inifar Lamwonaur, Taulap Faanpwerpwer, Inaman Mesanweraimw」。そして最後に,「わたしは Tinifak Lukunkuruw だ」といった。それから,数占いのことをくわしくはなしてきかせた。そして,皮膚病の男もそれを一生懸命おぼえた。

そののちに,Tinifak はカヌーにもどった。それからまた,カヌーは東へむかい,ふたたび Kusaie 島にもどった。しかし,ほどなくしてから,島を出発した。Kusaie 島をでてから,このカヌーの palú をつとめる Koran が Kusaie 島と Ngatik 環礁のあいだにある,Apunguror と名づけられた海域にいこうといった。そして,そこについたときに,Koran は海にとびこみ,一つのリーフのところまで泳いでいった。リーフにたどりついた Koran はカヌーにむかって,「お前たちはいけ。わたしはここにとどまる」とさけんだ。そこで,カヌーは Koran をおきざりにしたまま,Truk 群島にむかった。

Truk 群島についたのちに,またすぐに北西にむけて航海し,Namonuito 環礁についた。ついで,西にむかい,Yap 島にもどった。それから,ふたたび東にすすんでから南にくだり,Mortlock 群島にいった。それから,なおも東にむかい,ふたたび Ponape 島についた。

Ponape 島についてから,Yununkuwao と名づけられた浜辺にむかった。カヌーがそこについたとき,全員がその浜辺に上陸した。Taulap が先頭をきって歩いた。ところが,Taulap は浜辺の穴のなかに落ちてしまった。かれは,穴からはいあがろうとしたけれども,どうにもならなかった。そのあいだに,カヌーは Taulap をそこにおきざりにしたまま,Kusaie 島にむかって,出発した。

Kusaie 島についたカヌーは1年間,そこにとどまった。それから,ふたたび Ponape 島にもどり,Taulap をさがしもとめた。カヌーが Ponape 島のまわりを

めぐり，Taulap が穴に落ちこんだ浜辺にきたとき，そこに一人の男がたたずんでいた。その男の髪の毛は真白であった。ところが，その男が Taulap であった。1年のうちに，白髪になってしまったのである。これが Taulap が Faanpwerpwer[3] というもう一つの名前をつけられた理由である。このカヌーにのっている者たちが，天上世界からおりてきたときには，全員，名前は一つだけしかもってなかった。ところが，地上世界についてから，あちらこちらの島の人びとがカヌーにのっている全員に，もう一つの名前をあたえたのである。

Taulap を助けてから，カヌーはふたたび Ponape 島を出発した。そして，カヌーは，いつまでもこれらの島々のあいだをいったり，きたりしていて，決して天上世界にはもどっていかなかった。

2)　Namoluk 環礁の伝承

Satawal 島の伝承と同様の内容をもつ伝承が，Namoluk 環礁で記録にとどめられている。Satawal 島の伝承と比較検討するために，ここにそれを記しておく。なお，この Namoluk 環礁の伝承はドイツ人学者の Max Girschner がいまから約70年前に記録にとどめたものである [Girschner　1912: 200]。

Supunemen は，数占いのカミ[4] である。ところが，かれの体にはいたるところに，できものがあった。あるとき，かれはそれらのできものをすべて体から取りさって，地面においた。するとそれらは，みるみるうちに大きくなって，人間となった。そこには全部で16人いた。Supunemen はかれらにむかって，「森にいき，木を切りたおして，カヌーをつくれ」と命じた。16人は，2日間のうちに，カヌーをつくりあげた。

16人はそのカヌーにのって，地上におりていった。まずはじめに，Ngatik 環礁についた。しかし，その環礁の入り口のところで座礁した。そこをうまく脱してから，西にむかい，Ifalik 環礁に到着した。そこの海岸で Sukau という名前の男が水浴びしているのに出会った。Sukau は16人が島にあがることを許さなかった。しかし，Supunemen がかれを説きふせたので，全員が島にあがることができた。火をおこしたのちに，一つの小屋で寝ることになった。けれども，その小屋が狭かったので，Supunemen は16人をまた元通りのように，できものとして自分の体に

3) faan は「…の下に」，pwerpwer は「白い」の意であり，白髪のもとにあるということになる。

4) Girschner は，Supunemen のことを Gott des Himmels と記しているだけで，それに対応する現地語を記録していない [Girschner　1912: 200]

つけなおした。

あくる朝になって，Sakau が小屋にやってきて，Supunemen をみてびっくりした。Supunemen の体にできものがたくさんできていたからである。そこで，Supunemen はその男にむかって，「おどろくことはない。われわれはカミなのだ」といった。それから Supunemen は，体中のできものをとって地面においた。すると，それらはふたたび人間になった。それから，かれらは Sukau に数占いを教えた。

Ifalik 環礁をでたカヌーは，Puluwat 環礁にむかった。島についたとき，Pukonimar が「島にいこう」といったが，Supunemen は「わたしはこの島がきらいだ」とこたえた。そのために，カヌーは Puluwat 環礁には立ち寄らずに，Truk 群島にむかった。Truk 群島に立ち寄ったのちに，Losap 環礁，Namoluk 環礁，Etal 環礁，Satawan 環礁，Lukunor 環礁などに立ち寄り，それぞれの環礁で一人の男をえらんで，数占いを教えた。

それから，カヌーは Ngatik 環礁にもどることにした。しかし，島がなかなかみつからなかった。そうしているうちに，Oroluk 環礁をみつけた。その途中で女であった Inaman が月経の血でよごれた。それをみた，カヌーの palú である Sawiya は直ちに，「お前は女だ。このカヌーからでていけ」とさけんだ。それを聞いて，Inaman はカヌーから海にとびこんだ。Supunemen は乗組員の一人に命じて，丸太を海に放りなげてやった。Inaman はその木につかまって，Ngatik 環礁まで泳いでいくことができた。Inaman は島にたどりついてから，海辺の近くにはえている net という木の下にすわった。

カヌーが Ngatik 環礁についても，Inaman はカヌーにはもどらなかった。そこで，Inipwai が Inaman をつれもどすために島まででむいていった。それでもまだもどってこないので，Mesauk がいき，Inaman を Supunemen のもとにつれもどした。全員で協議した結果，Inifau が Ngatik 環礁の人びとに数占いを教えることに決まった。Inifan は早速，Ngatik 環礁にいき，数占いを教えた。

そのつぎに，カヌーは Ponape 島に立ち寄った。Ponape 島をでてから，Pingelap 環礁にいき，Langaperan がそこで数占いを教えた。ついで，Mokil 環礁にいき，Lipul が数占いを教えた。

Mokil 環礁を出発してすぐに，Supunemen は「すべての仕事を終えたか」とたずねた。カヌーの全員が「はい」とこたえた。そして，「天上にもどろう」ということになった。カヌーは Mokil 環礁をでてから，天上にもどっていき，二度とふ

たたび地上にはもどってこなかった。

2. 数占いと yaanú

Satawal 島と Namoluk 環礁における数占いの起源伝承を比較検討することによって，数占いと伝統的宗教の関わりがいくつかの点であきらかとなる。

まず第一に，天上世界に数占いをつかさどる超自然的存在がおり，それが地上世界におりてきて，人間に数占いを教えた，とみなされている点が重要である。キリスト教が入る以前の Satawal 島においては，人びとは三つの異なる世界の存在をみとめていた [土方　1975: 418–419]。それらは，天上世界 (weilang)，地上世界 (weisal)，海底世界 (faalilong) である。そして，人間は地上世界にだけしかすむことができないが，超自然的存在は三つの世界のどこにでもすむことができるとかんがえられていた。

これらの超自然的存在のことを，Satawal 島の人びとは yaanú とよんでいる。それは超自然的存在のすべてをさしており，精霊，幽霊，死霊，動物霊，悪霊などが同一のカテゴリーに含まれている。

天上世界にいる yaanú のなかに，とくに数占いをつかさどる yaanú が存在することを人びとはみとめていた。Namoluk 環礁の場合には，起源伝承の冒頭に，「Supunemen が数占いのカミである」とのべられている。しかし，Satawal 島の伝承では，この点が明確にはされていない。そこで，筆者が Lamonur 氏にたずねたところ，「数占いの yaanú は，Supuniman である」と教えてくれた。おそらく，Namoluk 環礁で認知されている Supunemen と同じ yaanú であるとおもわれる。

数占いと yaanú の関係でもう一つ重要な点は，Namoluk 環礁の伝承でもあきらかなように，Supunemen が16人の人間らしきものを創造して，それらを地上におくり，人間に数占いを教えたとかんがえられていることである。Satawal 島では，この16人の人間らしきもののことを，yaanúyeŕemas とよんでいる。yaanú は超自然的存在の総称であり，yeŕemas は「人間」の意である。したがって，yaanúyeŕemas を直訳するならば「神人」ということになる。超自然的存在でもあり，人間でもある存在である。これらの16人の yaanúyeŕemas は数占いと密接な関わりをもっており，次節でその関係をもう少しくわしく検討する。

3. 16人の yaanúyeŕemas

前章で，数占いについて略述した際に，結び目の数の組みあわせによって，吉凶が

定められているとのべたが，実は16人の yaanúyeŕemas は，それらの数の組みあわせをそれぞれがになっているのである。

より具体的にいうならば，2条のココヤシの葉片をもちいておこなう占いである，pwenifiriytip の場合，最終的に二つの数がのこることになり，その二つの数が16とおりの組みあわせをつくる可能性のあることをすでに略述した。その16とおりの数の組みあわせを，これらの16の yaanúyeŕemas がそれぞれになっているのである。表1に示した，16とおりの数の組みあわせの名前というのは，実は16人の yaanúyeŕemas の名前そのものである。そのため，占い師である，sawpwe が数の組みあわせについていうときには，数をそのまま口にすることはなく，かならず yaanúyeŕemas の名前でよんでいる。たとえば，占いをしていて，最終的に4と4がのこった場合には，ただ単に sawiya というだけである。

そしてまた，pwenimmwáylong のように，4条のココヤシの葉片をもちいるときには，二つの数の組みあわせが二つできるので，その場合には，二人の yaanúyeŕemas が組みあわされたものとして表現される。たとえば，1+1と1+2の組みあわせの場合には，Tinifak me Saupes と表現される。この場合の me は「……と……」という意味である。占いそのものが，数の組みあわせというよりも，yaanúyeŕemas の組みあわせとして表現されるのである。

このように，16人の yaanúyeŕemas が16とおりの数の組みあわせをになっており，それらの yaanúyeŕemas の相互関係によって，吉凶が定められていることになる。しかし残念ながら，起源伝承のなかには，yaanúyeŕemas 相互間の具体的な関係についてなにもかたられていないので，吉凶が定められた理由については不明である。

つぎにもう一つ重要な点は，16人の yaanúyeŕemas の名前についてである。16人はそれぞれ固有の名前をもっているが，Satawal 島の伝承でもあきらかなように，それぞれが二つの名前をもっている。たとえば，1+1をになう Tinifak は，正式には Tinifak Lúkúnkuruw とよばれている。このうち，前者の名前は天上世界にいるときにすでにあたえられていたとみなされているのに対して，後者の名前は地上世界で人間によって名づけられたとされている。たとえば，Satawal 島の伝承のなかで，3+3をになう Taulap が Ponape 島の海辺の穴に落ちて，1年後にふたたびあらわれたときには，白髪となっており，そのために Faanpwerpwer という名前があたえられたとされている。おそらく，16人の yaanúyeŕemas のすべてについて，命名がなされた理由が伝承のなかでかたられていたはずであるが，前述の伝承のなかには，Taulap 以外については何もかたられていない。その点がはっきりとしておれば，16

人の yaanúyeŕemas の相互関係がもう少し明確なものとなり，吉凶が定められた理由も解明しえたかもしれない。

4. 数占いのカヌー

数占いの起源伝承の検討を通じて，もう一つあきらかなことは，数占いをつかさどる，Supunemen が16人の yaanúyeŕemas に命じて，カヌーをつくらせ，そのカヌーにのって地上にくだり，カロリン諸島の島々をめぐって数占いを教えた，とかんがえられている点である。その背景には，Satawal 島の人びとが，天上世界においても地上世界とまったく同じ生活がいとなまれているとみなしていたこととの関連がある [土方　1975]。天上世界の yaanú も地上世界の人間と同じようにカヌーにのり，同じような生活をいとなんでいるとみなされていたのである。

Namoluk 環礁では，このカヌーのことを，wanepwe とよんでいる [Girschner 1912: 200]。直訳すると，まさに「数占いのカヌー」ということになる。それに対して，Satawal 島では，このカヌーのことを，waanikoran とよんでいる。直訳すると，「Koran のカヌー」ということになる。伝承のなかでもあきらかなように，Koran もやはり yaanúyeŕemas の一人であり，天上世界を出発したときには，かれがこのカヌーの palú であった。そのために，「Koran のカヌー」とよばれたのである。なお，伝承のなかには登場しなかったが，この waanikoran にはもう二人の yaanúyeŕemas がのっていたとかんがえられている。それは，Ligenge と Recha の二人である。この二人は，1条のココヤシの葉片をもちいておこなう占いである pweniyés に関わりがあるらしいが，pwenimmwáylong とはまったく関係がないために，伝承には登場していない。したがって，waanikoran が天上世界を出発したときには，Supuniman と19人の yaanúyeŕemas がのっていたことになる。ただし，Namoluk 環礁の伝承には，Koran, Ligenge, Recha のことがまったくふれられていない。

この数占いのカヌーに関して，もう一つ重要な点は，カヌーにおける yaanúyeŕemas の座席が明確に定められていることである。たとえば，Satawal 島の場合には，図2のごとくに，yaanúyeŕemas の座席が定められている。ただし，Koran と Ligenge と Recha の座席については不明である。また，Supuniman はカヌーの中心部にある，帆柱をたてるための穴の部分にいるとみなされている。

これらの16人の yaanúyeŕemas がカヌーのどの位置にすわるかによって，16人の相互関係が確定され，それによってそれぞれがになう数の組みあわせの吉凶が定められるという調査報告もあるが [松岡　1943: 156–161]，それは Saipan 島における数

占いの事例であり，Satawal 島においてはその点は不明である。この点については，他の島々における数占いを比較考察する際に，あらためて論ずる予定である。

この数占いのカヌーについて，もう一つ重要な点は，このカヌーがカロリン諸島の主要な島々をおとずれて，数占いを教えてまわったとかんがえられている点である。Satawal 島の伝承に登場する島々を東から列挙すると，Kusaie 島，Ponape 島，Truk 群島，Mortlock 群島，Namonuito 環礁，Puluwat 環礁，Ifalik 環礁，Yap 島である。それに対して，Namoluk 環礁の伝承では，Pingelap 環礁，Mokil 環礁，Ponape 島，Ngatik 環礁，Oroluk 環礁，Lukunor 環礁，Satawan 環礁，Etal 環礁，Namoluk 環礁，Losap 環礁，Truk 群島，Puluwat 環礁，Ifalik 環礁の島々があげられている。この二つの伝承を総合すれば，カロリン諸島の主な島々のほとんどすべてが含まれることになる。このことは，カロリン諸島のほとんどの島々で数占いがおこなわれていたとする民族誌の成果に符合するものである。

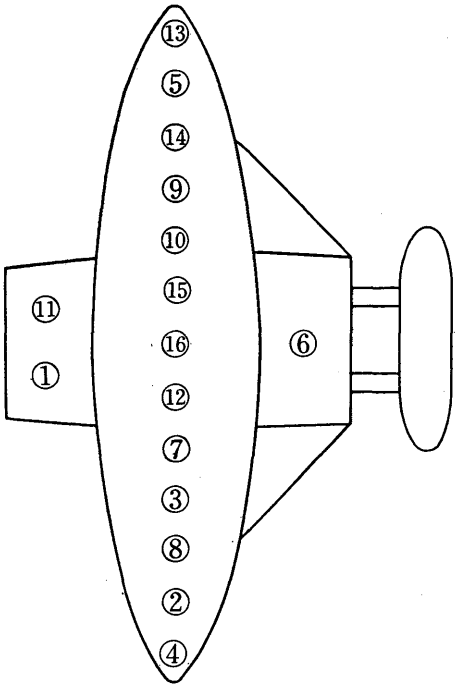

図2　Satawal 島の数占いのカヌー
図中の番号は表1の yaanúyeŕemas の番号に準じている

最後に，Namoluk 環礁の伝承によれば，数占いのカヌーは多くの島々をおとずれたのちに，天上世界に帰っていったことになっている。しかし，Satawal 島の伝承によれば，カヌーは二度と天上世界に帰っていくことはなく，地上世界にとどまっているとされている。Lamonur 氏は，数占いのカヌーが地上世界にとどまっていてくれるからこそ，占いの際に，占い師が，yaanú の助力を直接うけることができると教えてくれた。この点については，次章の数占いの方法のところで詳述する。

Ⅳ．数占いの基本体系

1. 占いの方法

Satawal 島において数占いをおこなう場合，二通りのやり方がある。一つは儀礼を必要とする場合であり，もう一つは儀礼を必要としない場合である。このうち，儀礼が必要となるのは，島全体に関わる問題と島の酋長 (samwol) の氏族 (yainang) に関わる問題について占いをする場合だけである。現在ではもうすでにおこなわれなくなったが，1930年代ごろまでは，毎年一回定められたときに，島の sawpwe が全員集まって，島のむこう一年間の運勢を占ったそうである。

そのような儀礼をともなう数占いのことを，wúnpwelap といい，それに参加できるのは，samwol と palú と sawpwe だけであったといわれている。また，そこで占われたのは，むこう一年間のうちに，パンノキの実がたくさんとれるかどうかとか，魚がとれるかとか，大きな台風がこないかとか，samwol に不幸がないかとか，遠距離の航海にのりだしてもよいかなどといった事柄であった。このような wúnpwelap に対して，それ以外の日常的におこなわれる数占いについては，一切の儀礼が不要であった。

ここで，儀礼をともなう場合の数占いの方法について順をおってもう少しくわしく記すことにする。

1) その日，占いを担当する sawpwe は，朝3時ごろに起きて，まずはじめに水浴びをして，体を清める。それから，数占いの儀礼がおこなわれるカヌー小屋にいき，海にむかってすわる。

2) 一方，同じころに，もう一人の sawpwe が，占いにもちいるココヤシの葉をとりにでかける。その場合に，真東にあるココヤシの木から葉をとらなければならない。真東ということの意味は，天上世界からおりてきた，数占いのカヌーである，waanikoran が Kusaie 島の方向，つまり真東の方向から，Satawal 島にやってくるからである。

そしてまた，占いにもちいるヤシの葉はかならず若葉でなければならない。Satawal 島では，このココヤシの若葉のことを wupwut とよんでいる。占いに若葉をもちいる理由については，Truk 群島の人びとは，若葉を人間の子供と同じにみたてて，決してウソをつかないからであるといっている [Bollig 1927: 66–67]。

Satawal 島では，ココヤシの若葉は各種の儀礼にもちいられており，けがれを清める意味があるとかんがえられている。

3)　ココヤシの若葉の枝を切りとる前に，まずはじめに，葉に手をかけて，ゆっくりとゆさぶる。眠っているココヤシの yaanú をおこすためである。そのときに，つぎのような呪文 (ŕong) をとなえる。

yiruruni yaipwe menemeni yaipwe
yiruruni yaipwe menemeni yaipwe
yitoŕofi pwe fir pwe man pweniwaai Luukaayláng
pue yipue rik faan
pue yimmanau ngeyimmanau
わたしの数占いよ起きよ　わたしの数占いよ強くなれ　わたしの数占いよ起きよ　わたしの数占いよ強くなれ　わたしはよい数占いを得た　わたしは強い数占いを得た　わたしは Luukaayláng[5] の数占いのカヌーを得た　わたしはいっしょにいく
わたしは気分がいい　わたしは気分がいい

4)　それから，ココヤシの枝を一本だけ切りとる。切るときに，またつぎのような呪文をとなえる。

woor ngeringer　woor ngeringer
woor manaman　woor manaman
woor ngeringer　woor ngeringer
woor manaman　woor manaman
いまから切る　いまから切る
力を切る　力を切る
いまから切る　いまから切る
力を切る　力を切る

5)　ココヤシの枝を切りとった sawpwe は，それをもって，もう一人の sawpwe が待つ，カヌー小屋へいく。小屋に近づいていくときに，つぎのような呪文をと

5) Luukaayláng は天空の至上神のことである。luuk は「中心，中央」，láng は「天空」の意。

なえながら，枝葉を手渡す。

yurakya wusapya　yurakya wusapya
ikkawuwa fatúlán waanikoran
pue yápeyipeyi lalamwon ii Yarau
nga yurakya wusapya
ikkawuwa fatúlán waanikoran
pue yapeyipeyi lalamwon ii Fanopei
nga yurakya wusapya yurakya wusapya
ikkawuwa fatúlán waanikoran
pue yápeyipeyi lalamwon ii Ruk
nga yurakya wusapya
ikkawuwa fatúlán waanikoran
pue yápeyipeyi lalamwon ii Polowat
nga yurakya wusapya yurakya wusapya
ikkawuwa fatúlán waanikoran
pue yapeyipeyi non ii Yapinyani
nga yiptiweni wóóy
nga yetiweni ee wóóy

わたしは期する　わたしは信じる　わたしは期する　わたしは信じる
わたしは Koran のカヌーを漕ぐのをやめる
そして Kusaie 島まで流れていく
わたしは期する　わたしは信じる
わたしは Koran のカヌーを漕ぐのをやめる
そして Ponape 島まで流れていく
わたしは期する　わたしは信じる　わたしは期する　わたしは信じる
わたしは Koran のカヌーを漕ぐのをやめる
そして Truk 群島まで流れていく
わたしは期する　わたしは信じる
わたしは Koran のカヌーを漕ぐのをやめる
そして Puluwat 環礁まで流れていく
わたしは期する　わたしは信じる

わたしは Koran のカヌーを漕ぐのをやめる
そして Yapinyani[6] まで流れていく
わたしのもとに来たれよ
わたしのもとに来たれよ

6) ココヤシの枝をもらいうけた sawpwe は，yingiyóór という木の小枝で，ココヤシの葉を軽くはたいてまわる。ココヤシの葉についている，悪い yaanú を追いはらうためである。そのときにもまた，つぎのような呪文をとなえる。

renefen pai renfen mesai
renefen pai renfen mesai
me faaylang me faaylewop　me pway kiyobrara
epue bul o epue bul
o epue mana epue mana
epue bul o epue bul
o epue mana epue mana
epue bulobulota wóóy
nge epue manamanata wóóy
epue bulobulota wóóy
nge epue manamanata wóóy
epue bul epue man
手を清めよ　目を清めよ
手を清めよ　目を清めよ
天空よ　海底よ　そして kiyobrara の木よ
輝け　輝け
強さよ　強さよ
輝け　輝け
強さよ　強さよ
わたしのために輝いておくれ
わたしのために強くなっておくれ
わたしのために輝いておくれ

6) Yapinyani は，Puluwat 環礁と Satawal 島のあいだの海の名前である。

わたしのために強くなっておくれ
輝け　強さよ

7)　そのあとで，一握りの葉を枝から切りとる。それを右手にもって，開いた左手の手のひらにむかって軽くたたく。このときに，先ほどの一番最後の呪文をふたたびとなえる。この瞬間に，数占いの yaanúyeŕemas たちが，右手にもった，ココヤシの若葉にとりつくとかんがえられている。

8)　ついで，右手にもった若葉を，頭，胸，両肩にあてる。すると，数占いの yaanúyeŕemas たちが sawpwe の体全体にとりつくといわれている。このときにもやはり，一番最後の呪文をとなえる。

9)　それから，一枚の葉をとりだして，爪でそれを四等分に切りさく。それらを，左手の小指と薬指のあいだ，薬指と中指のあいだ，中指と人差し指のあいだ，人差し指と親指のあいだにはさみ，無作為に結び目をつくっていく。そのときに，占いをする事柄を口ずさみつづける。

10)　4条の葉片に結び目をつくりおえると，ふたたび小指の方から順番に，結び目の数をかぞえていく。そのときに，4までくると，また1にもどるようにしてかぞえる。

11)　その結果，1から4までの数が四つのこることとなる。たとえば，小指と薬指のあいだに1がのこり，同じく薬指と中指のあいだに2，中指と人差し指のあいだに3，人差し指と親指のあいだに4がのこったとすると，1と2で第一の組みあわせができ，3と4で第2の組みあわせができることになる。つまり，(1+2)(3+4)という2つの組みあわせということになる。そのような数の組みあわせによって，吉凶が占われる。

12)　4条のココヤシの葉片に，それぞれ1から4までの数のうちから一つがのこるので，第一の組みあわせに16とおりの数の組みあわせの可能性が生じ，第二の組みあわせも同様であるので，結局，256とおりの数の組みあわせが生じることとなる。

Satawal 島の人びとは，この256の数の組みあわせのことを koran とよんでいる。天上世界を出発したときのカヌーの palú の名前にちなんだものである。

13)　sawpwe は，256の koran を記憶しており，占いによってえた数の組みあわせに応じて，吉凶の判断を下すことになる。

14)　占いをおえると，もちいられたココヤシの葉はすべて集められ，sawpwe が手にもって自分の所有するココヤシの木のところまでもっていき，その木の下におく。

ただし，そこはあまり人のこないところでなければならない。とくに，女性が近寄りがたいところがのぞましい。占いにもちいたココヤシの葉を木の下におくとともに，yaanúyeŕemas は sawpwe の体からはなれるといわれる。それをもって数占いの儀礼は終了する。

2. 256の koran

前述のような所定の手順どおりに数占いをおこなうと，最終的に256の koran のうちの一つをうることになる。それによって吉凶が占われる。その意味で，数占いでもっとも重要なのは，この 256 の koran である。以下において，Satawal 島における256の koran の名前とその由来伝承および吉凶を記すことにする。

1) (1+1)(1+1) lúkúnkuruw 吉

Pulsuk 島に住む一人の男が，仕事にでかける前に占いをした。すると，この組みあわせをえた。これは吉なので，すぐに仕事にでかけた。昼すぎに仕事をおえて，ため池のところで水浴びをして，汗をながした。そのとき，突然，一人の男に襲われた。しかし，はげしい格闘の末に，うまく相手を殺すことができた。それ以来，この組みあわせは，lúkúnkuruw とよばれるようになった。lúkún は「……のそと，……のはずれ」の意。Kuruw は，Pulsuk 島の一つの地名である。

2) (1+1)(1+2) sawlúk 吉

一人の男が戦闘に参加すべきかどうかを占ったところ，この組みあわせをえた。これは吉なので，戦闘に加わった。はげしい殺しあいの末に，この男は無傷でもどってくることができた。saw は「人」の意。lúk は lúkúúk の略で，「信じること」の意。したがって，sawlúk は「信じる人」となる。この組みあわせを吉と信じて，戦闘に加わり，無事に生きてもどってきたからである。

3) (1+1)(1+3) mesanimw 凶

むかし，ある一人のよそ者（他の島からきた者）が，島のなかの一軒の家の前を横切ろうとしたときに，その家の人びとにつかまり，殺された。他の島からきた者は，その島の酋長の許可がないかぎり，島のなかを自由に歩きまわることができない。よそ者は浜辺のカヌー小屋でおとなしくしていなければならない。この男はその禁を犯したために殺されたのである。mesan は「前，顔」，imw は「家」の意。したがっ

て，mesanimw は「家の前」の意。

4)　(1+1)(1+4)　faanparam　凶

Truk 群島の Fefan 島に住む一人の男が命をねらわれていたので，Param 島まで泳いでにげることにした。そこで，占いをしてもらったところ，この組みあわせをえた。これは吉なので，すぐに出発した。しかし，Param 島を目前にして，サメにおそわれ，命をおとした。それ以来，この組みあわせは，凶とみなされるようになった。faan は「……の下，……のあいだ，……の近く」の意。その男が，Param 島の近くで命をおとしたからである。

5)　(1+1)(2+1)　yerónkeraw　凶

むかし，Pingelap 環礁の各地で激しい殺し合いがおこなわれた。その最中に，一人の男が死の恐怖を感じて，島をぬけだすことにした。かれは Kusaie 島にげることにしたが，カヌーでいくと，他の人にみつかるので，泳いでわたることにした。島をでる前に占いをしてもらったところ，この組みあわせをえた。これは吉なので，島を出発した。その男は，Kusaie 島の近くまでなんとか泳いでくることができたが，島を目前にして，力つきてしまい，おぼれ死んだ。それ以来，この組みあわせは凶とみなされるようになった。yerón は「……の近く」の意。Keraw は Kusaie 島のことである。

6)　(1+1)(2+2)　yaangmworomeyasa　吉

一隻のカヌーが航海中に，突然，epeep 側から強い風をうけたために，帆がやぶれてしまった。しかし幸いにも，マストはたおれなかった。嵐がおさまってから帆を修理し，無事に島に帰ることができた。そのために，吉である。yááng は「風」，me は「……と……」，yasa は「カヌーの epeep 側もしくは風下側」の意。mworo は mworomwor の略で，「短い」の意。

7)　(1+1)(2+3)　fááyronfine　吉

一人の男が戦闘に加わる前に，占いをしてもらったところ，この組みあわせをえた。これは吉なので，戦闘に加わったところが，多勢に無勢で殺されそうになったので，必死でその場をのがれた。追っ手の目をくらますために，隠れ場所をさがしたが，よいところが見つからなかった。ちょうどそのとき，大きなフィネ芋の葉が生い茂って

いるところを見つけたので，その葉の下にかくれた。おかげで追っ手に見つかることなく助かることができた。fááy は「……の下」，ron は「葉」，fine は「フィネ芋」の意。したがって，fááyronfine は「フィネ芋の葉の下」の意。

8)　(1+1)(2+4)　wórapinnu　凶

一人の男が，朝，仕事にでかける前に占いをしてもらったところ，この組みあわせをえた。これは吉なので，仕事にでかけた。男はココヤシの実をとるために木にのぼった。ココヤシの実をたたきおとしたのちに，その木から降りようとして，ココヤシの葉をもったところ，その葉の根もとがくさっていたために，その葉もろとも地面に落ちて，頭を強く打って死んだ。それ以来，この組みあわせは凶となった。wó は「……の上に，……に」，rapin は「根もと」，nu は「ココヤシの木」の意。したがって，wórapinnu は「ココヤシの木の根もと」の意。

9)　(1+1)(3+1)　fanuwas　凶

一人の男が決闘にでかける前に占いをしてもらったところ，この組みあわせをえた。これは吉なので，すぐにでかけた。その男と相手の男はナイフをもって決闘をした。格闘をしているうちに，その男は相手の男が切りかかったのをとめきれずに，腹を刺されて死んだ。それ以来，この組みあわせは凶とみなされるようになった。fanuwas は金属製のナイフのことを意味する。

10)　(1+1)(3+2)　riimweiru　凶

一人の男が戦闘に加わる前に占いをしたところ，この組みあわせを得た。これは吉なので，戦闘に参加したが，無惨にも頭を割られて死んでしまった。それ以来，この組みあわせは，凶とみなされるようになった。riimw は「頭」の意。eiru の意味は不明。

11)　(1+1)(3+3)　yanut　吉

Namonuito 環礁の Pisarach 島の男たちのあいだで，はげしい殺しあいがおこなわれた。その最中に一人の男が死の恐怖を感じて，島をぬけだすことにした。そこで，占いをしたところ，この組みあわせをえた。これは吉なので，この男は，同じ環礁のなかの Orol 島をめざして泳いでいくことにした。そして，無事に島につくことができた。泳ぎついたところは，Orol 島の東の端であり，Yanut と島の人々によばれているところであった。それ以来，この組みあわせは，その地名にちなんで名づけられ

ることになった。

12)　(1+1)(3+4)　ppinang　吉

一隻のカヌヌーが嵐にまきこまれて，こなごなにこわれてしまった。カヌーの乗組員は全員，海に投げだされた。はげしい荒海のなかで，全員が散り散りばらばらとなった。そのうちの一人の男だけが泳いで，近くの無人島にたどりつくことができた。その無人島は Mortlock 群島の一つの小さな島で，Ppinang と名づけられていた。他の乗組員は全員死亡したが，この男一人が助かったので，吉である。ppi は一般的には「砂浜」を意味するが，木がまったくないような砂浜ばかりの小さな島のことを意味する場合もある。人が住んでいるか，もしくは無人島でも植生が豊富な島のことを，Satawal 島では fanú といっている。

13)　(1+1)(4+1)　komway　吉

息子がカヌーででかけようとしていたときに，父親が息子のために占いをした。すると，この組みあわせをえた。これは吉なので，父親が息子に出発してもよいと告げた。息子はでかけたが，夕方になっても，帰ってこなかった。そこで父親は，息子の身に何かが起ったのではないかとおもった。しかし夜遅くになってから，息子は無事にもどってきた。ko は「あなた」，mway は「遅い」の意。

14)　(1+1(4+2)　yunirangmeyasa　吉

一隻のカヌーが航海をしていて，突風をうけて転覆した。突風は epeep の方向からきたので，epeep が上になったかたちで転覆した。乗組員全員が海に投げだされたが，すぐにカヌーをもとどおりにして，全員がカヌーにはいあがった。ちょうどそのときに，サメが襲ってきた。しかし，一瞬の差で，全員無事であった。yunirang の意味は不明。me は「……と……」，yasa は「カヌーの epeep 側，もしくは風下側」の意。

15)　(1+1)(4+3)　wónikosur　凶

Elato 環礁の一つの島に石干見があった。この石干見は，Sauwen という一つの yainang のものであった。その yainang 以外の者が，石干見の魚をとることは禁じられていた。それにもかかわらず，他の yainang の者がこっそりとやってきて，石干見のなかの魚を盗んだ。しかし，ちょうどその現場を目撃され，捕えられ，きびし

い罰が加えられた。wóni は「……のなか」, kosur「石干見」の意。したがって，直訳するならば，「石干見のなか」ということになる。盗人が石干見のなかで捕えられたからである。しかし，これは Elato 環礁の一つの地名でもある。

16)　(1+1)(4+4)　lamwyoŕu　吉

一隻のカヌーが Eauripik 環礁の近くで遭難し，乗組員全員が海に投げだされた。しかし幸いにも，全員泳いで，Eauripik 環礁の一つの島にたどりつくことができた。そのうえに，島の人びとも，かれらを歓迎した。そのために吉である。lamw は「礁湖」の意。yoŕu は yoŕupik の略で Eauripik 環礁の意。

17)　(1+2)(1+1)　lesakiy　吉

一人の男が命をねらわれていた。この男は，夜になるといつも，自分が夜のあいだ無事にすごせるかどうかを占った。すると，いつもこの組みあわせをえた。かれは寝るときに，いつもタコノキの葉製のマットで身をくるんでもらったのち，それを家のなかの棚のうえにおいてもらって寝ることにしていた。そのために，夜になって，命をねらう者たちがかれをさがしにきても，いつもかれをみつけだすことができなかった。それ以来，この組みあわせを，この男の名前，つまり Lesakiy をもちいて，よびならわすことになった。

18)　(1+2)(1+2)　yápinimwapwiis　凶

この組みあわせの伝承は不明である。yápin は「底，土台，基礎」, imw は「家」, pwiis は「穴」の意である。

19)　(1+2)(1+3)　ppiyárikárik　凶

一隻のカヌーが島の近くで座礁した。島が近かったので，乗組員はカヌーをすてて，泳いで島にむかった。しかし，途中でサメに襲われた。乗組員のほとんどがサメのえじきとなったが，一人の男だけがサメの襲撃をかわして，海辺の近くまで泳いでにげのびることができた。しかし不幸にも，そこで力がつきてしまい，結局，ふたたびサメに襲われて死んでしまった。ppi は「浜辺」, yárikárik は「疲れた」の意。

20)　(1+2)(1+4)　wonnimwarwow　吉

Truk 群島の Tol 島の Wonei の男たちが大きな手漕ぎカヌーにのって，漁にでか

けた。島を相当離れたところにある漁場についてから，一人の男だけをカヌーに残して，全員が海にとびこんで漁をした。カヌーに残った男は見張り役であり，あたりを見まわしていた。すると，遠くに別の島のカヌーの一群がみえた。そこで急いで，ホラ貝を吹きならした。ホラ貝の音をきいた男たちは一斉にカヌーのところにもどってきた。全員がカヌーにのりこんだときには，もうすでに多数のカヌーがまわりをとりかこんでいた。これらのカヌーにのっているのは，敵対関係にある島の男たちであった。かれらが襲ってくる気配がしたので，Wonei のカヌーのリーダーは，この包囲をなんとしてもやぶらなければならないとおもった。何かよい方策はないものかとあたりを見まわしたときに，多くのカヌーのなかに，二人乗りの小さなカヌーがいるのをみつけた。そこで，そのカヌーに体当りをして包囲をやぶることに決めた。

まずはじめに，その小さなカヌーとは反対の方向に少しだけカヌーをすすめた。すると包囲していたカヌーは，進路をさまたげるために，一斉にその方向に集まってきた。その一瞬の機会をとらえて，カヌーは進行方向をかえて，小さなカヌーをめがけて突進した。大きなカヌーの体当たりをうけた二人乗りのカヌーはあえなく沈没した。その混乱に乗じて，Wonei のカヌーはうまく包囲をやぶり，追っ手をかわしてにげきることができた。wonnimwar は「衝突する」の意であるが，Satawal 島では parúngiy の方が一般的にもちいられている。wow は「外へ，外側へ，海側へ」などの方向を指示する接尾辞である。

21)　(1+2) (2+1)　lefaikit　吉

Pulap 環礁の Tamtam 島の近くに，Lefeikit とよばれる小さな島があった。その島には，2人の兄弟とその妹の3人だけが住んでいた。そこで Tamtam 島の人びとは，その3人を島から追いだそうとこころみた。3人はどこにげたらよいかを占った。すると，この組みあわせをえた。これは吉なので，どこにもいかずに，その島にとどまって，かくれていた。そうしているうちに Tamtam 島の人びとが島にやってきたが，3人をみつけだすことができなかった。それ以来，この組みあわせは，その島の地名にちなんで名づけられるようになった。

22)　(1+2) (2+2)　yawúúriimw　凶

一人の男が命をねらわれてにげまわっていた。かれは，夜になっても，一睡もせずにげまわっていた。ある夜，その男は自分の家のなかにかくれていた。そのとき，かれは，敵がきたら，すぐにげだせるように立ってかくれていた。しかし，疲れが

たまっていたので，立ったままで，うとうととまどろんでしまった。ちょうどそのときに，敵がやってきて，かれの頭を強打した。その一撃で男はあえなく最期をとげた。ya は「彼」，wúú は「立つ」，riimw は「頭」の意。

23)　(1+2)(2+3)　lúkúnpuwe　凶

一人の男が命をねらわれて，にげまわっていた。ある日，その男は数人に襲われたが，うまくその場をにげだすことができた。しかし，puwe と名づけられた家のところまできたときに，ついに追っ手につかまり，殺された。そのために凶である。lúkún は「……の外」の意。

24)　(1+2)(2+4)　wonnimwarlong　吉

これは，(1+2)(1+4) の伝承につづくはなしである。敵の包囲をうまく脱した，Wonei のカヌーは，これから進むべき方向を占ったところ，この組みあわせをえた。これは吉であり，自分たちの島の方向にカヌーを進めて，無事にたどりつくことができた。wonnimwar は「衝突する」，long は方向を指示する接尾辞で「内へ，陸側へ」の意である。

25)　(1+2)(3+1)　liingeŕ　吉

Truk 群島の一つの島に大へんな美男子が一人いた。その島の男同士のあいだではげしい争いがおこなわれていたときに，その美男子も戦闘に加わることになり，占いをした。すると，この組みあわせをえた。これは吉なので，生きてもどれると確信して，争いに加わった。やがて，はげしい争いがおわり，その男は無事にもどってきた。しかも，美しい顔をまったく傷つけることがなかった。liing は「美しい」の意。

26)　(1+2)(3+2)　sóópwoorfas　吉

Namonuito 環礁の Orol 島に住む，一人の男が命をねらわれていた。そのため，男は夜があけるといつも泳いで，Orol 島と Pisarach 島とのあいだにある，リーフのところにいき，そこに身をかくしていた。そして，夜になるとまた泳いで，島にもどってきた。その男の命をねらっていた連中は，どこをさがしてもみつからないので，やがてかれを殺すことをあきらめてしまった。sóópw は「……の端，……のおわり」の意。Woorfas は，Orol 島と Pisarach 島のあいだの海の名前である。なお，中央カロリン諸島においては，すべての島と島のあいだの海には，それぞれ固有の名前が

あたえられている。

27)　(1+2)(3+3)　sarongpwe　吉

一隻のカヌーが Eauripik 環礁から Woleai 環礁にむけて航海することになった。出発前に占ったところ，この組みあわせをえた。これは吉なので，すぐに船出した。ところが夜になって，一人の男があやまって海に落ちてしまった。カヌーは付近の海上をくまなくさがしたが，結局，その男はみつからなかった。そこで，カヌーはそのまま航海をつづけることになった。カヌーにのっている者たちは，海に落ちた男がサメのえじきになったのだとおもった。ところが，その男は海に落ちたけれども無事であり，一人で泳いで，Eauripik 環礁に帰りつくことができた。それ以来，この組みあわせは，その男の名前にちなんで，名づけられることになった。

28)　(1+2)(3+4)　yitánsaw　吉

これは一人の男の名前である。この男はたいへんに力が強いことで有名であった。かれは毎朝，占いをしていたが，いつもこの組みあわせをえた。そして，かれは，いつも命をねらわれていたが，何度おそわれても，いつも襲った男たちを簡単に撃退することができた。そのために，この組みあわせは，その男の名前にちなんで名づけられることとなった。これは人の名前ではあるが，yitán は「その名前」，saw は「熟練者，専門家」を意味している。

29)　(1+2)(4+1)　likiteiwal　吉

一隻のカヌーが航海にでることになり，占いをしたところ，この組みあわせをえた。この組みあわせはもともと，yáliruwow とよばれ，吉であったので，すぐに船出をした。ところが，その夜，大嵐にまきこまれて，帆やマストなどをすべてなくしてしまった。乗組員は全員無事であったが，ただ波にまかせて漂流するのみであった。幾日かがすぎて，食料がまったくなくなったので，全員が死を覚悟せざるをえなかった。しかし，幸いにも，カヌーはある一つの島に無事漂着し，全員が助かった。それ以来，この組みあわせは，この幸運なカヌーの名前である，likiteiwal にちなんで名づけられることになった。

30)　(1+2)(4+2)　yelirang　吉

これは男の名前である。この男がもう一人の男と決闘をすることになり，でかける

前に占いをした。すると，この組みあわせをえた。これは吉なので，その男は決闘にでかけた。そして，占いのとおりに，決闘に勝ち，無事にもどってくることができた。つぎの日にも，別の男と決闘をすることになり，そのときにもでかける前に占ったところ，またこの組みあわせをえて，無事にもどってくることができた。それ以来，この組みあわせは，その男の名前にちなんで，名づけられることになった。

31)　(1+2)(4+3)　tetteŕaylowmar　凶

数人の男が，lowmar と名づけられたカヌー小屋で，格闘術の手ほどきをうけていた。それを聞きつけた一人の男が，その家にむかった。その男は腕力が強く，かれらの腕前をためすつもりででかけたのである。その男がカヌー小屋のなかにはいろうとしたときに，手ほどきをうけていた一人がすぐにつかみかかり，その男を軒下に押したおした。そして，一人の男がはがいじめにし，別の男が首をしめつづけたので，ついにその男はなすすべもなく，絶命した。そのために凶である。tetteŕay は「家の軒下」の意。

32)　(1+2)(4+4)　yewúúriimw　凶

力強い男が一人いた。多くの男たちがかれを殺そうとこころみたが，反対に殺されてしまった。けれども，まだほかの多くの男たちがかれの命をねらっていた。ある晩，かれが家で寝ているときをねらって，数人の男たちが家のなかに押し入った。その男がちょうど寝込んだところであったので，なんの抵抗もなく殺すことに成功した。ye は意味不明。wúú は「立つ」，riimw は「頭」の意。したがって，yewúúriimw は「枕もとに立つ」という意である。

33)　(1+3)(1+1)　nirápinyiŕu　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，rápin は「土台，底部」，yiŕu は「家屋の柱」の意。

34)　(1+3)(i̇+2)　malúkanweniimw　吉

一人の男が命をねらわれていた。男はいつも夕方になると，無事に夜をすごせるかどうかを占った。するといつもこの組みあわせをえた。それから，その男は，夜に家のなかで寝ているところをおそわれるのをおそれて，いつも家の屋根のうえに寝ていた。そのために，命をねらっている連中は，かれの姿をみつけることができなかった。

malúk は「ニワトリ」, weni は「……の上」, imw は「家」の意。つまり,「屋根の上のニワトリ」の意である。その男が, ニワトリと同じように, 夜になると, 屋根の上にあがって, 寝ていたからである。

35)　(1+3)(1+3)　metangailang　凶

この組みあわせの伝承は不明。ただし, この名前は Woleai 語であり, metan は「……の前」, gailang は母系親族集団の意。Satawal 島では, この集団のことを, yainang とよんでいる。

36)　(1+3)(1+4)　ppimáálo　凶

この組みあわせの伝承は不明。ただし, ppi は「浜辺, 砂浜」, máálo は「死ぬ」の意。

37)　(1+3)(2+1)　yapeliiywow　吉

Pulusuk 環礁の一つの島に, Yapeliiywow という名前の男がいた。この男は命をねらわれていたので, 夜になると, いつも一つのリーフのところまで泳いでいって, そこに身をかくしていた。そして, 朝になると, また陸にあがってきた。そのために命は無事であった。peliiy は「ころがる」, wow は方向を指示する接尾辞で「外へ, 海へ」の意。つまり, この男が夜になると, いつもころがるようにして, 海の方へにげていくことにちなんだものである。

38)　(1+3)(2+2)　ripwul　吉

この組みあわせの伝承は不明。

39)　(1+3)(2+3)　wamwakik　凶

この組みあわせの伝承は不明。ただし, これは Woleai 語で, wa は「カヌー」, mwakik は「こなごなにこわれる」の意。

40)　(1+3)(2+4)　faanpwalang　吉

一人の男が命をねらわれてにげまわっていた。ある日, 数人に追われているときに, pwalang という木の下に身をかくした。そのために, 追っ手はその男をみつけることができなかった。faan は「……の下」の意。

41)　(1+3)(3+1)　nimwáŕsawi　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，mwár は mwáŕamwár の略で「花かざり」，sawi は「ホラ貝」の意。

42)　(1+3)(3+2)　lamwuŕmaan　吉

一つの小さなサンゴ礁の島があった。そこは無人島であったが，島のなかに小さな湖があった。そのために，無数の鳥がそこにあつまっていた。近くの島の人たちは，しばしばこの無人島をおとずれて，鳥やその卵をとった。

一方，占いをしていて，この組みあわせをえると，いつでも結果は吉であった。そこで，この有益な鳥の島にちなんだ名前をつけることとなったのである。lamw は「礁湖，もしくは小さな湖」，wuŕ は「遊ぶ，たわむれる」，maan は「鳥」の意。つまり，島の小さな湖でたわむれる鳥たちという意味である。

43)　(1+3)(3+3)　woonikar　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，woo は woopw の略で，タコノキの花の名前である。

44)　(1+3)(3+4)　taniruwlong　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，long は方向を指示する接尾辞で「内へ」の意。

45)　(1+3)(4+1)　yówoŕuppi　凶

一隻のカヌーが嵐のなかを航行していた。ようやく，前方にかすかに，目的の島がみえた。しかし，嵐のためにカヌーの操船がおもうようにはかどらず，しだいにながされていき，結局，その島を見失ってしまった。そのために凶である。yóworú は yówoŕuuŕuu の略で「見つめる」，ppi は「浜辺」の意。

46)　(1+3)(4+2)　fawúnimesan Luukaayláng　吉

この組みあわせをえると，なにをおこなっても，かならずよい結果をえることができるので，この名前がついた。fawúnimesan は「眼球」の意。より正確には，fawú が「石，玉」，mesan が「顔」を意味する。Luukaayláng は「天空の至上神」の意で，キリスト教がはいる以前において，中央カロリン諸島のすべての島々でひろく信

仰されていた神である。luuk は「中心，中央」，láng は「天空」の意。

47)　(1+3)(4+3)　lúkúnyeer　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，これは，Puluwat 環礁の一つの島の地名である。lúkún は「……の外」，yéér は「南」の意。

48)　(1+3)(4+4)　wumwanutá　凶

この組みあわせの伝承は不明。ただし，wumwanu は「トウカムリ貝」，tá は方向を指示する接尾辞で「上へ，東へ」の意。

49)　(1+4)(1+1)　pelóókmwaiy　吉

一隻のカヌーが船出することになった。何人かの占い師が占った結果，吉凶がわかれた。そこで，カヌーの palú は，この組みあわせをえた占い師の占いを信じて船出をすることにした。このカヌーが島をでていったあと，占い師のあいだで論争があった。吉だから絶対無事にもどってくると主張する者と，凶だから無事にもどってこないと主張する者とが，論争した。結局，数日たってから，このカヌーは無事に島にもどってきた。それ以来，この組みあわせは，この名でよばれることになった。pelóók は「二股になった木」の意。mwaiy は mwamwaiy の略で「正しい」の意。つまり，占い師のあいだで意見が二つにわかれたけれども，結局，この組みあわせを吉とみなす占いの方が正しかったという意味である。

50)　(1+4)(1+2)　yitiilong　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，yitti は「行く」，long は「なかの方へ」の意。

51)　(1+4)(1+3)　fawúnwuurmaan　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，これは Puluwat 環礁で名づけられたものである。fawú は「石，果実」，wuur は「バナナ」，maan は「漂流する，漂着する」の意。つまり，流れついたバナナの実の意。

52)　(1+4)(1+4)　ŕaangmaa　吉

一人の占い師の息子がカヌーにのって遠洋航海をすることになった。父親が息子の

ために，占いをしたところ，この組みあわせをえた。これは凶なので，占い師は息子が航海にでるのをやめさせようとした。しかし，息子はもうすでに，他の仲間とともに船出の準備をおえて，もうすぐカヌーにのりこむところであった。そして，その体には，ウコンの粉をぬりたくっていた。ウコンの粉は魔よけのためにもちいられるものであり，各種の儀礼の際にもちいられるほか，長距離の航海にでるときにはかならず体にぬりつける習慣があった。海にすむ魔ものから，身をまもるためである。

父親は息子をみつけると，海辺へつれていき，息子の体のウコンの粉を洗いながした。それは，「航海にはでるな」という意志表示であった。息子はしかたなく父親にしたがって，カヌーにはのりこまなかった。息子が同乗する予定であったカヌーはそのまま船出をしたが，何カ月たっても島にはもどってこなかった。やはり，父親の占いが正しかったのである。それ以来，この組みあわせは，ŕaangmaa とよばれるようになった。ŕaang は「ウコンの粉」，maa は yamaamaa の略で「洗いながす」の意。

53)　(1+4)(2+1)　fááyccen　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，fááy は「……の下」の意。ccen はキダチルリソウの一種の名前。

54)　(1+4)(2+2)　saifetan　吉

Woleai 環礁の一隻のカヌーが，嵐にまきこまれて，漂流していた。カヌーの palú は，どこかの島に無事にたどりつくことができるかどうかを占った。すると，この組みあわせをえた。これは吉なので，全員助かるはずであった。結局，数日漂流した末に，ついに，一つのリーフを発見した。palú は，そのリーフが Saifetan と名づけられたところであることを了解した。かれは，そのリーフが Pulusuk 環礁の真南にあることを知っていたので，ほどなくして，Pulusuk 環礁にたどりつくことができた。それ以来，この組みあわせは，そのリーフの名前にちなんで名づけられることになった。

55)　(1+4)(2+3)　yaitiwow　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，これは，男の人の名前といわれている。

56)　(1+4)(2+4)　lúkúnwúwanpwer　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，lúkún は「……の外」，wúwan は「首」，pwer は「白」の意。

57)　(1+4)(3+1)　kayurak　凶

Satawal 島から北北西に約80キロメートルのところに，West Fayu 環礁がある。その島は無人島であるが，カメがたくさんとれるので，近くの島々からいつもカヌーがきていた。

あるとき，Lamotrek 環礁からきたカヌーが West Fayu 環礁でカメをとっていた。ところが，別の島からもカヌーがきており，ほどなくしてから，両島のカヌーの乗組員のあいだで争いがおこり，Lamotrek 環礁からきていた一人の男が殺された。この組みあわせは，その殺された男の名前にちなんで名づけられたものである。

58)　(1+4)(3+2)　laisamwar　吉

この組みあわせの伝承は不明。

59)　(1+4)(3+3)　lúkúnmetawanpwiin　凶

この組みあわせの伝承は不明。ただし，lúkún は「……の外」，metaw は「海」，pwiin は「魚の群」の意。

60)　(1+4)(3+4)　wanuŕaang　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，ŕaang は「ウコンの粉」もしくは「黄色」の意。

61)　(1+4)(4+1)　yeŕonfais　吉

一隻のカヌーが，嵐にまきこまれたあと，洋上を漂流していた。食料もなくなったので，乗組員は全員，飢え死にするしかないとおもった。そこで，palú が占いをしたところ，この組みあわせをえた。この組みあわせは吉なので，全員助かるはずであった。それからまもなく，カヌーは Fais 島に漂着し，全員助かった。yeŕon は「……の近く」，Fais は「Fais 島」の意。

62)　(1+4)(4+2)　maitanur　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，これは，Sorol 環礁の一つの水路の名前である。

63)　(1+4)(4+3)　mesanyáárrikirik　凶

この組みあわせの伝承は不明。ただし，mesan は「……の前」，yáár は「水路」，rikirik は「小さい」の意。

64)　(1+4)(4+4)　yunermo　吉

この組みあわせの伝承は不明。

65)　(2+1)(1+1)　sawolimeran　吉

大昔，Olimarao 環礁と Elato 環礁のあいだでしばしば戦争がくり返された。あるとき，Elato 環礁の人びとが Olimarao 環礁を攻撃することに決め，カヌーをつらねて Olimarao 環礁の近くまできた。それをみた Olimarao 環礁の人びとは，すぐに戦いの準備をするとともに，島の占い師にこの戦いに勝てるかどうかを占ってもらった。すると，この組みあわせをえた。これは吉なので，全員勇気づけられて，敵をむかえうつことができた。そして，占いのとおりに，戦いに勝利することができた。それ以来，この組みあわせはこのようによばれるようになった。saw は「人間」，Olimeran は「Olimarao 環礁」の意。なお，Olimarao 環礁は現在，無人島となっている。

66)　(2+1)(1+2)　lefailap　吉

Pulap 環礁の Tamtam 島で，一人の男が命をねらわれていた。かれは，毎日，無事にすごせるかどうかを占った。すると，いつもこの組みあわせをえた。そして，かれはいつも敵がくると，Lefailap と名づけられた場所にいって身をかくした。そこは，隠れ場所としては最適のところであり，いつも見つかることはなかった。そのために，この組みあわせはその地名にちなんで名づけられたものである。

67)　(2+1)(1+3)　raku　吉

一人の男が命をねらわれていた。ある晩，その男が他の多くの男といっしょに寝ているところを襲われた。襲撃した相手方は，目的の男が真中に寝ているものとおもって，中央で寝ている男を殺した。ところが，それは目的の男ではなかった。命をねらわれている男は，その混乱に乗じて，うまくにげだすことができた。だから吉である。raku は「ひっつきあう」を意味する。多くの男が，一つの家のなかでひっつきあって寝ていたからである。

68)　(2+1)(1+4)　lesattumwar　吉

ある島で，一人の男が命をねらわれてにげまわっていた。にげる途中で，占いをしたところ，この組みあわせをえた。これは吉であったので，その男は，Lesattumwar という名前の老女の家ににげこんだ。その老女は容姿がたいへんみにくいために，嫌われ者であった。その男を追う人びとは，島中のすべてのところをさがしまわった。しかし，この老女のところだけは立ち寄らなかった。なぜなら彼女は嫌われ者であり，人びととつきあいがなかったので，男がそこにいるとはおもわなかったからである。結局，それが幸いして男はうまくにげのびることができた。それ以来，この組みあわせはその老女の名前にちなんで名づけられることになった。

69)　(2+1)(2+1)　faanmwukorou　凶

Woleai 環礁の Raiur 島に住む男がカヌーにのって，Gaferut 島にいくことになり，出発前に吉凶を占った。すると，この組み合わせをえた。これは吉なので，船出をした。そのとき，この男の妻は妊娠 9 カ月の身重であった。夫は妻に出産のときまでにはかならずもどってくるといって出発した。しかし，出産のときになっても夫はかえってこなかった。あげくに難産で，結局，その男の妻は死んでしまった。妻の死後，彼女の霊が Gaferut 島にいき，夫をさがしだして，殺してしまった。夫が約束をまもらなかったからである。それ以来，この組みあわせは凶とみなされるようになった。faan は「……の下」の意。mwukorou は意味不明。

70)　(2+1)(2+2)　sóópwóórmá　凶

Namonuito 環礁の一人の男が，Magur 島から Orol 島までカヌーで出かけていった。しかし，途中で，Sakurpor と名づけられた暗礁にのりあげてしまい，カヌーがこわれた。あげくにその男も死んでしまった。そのために，凶である。sóópw は「……の端，……のおわり」，wóór は「暗礁」，má は「死ぬ」の意。つまり，暗礁の端で座礁して死んだことを意味している。

71)　(2+1)(2+3)　yafisan　吉

一人の男がいつも決闘にでかける前に占い師のところにきて，生きてもどってこれるかどうかを占ってもらった。すると，いつもこの組みあわせをえた。それは吉であったので，決闘にでかけた。そして，いつも占いのとおりに，無事であった。何度もそういうことがくりかえされたので，その占い師は，自分の名前をこの組みあわせのよび名にすることに決めた。

72)　(2+1)(2+4)　faayiyolap　吉

一人の男が，ある兄弟に命をねらわれていた。しかし，その島の人びとは，その兄弟よりも，命をねらわれている男の方に好感をもっていたので，だれもがその男をかくまった。そのために，男は無事であった。faayiyo は「申し訳なくおもう」，lap は「大いに，たいへん」の意。

73)　(2+1)(3+1)　waanik　吉

数人の男が手漕ぎカヌーで魚釣りにでかけた。しかし，その日はまったく魚がとれなかった。夕方になって，島にかえることになったが，そのうちの一人の男が疲労と空腹のためにたおれてしまった。同行の者たちは，その男がそのままカヌーのうえで死んでしまうのではないかとおもい，急いで島にかえった。島についてから，すぐにカヌー小屋に寝かせた。知らせをきいた母親がとんできた。それからすぐに息子にどのような処置をほどこしたらよいかを占ってもらった。母親は息子の大好物の食べものを食べさせてよいかどうか占ってもらった。すると，この組みあわせをえた。それは吉であったので，母親は家に帰り，タロイモのうち，waaniko とよばれる種類のものをたたきつぶして，だんご状にして，息子にたべさせた。すると，ほどなくして，息子は元気を回復し，もとどおりのからだとなった。それ以来，この組みあわせは，そのタロイモの名でよばれることとなった。

74)　(2+1)(3+2)　yápinwóópwuŕ　凶

一隻のカヌーが航海中に，風向きがかわったので，帆柱を置きかえることになった。帆柱をはずして，カヌーのもう一方の端に移しかえるときに，帆を張る下桁の部分が，一人の男のこめかみにあたり，その男は死んでしまった。yápin は「底，土台，下部」の意。wóópwuŕ は「帆を張る下桁の一部分」の名称である。

75)　(2+1)(3+3)　láyipwe　吉

一人の男がカヌーで航海することになり，占いをしてもらった。すると，一人の占い師がこの組みあわせをえた。それは吉であった。ところが，他の占い師は全員，別の組みあわせをえた上に，それらはすべてが凶であった。そのために，その男は船出をとりやめるように申しわたされた。しかし，この男は吉と占ってくれた占い師の占いを信じて船出をすることにした。数日たってから，そのカヌーは無事に島にかえってきた。やはり吉であった。láyi は「私の」，pwe は「数占い」の意。

76)　(2+1)(3+4)　likapilong　吉

Woleai 環礁の Wottagai 島に住む一人の男が命をねらわれていた。その男は，毎日，どこにかくれたらよいかを占っていた。かれはいつも，Wottagai島の Likapilong と名づけられたところを隠れ場所としていた。そこで，Likapilong にかくれてよいかどうかを占ったところ，いつもこの組みあわせをえた。これは吉であったので，そのとおりにしていたところ，相手にみつかることなく無事であった。そのために，この組みあわせは，その地名にちなんで名づけられることになった。

77)　(2+1)(4+1)　sepeal　吉

一人の男が海に漁にいく前に占いをしたところ，この組みあわせをえた。これは吉なので，漁にでていった。その日はカヌーでの漁ではなく，泳ぎながらの魚釣りであった。魚釣りをおえて，泳いで島に帰りかけたときに，サメに襲われた。かれは足をかまれたけれども，サメの攻撃をなんとかかわして，浜辺までたどりつくことができ，一命をとりとめた。それ以来，この組みあわせは，その運のよい男の名前にちなんでよばれることとなった。

78)　(2+1)(4+2)　wuuwameyat　吉

流木 (yápeyipeyi) がながれてきたので，早速，魚とりにでかけることになった。なぜなら，流木のまわりには，多くの魚がつきまとっているからである。カヌーをだす前に，占いをしたところ，この組みあわせをえた。これは吉なので，数隻のカヌーがでていった。そのうちの一隻が，流木にとりつけるための大きな筌(うけ)をもっていた。何人かの男が海にとびこんで，筌を流木にとりつけた。その仕事をおえたのちにカヌーにはいあがった。ところが，最後の一人がまだ海中にいるときに，突然，サメが襲ってきた。その男は流木の横にとりつけた筌のうえにとびのって，サメの攻撃をかわした。その間に，カヌーがすぐにその男の近くに寄っていき，無事に助けあげた。wuu は「大きな筌」，wa は「カヌー」の意である。そして，meyat はサメにおそわれて一命をとりとめた男の名前である。

79)　(2+1)(4+3)　yeránwa　凶

数人の男がカヌーで魚とりにでかけることになり，その前に占いをした。すると，この組みあわせをえた。これは吉なので，すぐにでかけた。漁場にきて錨をおろし，全員が海にとびこんで魚とりをはじめた。しばらくしてから，サメがあらわれたので，

男たちはつぎつぎとカヌーにはいあがった。しかし，一人だけにげおくれた男がおり，サメのえじきとなった。そのために，凶である。yeŕon は「……の近く」，wa は「カヌー」である。つまり，カヌーの近くまでにげてきて，サメにかまれたことを意味している。

80)　(2+1)(4+4)　faanwupwuwupw　凶

一人の男が決闘にいくことになり，占いをしてもらった。すると，この組みあわせをえた。これは吉なので，決闘にでかけた。その男はナイフをもって，もう一人の男と闘った。ナイフでうまく切りつけて，相手に深手をおわした。けれども，相手は素手ながら反撃にでた。その結果，かれはその男にみぞおちを強打され，その一撃であえなく事切れてしまった。faanwupwuwupw というのは，格闘術の一つの技法を意味している。しかしそれの文字どおりの意味は，faan が「……の下」，wupwuwupw が「たたく」である。

81)　(2+2)(1+1)　yaangmormetaam　吉

一隻のカヌーが航海中に突風をうけて転覆した。突風はアウトリッガーの方向からきたので，アウトリッガーが上になるかたちで転覆をした。このとき，カヌーには一人の女性がのっていた。女性がカヌーにのったときにはカヌーの epeep 側にいるのが普通であった。そのため，転覆したときに，女の人は epeep 側にいたので，海のなかにもろになげだされることとなった。すぐにカヌーをもとどおりにして，全員がカヌーにはいあがり，女性をひきあげたとたん，サメが襲ってきた。しかし，一瞬の差で全員無事であった。そのために，吉である。yaang は「風」，me は「……と……」，taam は「アウトリッガー」の意。mor は意味不明。

82)　(2+2)(1+2)　maal　吉

一人の男が夜中に突然，数人の敵に襲われた。しかし，やみ夜であったので，うまく相手の目をかすめることができた。そして，その男は海の方ににげ，近くのサンゴ礁に身をかくして，夜中のあいだ中，そこにとどまった。それから夜明けとともに，島にもどり，無事に仲間に助けられた。そのために吉である。maal は「夜明け」の意。

83)　(2+2)(1+3)　mwoc　凶

一人の男が魚釣りにでかけて，mwoc とよばれる魚を数匹釣った。夕方に帰ってき

たが，その日は疲れていたので，魚は明朝たべることにした。しかし，ヤシ酒をとるために，ココヤシの木にだけはのぼった。そのときに，釣った魚をカゴにいれて，自分のココヤシの木のうえにおいてきた。

あくる朝になって，その男は，まずはじめに，その日がよい日かどうかを占った。すると，この組みあわせをえた。それは凶であった。それを聞いた人々は，その男に今日一日はよくないことがあるといった。しかし，その男はそれを一笑に付した。なぜなら，今日は昨日釣ってきた魚がたくさんあるので，仕事をしなくてもよい日だからである。男は早速，魚のはいったカゴをとるために，ココヤシの木の上にのぼった。ところが，そこにはカゴがなかった。だれかがそのカゴを盗んだのである。だから，やはり凶であった。mwoc は魚の一種の名前である。

84)　(2+2)(1+4)　mesantówúŕikon　吉

一人の男が海に漁にでる前に，自分自身で占いをしたところ，この組みあわせをえた。それは吉なので，早速，漁にでかけた。一日の仕事をおえて，島に帰る途中，環礁にはいるための一つの水路を通過しようとしたときに，カヌーが暗礁にのりあげてしまった。その結果，カヌーがこわれ，ほとんどの乗組員が死んだが，かれだけが助かった。そのために，吉である。mesan は「……の前」，tówúŕ は「環礁への入り口」水路の意。kon の意は不明。

85)　(2+2)(2+1)　puutiyéér　吉

一人の男が命をねらわれていた。ある朝，占いをしたところ，この組みあわせをえた。それは吉なので，その日一日も無事だとおもった。しかし，その日，数人の男におそわれて島のなかをにげまわった。まずはじめに，島の北の方ににげたが適当な隠れ場所がみつからなかった。そこで，西の方，東の方をさがしたがよいところがなかった。結局，島の南端にきたときに，一本の木があり，その木陰にかくれた。追っ手は近くまできたが，その木の美しい花に目をとられて，その男をみつけることがなかった。puutiy は yapuutiy の略で，「花を耳のところにつける」という意味である。ミクロネシアやポリネシアの島々では，男が自分の耳のところに花をつけることが一般的におこなわれている。その男が隠れるために身をよせた木に咲く花は，匂いがとてもよく，耳かざりとしてよくもちいられるものであった。yéér は「南」の意。

86)　(2+2)(2+2)　mesanweraimw　凶

一人の男が家の屋根のふきかえをしていて，あやまって，地面に落ち，首の骨を折って死んだ。そのために，凶である。mesan は「……の前」，imw は「家」の意。wera は意味不明であり，言葉のひびきをよくするために挿入したという説明があった。

87)　(2+2)(2+3)　fááylet　吉

Woleai 環礁の一つの島に仲のよい二人の兄弟がいた。かれらは毎日，大きな筌をもって漁にでかけて，魚をとっていた。かれらの父親は占い師であった。そこで，ある日，かれらは漁にでかけずに，筌を海岸の近くの木につるしたまま，父親のところにいき，占いの力をたしかめることにした。かれらは父親に今日，筌をしかけたので，魚がとれるかどうかとたずねた。そうとは知らずに，父親が占ってみると，この組みあわせをえた。これは吉なので，息子たちにすぐにしかけた筌のところにいくようにいった。息子たちは父親をからかっていただけであったが，念のため笑いながら，筌をつるした木のところにもどった。すると，そこには筌がなかった。二人でさがしたところ，それは海岸近くの海のなかにあった。しかも，筌のなかには，魚がたくさんはいっていた。二人はおどろいて，魚をとりだし，父親のもとにいった。fááy は「……の下」の意。let はある種の木の名前である。したがって，fááylet は「let という木の下」の意。木にぶらさげていた筌が，風にゆられて下に落ち，そこに魚がはいっていったのである。

88)　(2+2)(2+4)　tálúk　吉

むかし，Ifalik 環礁の各地で激しい戦闘がおこなわれたときに，二人の兄弟が死の危険を感じて，島をぬけだすことにした。二人は，Woleai 環礁まで泳いでいくことに決め，占いをした。すると，この組みあわせをえた。これは吉なので，二人は出発した。しかし，途中で，兄の方が力つきてしまい，そのまま海のもくずとなった。兄の死に接した弟は，自分ももう助からないとおもった。だがさいわいなことに，弟の方は無事に Woleai 環礁にたどりつくことができた。tá は Ifalik 語で否定の際にもちいられる。Satawal 語では sá となる。lúk は lúkúúw の略で，「信じる」の意。したがって，tálúk は「信じない」ということになる。兄の死に接した弟が，自分は助かると信じなかったために，このような名前があたえられたのである。この組みあわせはまた，tálúkfawú ともよばれる。fawú は「石，岩」の意である。しかし，普通には，tálúk という略したかたちの方がもちいられる。

89)　(2+2)(3+1)　meŕowŕow　吉

一人の男がカヌーで漁にでる前に占い師のところにきて，今日，魚がとれるかどうか占ってもらった。すると，この組みあわせをえた。これは吉なので，魚がたくさんとれるはずであった。漁場についたかれは，まずはじめに魚釣りの餌にするタコをさがした。しかし，いつまでたっても，タコをみつけることができなかった。そのうちに，男は疲れたので，カヌーにあがり，一個のココヤシの実の汁を飲みほした。それから，その実を割って，なかの果肉を食べようとおもった。ここで，かれに一つの考えがうかんだ。ココヤシの実の果肉を餌にしてみようとおもったのである。早速，そのようにしてみると，まずはじめに meŕowŕow という名前の魚が釣れた。そこで，この魚を切りきざんで餌にしたところ，それからあとはつぎからつぎへと魚が釣れた。おかげで，たくさんの魚をとってかえることができた。meŕowŕow というのは，魚の一種の名前である。

90)　(2+2)(3+2)　mwarwaa　凶

Puluwat 環礁の一人の palú が，Satawal 島まで航海することに決めた。出発の朝になって，占いをしたところ，この組みあわせをえた。かれは，この組みあわせを吉とみなしていたので，出発することにした。ところが，別の占い師は，この組みあわせを凶とみなしており，出発をおもいとどまらせようとした。しかし，この palú はそれを無視して出発した。けれども，そのカヌーは出発してほどなくしてから，大嵐にまきこまれてしまった。そして，この palú のカヌーは，永久に島にもどってくることはなかった。嵐で遭難したためである。それ以来，この組みあわせは mwarwaa とよばれ，凶とみなされるようになった。mwar は「とぼしい，不足して」，waa は「カヌー」の意。したがって，この場合には，旅立っていったカヌーの消息について，だれもなにも知らなかったことを意味している。

91)　(2+2)(3+3)　yesópwoorfas　吉

Namonuito 環礁の Orol 島に住む一人の男が，命をねらわれていたので，Orol 島から Pisarach 島まで泳いでにげることにした。そこで，占いをしたところ，この組みあわせをえた。これは吉なので，すぐに出発した。そして，占いのとおり無事ににげることができた。yesópu は「……の端，……のおわり」の意。Woorfas は Orol 島と Pisarach 島のあいだの海の名前である。

92)　(2+2)(3+4)　suukon　吉

Woleai 環礁の一つの島に二人の兄弟がいた。かれらの父親は占い師であった。かれらは父親の占いの力をためすために，漁にでかけたときに，筌の口を下にむけて石をおいてしかけをした。筌の口を下にむけていたのでは魚がはいらないのであるが，父親がなんというか知りたかったからである。筌をしかけてから，父親のもとにもどった息子たちは，占いをたのんだ。すると，この組みあわせをえた。これは吉であるので，父親は息子たちにすぐに筌のところにいくようにいった。息子たちは，魚がはいるわけがないと知りつつ，筌をしかけたところにいった。けれども，筌のなかには魚がたくさんはいっていた。筌をおさえる石がくずれて，魚が筌にはいれるようになったためであった。suu は suukakeló の略で「開いている」の意。kon は Woleai 語で，漁からもどって，魚がとれたことを意味する言葉としてもちいられている。つまり，suukon は「魚をたくさんもっている」というほどの意である。

93)　(2+2)(4+1)　yeŕonmesarek　吉

一人の男が命をねらわれていた。昼間は襲われる心配がなかったので，夜になると海辺ににげていき，波打ち際のところにかくれることにしていた。しかし，その前に，いつも占いをした。するとこの組みあわせをいつもえた。これは吉なので，海辺ににげていった。そのために，だれにもみつかることなく無事にすごすことができた。yeŕon は「……の近く」，mesarek は「波打ち際」の意である。

94)　(2+2)(4+2)　yunirangmeitang　吉

一隻のカヌーが航海をしていて，突風をうけて転覆した。突風はアウトリッガーの方向からきたので，アウトリッガーが上になったかたちで転覆した。乗組員全員が海に投げだされたが，すぐにカヌーをもとどおりにして，全員がカヌーのうえにはいあがった。すると，ちょうどそのときに，サメが襲ってきた。しかし，一瞬の差で，全員無事であった。yunirang は意味不明。me は「……と……」，itang は「カヌーのアウトリッガー側，もしくは風上側」の意 。この組みあわせは，(1+1)(4+2)，つまり yunirangymeyasa のちょうど逆のケースである。

95)　(2+2)(4+3)　ferakiy　吉

Woleai 環礁の一つの島に二人の兄弟がいた。かれらは毎日，カヌーで引き釣りをしていたが，魚が釣れても，カヌーにひきあげる前に，いつもサメに魚を喰いちぎら

れてしまった。そこで，父親が占い師であったので，ある朝，漁にでかける前に，魚がとれるかどうか占ってもらった。すると，この組みあわせをえた。これは吉なので，父親は今日は魚がとれるといった。漁にでかけたところ，今日もやはりサメがカヌーのまわりにいたけれども，釣った魚をうまくカヌーの上にひきあげることができた。おかげで，久しぶりの大漁となった。ferakiy は「魚をカヌーの上につりあげる」という意味である。

96)　(2+2)(4+4)　rapikon　吉

Woleai 環礁の一つの島に二人の兄弟がいた。かれらの父親は占い師であった。かれらは父親の占いをためすために，漁にでかけたときに，筌の口を真上にしてしかけた。口の位置が真上にあれば，魚がなかなかはいらないのであるが，かれらにしてみれば，父親の占いを知りたかったのである。海からかえって，父親のもとにいき，占いをたのんだ。すると，この組みあわせをえた。これは吉であるので，父親は息子たちにすぐに筌のところにいくようにいった。するとやはり，筌には魚がたくさんはいっていた。rapikon は Woleai 語であり，rapi は rapin の略で「底」の意。筌の最上部は，ちょうどカヌーの底と同じようにとがったかたちをしているためである。Satawal 語では rapin のかわりに kopin である。kon は「魚がたくさんある」の意。

97)　(2+3)(1+1)　lúkúnmeserak　凶

この組みあわせの伝承は不明。ただし，lúkún は「……のそと」の意。

98)　(2+3)(1+2)　liyanipas　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，pas は「漂流する，漂着する」の意。

99)　(2+3)(1+3)　faangaiusmar　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，これは，Woleai 環礁で名づけられたものである。faan は「……の下」，gaius は「カヌーのマスト」の意。

100)　(2+3)(1+4)　menanipwe　吉

この組みあわせの伝承は不明。

101)　(2+3)(2+1)　fawúyúúta　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，fawú は「石，岩」，yúútá は「立つ」の意。

102)　(2+3)(2+2)　yeŕonmesewi　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，yeŕon は「……の近く」の意。

103)　(2+3)(2+3)　nenimat　吉

この組みあわせの伝承は不明。

104)　(2+3)(2+4)　moissineng　凶

この組みあわせの伝承は不明。ただし，mois は「座礁する」，sineng は「正しい，まともな」の意。

105)　(2+3)(3+1)　samomwaiy　吉

この組みあわせの伝承は不明。

106)　(2+3)(3+2)　ikewi　吉

この組みあわせの伝承は不明である。Ikewi というのは，一人の男の名前である。

107)　(2+3)(3+3)　yawúúrimeyepeep　凶

この組みあわせの伝承は不明。ya は「それ」，wúú は「立つ」，rimey は「わたしの頭」，epeep はカヌーのアウトリッガーの反対側にとりつけられたプラットフォームで，荷台としてもちいられる部分の名称である。

108)　(2+3)(3+4)　likilikiwow　凶

この組みあわせの伝承は不明。ただし，likilik は「水葬にする」，wow は方向を指示する接尾辞で「外の方，海の方」の意。

109)　(2+3)(4+1)　wuribwabwa　凶

この組みあわせの伝承は不明。

110)　(2+3)(4+2)　serawilap　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，lap は「大きい」の意。

111)　(2+3)(4+3)　woongpáyinú　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，woong は「カメ」，páyinú は「ココヤシの葉」の意。

112)　(2+3)(4+4)　yapitówúr　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，tówúr は「環礁の入り口となる水路」の意。

113)　(2+4)(1+1)　petokmwaiy　吉

一隻のカヌーが船出することになり，数人の占い師が占いをした。ところが，占い師のあいだで，吉凶について意見がわかれた。そこで，カヌーの palú は，この組みあわせをだした占い師の占いを信じて，船出をした。けれども，カヌーは数カ月たってもかえってこなかった。多くの人びとが，どこかで事故にあったのではないかと心配した。しかし，占い師たちはこの組みあわせをだした占い師が間違っていないと信じた。なぜなら，この話は(1+4)(1+1)の話につづくものであり，そのときも意見の一致をみなかったが，結局カヌーは無事にかえってきたからである。そして，数日たってから，予想どおり，カヌーは無事にもどってきた。petok は「同意する」，mwaiy は mwamwaiy の略で「正しい」の意。つまり，占い師たちのあいだで意見の相違はあったけれども，最終的にはこの組みあわせが吉であることに，皆が同意したからである。

114)　(2+4)(1+2)　lisakup　吉

一隻のカヌーが航海中に暗礁にのりあげてこわれてしまった。乗組員のほとんどすべてが行方不明となったが，ただ一人の男だけが，一つの大きな岩を発見し，そこにはいあがった。岩にあがってまもなく，潮が満ちてきた。しかし，運のよいことに，満潮になっても，岩の上にまで潮が満ちてこなかったので，その男は無事であった。

Satawal 島では，この組みあわせを，lisakup と名づけているが，その言葉の意味は不明である。おそらく，その男がはいあがって助かった，大きな岩場の名前であろうとのことである。Satawal 島の隣の Puluwat 環礁では，この組みあわせのことを，pwuroto と名づけている。pwuroto は，「潮の満ちひき」の意である。

なお，この岩場で助かった男は，空腹をみたすために，kapira とよばれる海ガニを食べたところ，食あたりをおこし，それが原因で死んでしまったそうである。けれども，カヌーが遭難したにもかかわらず，一人だけ岩場にたどりつくことができたので，

この組みあわせは吉とみなされている。しかし，占い師によっては，これを凶とみなす者もあるとのことである。

115)　(2+4)(1+3)　fawúnwiirmmar　吉

この組みあわせの伝承は不明であるが，この組みあわせをえると，いかなる場合でも吉である。fawú は「種子，実」，wiir は「バナナ」，mmar は「熟した」の意。つまり，よく熟して，たいへん美味しい一房のバナナを意味する。

116)　(2+4)(1+4)　wotoorikúúw　吉

一人の男が命をねらわれてにげまわっていた。ある日，多くの男たちに追いかけられたが，この男はたいへんすばしこかったので，追っ手の目をうまくかわした。あげくに，あたかも自分も追っ手の一員のように，追っ手の男たちの最後部について，走りまわったので，だれもかれの存在に気がつかなかった。そのために，無事であった。kúúw は「イルカ」，wotoo は「イルカが海面上をとびはねる」の意。つまり，追われていた男が，イルカのごとく機敏にうごきまわったことにちなんだものである。

117)　(2+4)(2+1)　sepwarikúúw　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，kúúw は「イルカ」の意。

118)　(2+4)(2+2)　sawtan　吉

この組みあわせの伝承は不明。

119)　(2+4)(2+3)　leewi　吉

カヌーが転覆し，乗組員がカヌーにつかまって泳いでいたときに，サメの群にまきこまれた。しかし，運のよいことには，サメはおそってこなかった。そのために吉である。lee は「……のなか」，wi は「……の群」の意。

120)　(2+4)(2+4)　faanmwukat 吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，faan は「……の下」の意。

121)　(2+4)(3+1)　lúkúnpikeram　吉

Woleai 環礁のカヌーが，Ifalik 環礁をめざして船出をした。しかし，途中で航路

を誤り，そのままはるか東にながされていき，一つの島にたどりついた。その島は，かれらにとって生まれてはじめてみる島であった。島民と話をしたが，言葉がわからなかった。しかし，ようやく，この島が Kapingamarangi 島であることがわかった。島の人びとは，Woleai 環礁からきたカヌーを歓迎し，食べものなどをあたえた。Woleai 環礁からきた人たちは，カヌーを修理したのち，ふたたび西にむけて航海をした。そして，Mortlock 群島に立ち寄ったのちに，無事に Woleai 環礁にもどることができた。lúkún は「……の外」，pikeram は「Kapingamarangi 島」の意。これは Satawal 語であり，Woleai 環礁では，Kapingamarangi 島のことを，Pigeremaalang とよんでいる。

122)　(2+4) (3+2)　faisamwit　凶

Mortlock 群島から数隻のカヌーが Puluwat 環礁にやってきた。ほどなくしてから，争いがおこり，Mortlock 群島からきていた男たちのうちの一人が殺された。この組みあわせは，その男の名前にちなんで名づけられたといわれている。

123)　(2+4) (3+3)　yaawotyepeep　凶

一隻のカヌーが島に到着した。ところが，島の男たちは，そのカヌーを歓迎せずに，乗組員をすべて殺して，死体をカヌーの epeep のところにほおりあげた。yaawot は yaawotaalong の略で，「ほおりなげる」，epeep はカヌーのプラットフォームの部分の名称。

124)　(2+4) (3+4)　pweeyppakúwlong　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，pweeyppakúw は「はこぶ」，long は方向を指示する接尾辞で「内へ」の意。

125)　(2+4) (4+1)　faanungaitaritiw　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，faan は「……の下」，tiw は方向を指示する接尾辞で「下へ」の意。

126)　(2+4) (4+2)　náyiimwráán　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，náyi は「わたしの子供」，imw は「家」，ráán は「昼，日中，昼の光」の意。この組みあわせをえると，カヌーで航海中に雨

にうたれていても，すぐに晴れてくるといわれている。

127)　(2+4)(4+3)　faanungaitaritá　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，faan は「……の下」，tá は方向を指示する接尾辞で「上へ」の意。

128)　(2+4)(4+4)　yaawotfoo　凶

一隻のカヌーが島に到着した。ところが，島の男たちは，そのカヌーを歓迎せずに，乗組員をすべて殺して，死体をカヌーのなかにほおりこんだ。yaawot は yaawotaa-long の略で「……のなかにほおりこむ」，foo は「カヌーの内部」の意。

129)　(3+1)(1+1)　lúkúningarik　凶

一隻のカヌーが数カ月間の航海の末に，ようやく一つの島をみつけ，そこに上陸した。そこは，Ngatik 環礁であった。島の人びとに歓迎され，そこで数カ月間をすごしたのちに，そこで，占いをしたところ，この組みあわせをえた。これは吉なので，すぐに出発した。ところが，島をでて，少しすすんだところで，カヌーが座礁し，遭難した。lúkún は「……の外」の意。Ingarik は Ngatik 環礁のことである。

130)　(3+1)(1+2)　maanetiw　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，maane は maaneto の略で「漂流する」，tiw は方向を指示する接尾辞で「下の方，西の方」を意味する。

131)　(3+1)(1+3)　lúkúnláálang　凶

この組みあわせの伝承は不明。ただし，lúkún は「……の外」の意。

132)　(3+1)(1+4)　yeŕonpian　吉

むかし，Ifalik 環礁の酋長が Woleai 環礁を自分の支配下におくことを決意して，カヌーの軍団をつらねて，Woleai 環礁を攻撃した。その攻撃のある少し前に，Woleai 環礁の Wottagai 島に住む一人の男が仕事にでかけることになり，占いをしてもらった。すると，この組みあわせをえた。これは吉なので，近くの Woleai 環礁の Pial 島にパンノキの実をとりにいった。Ifalik 環礁からきたカヌーの軍団は，Woleai 環礁の人間が住んでいる，すべての島々を攻撃した。けれども，幸いなことにも，その

男がでかけた Pial 島は無人島であったので，攻撃をうけることがまったくなかった。そのために，その男は無事であった。yeŕon は「……の近く」の意。

133)　(3+1)(2+1)　sawnayi

この組みあわせの伝承は不明である。ただし，この組みあわせは，吉凶のどちらでもないので，もう一度，占いをしなおす必要がある。saw は「専門家，熟練者」，nayi は nayinayi の略で「使う，用いる」の意。

134)　(3+1)(2+2)　tówúŕniyéér　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，tówúŕ は「環礁への入り口の水路」，yéér は「南」の意。

135)　(3+1)(2+3)　pianiyal　吉

一人の信望のある占い師がいた。多くの人びとが，かれのもとにやってきて，占いをたのんだ。そして，その結果はいつも人々を満足させるものであった。あるとき，一隻のカヌーが船出をすることになり，そのカヌーの palú がこの占い師のもとにやってきた。占いの結果，この組みあわせをえた。これは吉なので，カヌーはすぐに船出をした。ところが，何カ月たっても，そのカヌーはかえってこなかった。島の人びとは嵐にまきこまれて，遭難したのではないかと心配した。しかし，数日たってから無事にもどってきた。そのとき以来，この組みあわせは，その信望のある占い師の名前でよばれることとなった。

136)　(3+1)(2+4)　mesanyapwung　吉

Ifalik 環礁の酋長が，Woleai 環礁を自分の支配下におくことを決意して，カヌーの軍団をつらねて，Woleai 環礁を攻撃した。はげしい戦闘の際中に，Woleai 環礁の一人の男が泳いでにげようとした。それを，Ifalik 環礁のカヌーが追いかけて，槍でその男を刺し殺そうとした。ところが，海のなかの男は，さしだされた槍をうまくとりあげ，それを反対になげかえした。それが，カヌーの上の一人の男の腹に命中した。槍をうけた男はカヌーの上にもんどりうってたおれた。その混乱に乗じて，海のなかの男はうまくにげることができた。そのために，吉である。mesan は「……の前」の意。yapwung はカヌーの本体の一部の名称で，食べものなどをおいておくところのことである。槍をうけた男がそこに倒れたために，そのように名づけられたの

である。

137)　(3+1)(3+1)　marikuwar　吉

この組みあわせの伝承は不明である。

138)　(3+1)(3+2)　［名前なし］　吉

この組みあわせの伝承は不明である。そしてまた，この組みあわせには，名前があたえられていない。名前があたえられていない理由も不明であるが，いずれにしても吉である。

139)　(3+1)(3+3)　lamwonepue　凶

Truk 群島で一人の男が殺された。その殺害されたところの地名にちなんで，この組みあわせが名づけられている。lamw は「礁湖」の意。

140)　(3+1)(3+4)　era　吉

むかし，Puluwat 環礁に，Era という名前の偉大な酋長がいた。あるとき，その酋長は Truk 群島を征服するために，カヌーをつらねてでかけることに決めた。出発前に，占いをすると，この組みあわせをえた。これは吉であるので，勇んで船出をした。それからほどなく，Era は Truk 群島の一つの島を征服することに成功し，無事にもどってきた。それ以来，この組みあわせは，かれの名前にちなんでよばれることとなった。

141)　(3+1)(4+1)　yepwusamwar　吉

この組みあわせの伝承は不明。

142)　(3+1)(4+2)　wónniyangarwow　吉

この組みあわせの伝承は不明。

143)　(3+1)(4+3)　waiyur 吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，これは，Puluwat 環礁の Allei 島に住んでいた，一人の男の名前とのことである。

144)　(3+1)(4+4)　yamaameláng　凶

むかし，Mortlock 諸島から多数のカヌーが，Puluwat 環礁に攻めよせてきた。島の各地ではげしい戦闘があった。しかし，結局，Mortlock 諸島からきた人びとは，全員殺された。yamaa は yamaamaa の略で「洗いながす」の意であるが，この場合には「一人のこらず虐殺する」の意である。me は「……と……」，láng は「天空，大空」の意。

145)　(3+2)(1+1)　longnomeserak　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，long は「……の中」の意。

146)　(3+2)(1+2)　mwáánpasaato　吉

Puluwat 環礁の一隻のカヌーが航海中に嵐にまきこまれて，カヌーがこわれた。乗組員のほとんどすべてが行方不明となったが，ただ一人の男だけが，カヌーの破片につかまって漂流したあげくに，Pulsuk 環礁の一つの島に運よくながれついた。mwáán は「男性」，pasaato は「漂流する」の意。

147)　(3+2)(1+3)　ppianwuŕmaan　吉

一つの小さなサンゴ礁があった。それは無人島であったが，無数の鳥が生息する島であった。近くの島の人たちは，しばしばそこをおとずれて，鳥やその卵をとった。その意味で，たいへん重要な島であった。

一方，この組みあわせをえると，いつでも結果は吉であったので，この有益な鳥の島にちなんで名づけることとなった。ppi は「砂浜，木のあまりはえていない島」，wuŕ は「遊ぶ，たわむれる」，maan は「鳥」の意。つまり，鳥がたわむれる，小さなサンゴ礁の島という意味である。

148)　(3+2)(1+4)　ikisamwar　吉

この組みあわせの伝承は不明。

149)　(3+2)(2+1)　itiniko　吉

この組みあわせの伝承は不明。

150)　(3+2)(2+2)　itinipuwe　凶

一人の男が命をねらわれて，にげまわっていた。しかしついにつかまえられ，itinipuwe とよばれる，木製の武器で殺された。この組みあわせは，その武器にちなんで名づけられたものである。

151)　(3+2) (2+3)　pwenilamta　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，pwe は「数占い」の意。lamta は Lamotrek 環礁の一つのカヌー小屋の名前である。

152)　(3+2) (2+4)　mesanwaaŕ　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，mesan は「その目」，waaŕ は「かれらのカヌー」の意。航海中に占いをして，この組みあわせをえると，島をすぐにみつけることができるとされる。また，病人のために占いをして，これをえたときにも，病人はまもなく全快するといわれている。

153)　(3+2) (3+1)　itinwuŕwow　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，wuŕ は「遊ぶ」，wow は方向を指示する接尾辞で「外へ，外で」の意。

154)　(3+2) (3+2)　yesiru　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，si は「われわれ」，ru は「会う」の意。

155)　(3+2) (3+3)　sánugmetaw　吉

Satawal 島の二隻のカヌーが，Saipan 島にむかって船出をした。しかし，Saipan 島が発見できぬままに，数カ月間を洋上ですごすこととなった。そこで，一隻のカヌーの palú が占いをおこなったところ，この組みあわせをえた。これは吉なので，島を発見できるはずであった。けれども，もう一隻のカヌーの palú はそれにしたがうことを拒絶した。そのために，二隻のカヌーは洋上で別行動をとることになった。ところが，結局，この占いを信じてカヌーをすすめた palú の方は無事に Saipan 島を発見し，そののちにふたたび Satawal 島にかえることができた。しかし，洋上でわかれた，もう一隻のカヌーの消息は，その後，永久に不明であった。おそらく，遭難したとみなされている。それ以来，この組みあわせは，この名でよばれることとなった。sánng は fesánng の略で，「わかれた」の意。metaw は「海」の意。つまり，

二隻のカヌーが洋上でわかれたことに由来している。

156)　(3+2)(3+4)　suraukit　吉

Puluwat 環礁の一つの島で，一人の男が命をねらわれてにげまわっていた。あるとき，数人に追われていたが，小さな炊事小屋にとびこんでかくれて，うまく追っ手の目をかすめることができた。surau は musurau の略で「炊事小屋」の意。kit は kitikit の略で「小さい」の意。

157)　(3+2)(4+1)　itinwuŕlong　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，wuŕ は「遊ぶ」，long は方向を指示する接尾辞で「内へ，内で」の意。

158)　(3+2)(4+2)　lúkúlúkúyeew　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，lúkúlúkú は lúkúú のことで，「信念，信じること」，yeew は「一つ」の意。

159)　(3+2)(4+3)　lúkúnupuwe　凶

この組みあわせの伝承は不明。

160)　(3+2)(4+4)　mesankatnu　凶

この組みあわせの伝承は不明。ただし，mesan は「……の前」の意。Katnu は，Ifalik 環礁で一番大きいカヌー小屋の名前である。

161)　(3+3)(1+1)　yéŕutiw　凶

一つの島の森の方から，男のさけび声がきこえたので，島の人びとが，声のした方にいってみると，そこで一人の男が殺されていた。yéŕ は yéŕiyéŕ の略で「大声でさけぶ」，tiw は方向を指示する接尾辞で「下の方，西の方」を意味する。

162)　(3+3)(1+2)　puuricca　凶

一人の男が，家のなかで妻を殺した。悲鳴をきいた近くの人たちが，家のなかにとびこんでみると，そこには血にまみれた死体があるだけで，夫はすでにどこかにげていた。puuri は「ふみこむ」，cca は「血」の意。つまり，悲鳴をきいて，家のさ

かにとびこんだ人が，血の海のなかに足をふみこんだ，という意味である。

163)　(3+3) (1+3)　matetteŕenmesay Luukaayláng　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，matetteŕ は「まつ毛」，mesay は「目」，Luukaayláng は「天空の至上神」の意。

164)　(3+3) (1+4)　yéŕutá　凶

一人の男がカヌー小屋にいたときにおそわれて，殺された。それをみていた人が，大声をだして島の人びとに知らせた。しかしその間に，殺人をおかした男はにげていった。yéŕ は yéŕiyéŕ の略で「大声でさけぶ」，tá は方向を指示する接尾辞で「上の方，東の方」の意。

165)　(3+3) (2+1)　fawúnipwulapwu　凶

Puluwat 環礁の一隻のカヌーが Pulusuk 環礁まで航海することになった。そこで，占いをしたところ，この組みあわせをえた。これは吉なので，すぐに出発をした。そして，無事に，Pulusuk 環礁に到着し，一つの水路を通って，環礁のなかにはいろうとした。そのときに，操船を誤って，大きな岩にぶつかり，カヌーをこわしてしまった。そのために，この組みあわせは凶とみなされるようになった。その大きな岩の名前が fawúnipwulapwu である。fawú は「石，岩」，pwulapwu は「赤色」の意。

166)　(3+3) (2+2)　likitiyatorow　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，likitiy は「のこす，置きわすれる」，yatorow は「カヌーをおおうための敷物（ココヤシの葉製）」の意。つまり，航海中に雨がふったときにカヌーをおおうための敷物を島に置きわすれた，という意味である。そのため，カヌーで船出をするまえに，この組みあわせをえると，航海中に雨にあわないといわれている。

167)　(3+3) (2+3)　pwinyiimwkkaŕ　凶

一つの島が襲われて，島の人びと全員が殺され，家が焼きはらわれた。pwi は「群，あつまり」，imw は「家」，kkaŕ は「焼かれた」の意。

168)　(3+3)(2+4)　yówurusefáá　凶

Puluwat 環礁の Puluwat 島に一人の力の強い男がいた。その男が同じ環礁のなかの Allei 島からかえってきたとき，二人の男が近づいてきた。そして，「おまえのカヌー小屋が燃えている」といった。それを聞いて，一瞬ひるんだすきに，一人の男がうしろからはがいじめにし，もう一人の男がまえから，なぐりかかってきた。その力の強い男は，うしろをふりかえって，助けをもとめるためにさけんだが，だれもきてくれなかった。そのうちになすすべもなく，その二人の男になぐり殺されてしまった。yówur は「さけぶ」，sefáá は「ふりかえる」の意。

169)　(3+3)(3+1)　fááitikau　凶

この組みあわせの伝承は不明。ただし，fááy は「……の下」の意。

170)　(3+3)(3+2)　rúweeyyang　吉

一人の男が，なにかをする前に占いをするといつもこの組みあわせをえた。そして，その結果は，いつも吉であった。そこで，その男はこの組みあわせを rúweeyyang と名づけることにした。rúw は rúwarú の略で「耳に花をつける」，eey は feey の略で「私に」の意。yang は yangúúrik の略で，たいへん匂いのよい花の名前である。つまり，この組みあわせをえるということは，たいへん匂いのよい花をいつも耳につけているようなもので，すこぶる気分のよいことにちなんだものである。

171)　(3+3)(3+3)　faanpwerpwer　吉

16の yaanúyefemas ののった数占いのカヌー (waanikoran) が Satawal 島にくるまでのあいだに，カロリン諸島をひろく航海してまわっていた。そのときに，Ponape 島の一つの海岸に到着し，Taulap が浜辺の穴のなかに落ちた。その間に，カヌーは Taulap だけをおきざりにしたまま出発し，1年たってふたたび，その海岸についたとき，Taulap が浜辺に一人たたずんでいた。すぐにカヌーにつれもどしたが，1年のあいだに Taulap は白髪になっていた。

この組みあわせは，そのことを意味したものである。faan は「……の下」，pwerpwer は「白」の意。つまり，Taulap が白髪のもとにあったという意味である。

172)　(3+3)(3+4)　fainigar　凶

Puluwat 環礁の数隻のカヌーが，Truk 群島まで航海することになった。そこで，

環礁のすべての占い師があつまって，航海に参加する人びとの全員の吉凶を占った。その結果，一人の男だけが全員一致して凶と占われた。けれども，その男は自分でも占いができたので，自分のことを占ってみた。すると，この組みあわせをえた。これは吉であると主張して，皆の反対をおしきって，航海に参加することにした。

数カ月ののち，Truk 群島まで航海した，すべてのカヌーが無事にもどってきた。問題の男ののったカヌーも，Puluwat 環礁の一つの水路を無事に通過した。かれは他の乗組員に，自分の占いが正しかったことをはなした。そして，島に到着したので，乗組員がマストをおろしたとき，その先端があやまってかれの頭部を直撃した。その一撃によって，かれは島を目前にして，あえなく絶命した。やはり，占い師たちの占いが正しかったのである。それ以来，この組みあわせはその死亡した男の名前でよばれることとなった。

173)　(3+3)(4+1)　yeiwererik　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，これは Pulusuk 環礁の男の名前である。rik は「小さい」の意。

174)　(3+3)(4+2)　faanfenait　凶

Elato 環礁の一隻のカヌーが Lamotrek 環礁にむけて船出をする前に，占いをしたところ，この組みあわせをえた。これは吉であったので，すぐに出発した。Lamotrek 環礁の Fenait 島の近くまできたとき，突然，たつまきにまきこまれ，カヌーがこなごなになった。そして，乗組員も全員死亡した。それ以来，この組みあわせは，凶とみなされるようになった。それにともない，名前も faanfenait にかわった。faan は「……の下，……において」の意。

175)　(3+3)(4+3)　ngúngtiw　凶

一人の男が，朝起きてすぐに，その日の運勢を占った。すると，この組みあわせをえた。男はこれを吉とみなしていたので，すぐに仕事にでかけた。ところが，島のなかを歩いていたときに，突然，数人の男に襲われ，殺された。おそった男たちは，死体をきりきざんで，ヤシの葉でかくした。ngúng は「細かく切りきざむ」の意。tiw は方向を指示する接尾辞で「下に，西に」の意。

176)　(3+3)(4+4)　saw　凶

Puluwat 環礁に住む一人の男が，仕事にでかける前に占いをしたところ，この組みあわせをえた。これは吉なので，海にしかけた筌をとりにでかけた。男は一人でカヌーをこいでいった。筌をしかけたところまできて，カヌーをとめて錨をおろした。それから，海にもぐっていった。しかしそのときに突然，サメにおそわれて，格闘の末に喰い殺された。そのために，凶とみなされるようになった。Saw というのは，Puluwat 環礁の一つの島の名前で，その男がその島の近くで死んだためである。

177)　(3+4)(1+1)　Piyto　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，これはある一人の男の名前である。

178)　(3+4)(1+2)　faitingarngar　吉

この組みあわせの伝承は不明。

179)　(3+4)(1+3)　taniruwwow　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，wow は方向を指示する接尾辞で，「外へ」の意。

180)　(3+4)(1+4)　yarawaa　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，yara は「人がいる」，waa は「カヌー」の意。

181)　(3+4)(2+1)　lúkúnmat　凶

Woleai 環礁の Falalap 島の一人の男が，同じ環礁の Falalus 島からきた男に殺された。その殺された場所が，Mat とよばれるところであった。lúkún は「……の近く，……の外」の意。

182)　(3+4)(2+2)　yapinifo　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，この名前は，つぎの慣行を意味している。つまり，だれかのカヌーを借りて，漁にでた場合，かならずとれた魚のなかで一番大きいものを，カヌーの所有者にさしださねばならない。その慣行のことを yapinifo という。しかし，これがこの組みあわせと，どうかかわるかは不明。

183)　(3+4)(2+3)　yagonopue　吉

この組みあわせの伝承は不明。

184)　(3+4)(2+4)　seimwaan　吉

この組みあわせの伝承は不明。

185)　(3+4)(3+1)　yápinláálang　凶

Puluwat 環礁の一つの島で，一人の男が殺された。その殺害現場の地名が，Yápinláálang である。

186)　(3+4)(3+2)　yangúúmwaiy　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，yangúú は「匂い」，mwaiy は「よい」の意。また，yangúú は yangúúrik という，たいへん匂いのよい花の名前の略でもある。

187)　(3+4)(3+3)　negores　凶

一隻のカヌーが嵐にまきこまれて，苦しい航海をつづけていた。そのとき，突然，強い風がふいたために，帆が風をうけすぎ，カヌーが転覆しそうになった。帆をうまく操作することによって，転覆はさけることができたが，バランスがくずれたために大波をまともにうけた。一人の男がその大波をまともにうけて，カヌーにたたきつけられた。頭部を強打したために，それによって男は絶命した。negores は，突風をうけて，カヌーが転覆しそうになったときにおこなう，帆の操作技術の一つを意味する。

188)　(3+4)(3+4)　faanmesaróól　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，faan は「……の下」，mesan は「顔」，róól は「黒」の意。

189)　(3+4)(4+1)　pwaniyláng　吉

この組みあわせの伝承は不明である。ただし，pwanity は「あちらこちらにいきまわる」，láng は「大空，天空」の意。この組みあわせをえた場合には，どんなところにいっても，かならず無事にもどってくることができるといわれている。

190)　(3+4)(4+2)　seperanwuŕ　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，wuŕ は「遊ぶ」の意。

191)　(3+4)(4+3)　matonlap　凶

Ifalik 環礁の男たちが数隻のカヌーをつらねて，Puluwat 環礁を攻撃した。両者のあいだではげしい戦闘がくりかえされたが，最終的に Puluwat 環礁の人々が勝利をおさめることができた。そこで Puluwat 環礁の男たちは，生きのこりの Ifalik 環礁の男たちを皆殺しにするとともに，カヌーをこなごなにこわした。その間に，Ifalik 環礁のもっともすぐれた戦士であった Moyuun と Mainiyes の二人だけは，捕えられることなく，Puluwat 環礁をうまくぬけだし，泳いで Pulap 環礁にむかった。Pulap 環礁の Pulap 島には無事に到着したが，そこからまた Tamtam 島にむかって泳いでいくことにした。その途中で，Moyuun が力つきておぼれて死んだ。しかし，Mainiyes は無事に，Tamtam 島に到着できた。しかしいずれにしても，Ifalik 環礁の人たちが戦闘にやぶれて皆殺しにされたので，凶である。Matonlap は，Pulap 環礁の Pulap 島と Tamtam 島のあいだの海の名前である。

192)　(3+4)(4+4)　mwarpinyanei　凶

大昔，Puluwat 環礁の人々がカヌーをつらねて，Truk 群島の Tol 島の Wonei を襲い，そこの住民を皆殺しにした。mwarpin は「すべてを殺す，すべてを破壊する」，Yanei は「Tol 島の Wonei」のこと。

193)　(4+1)(1+1)　mesanyállyarikirik　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，mesan は「目」，yáll は「悪い」，yarikirik は「小さい」の意。

194)　(4+1)(1+2)　yamanpue　吉

この組みあわせの伝承は不明。

195)　(4+1)(1+3)　ppuchailuk　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，これは，一隻のカヌーが航海中にであった鯨につけた名前にちなんだものである。

196)　(4+1)(1+4)　lúkúnsaton　凶

一隻のカヌーが何カ月間も海上を漂流していた。乗組員はもう死しかないとおもった。ところが幸運にも，一つの島を発見した。しかし，その島はまだみたことのない

島であった。あげくに，島を目の前にして，大きな岩に座礁し，カヌーがこわれてしまった。カヌーがたどりついたところは，Fais 島であった。その島は隆起サンゴ礁の島であり，島の周囲に，大きな岩がごろごろしていた。海になげだされた乗組員はいそいで，その大きな岩の上にあがろうとしたけれども，手がすべってしがみつくことすらできなかった。そして，全員，力つきて，おぼれ死んだ。lúkún は「……の外」，saton は「大きな岩」の意。

197)　(4+1)(2+1)　yagonwuŕ　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，wuŕ は「遊ぶ」の意。

198)　(4+1)(2+2)　lúkúnmeserek　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，lúkún は「……の外へ」の意。

199)　(4+1)(2+3)　ikatin　吉

この組みあわせの伝承は不明。

200)　(4+1)(2+4)　naipueyuong　吉

この組みあわせの伝承は不明。

201)　(4+1)(3+1)　wúúnganiy　凶

一隻のカヌーが航海をしていて，やっと目ざす島をみつけた。ところが，潮の流れの関係で，島を目前にしているのに，なかなかたどりつくことができなかった。結局，四日間ものあいだ，島を前にして，悪戦苦闘をしなければならなかった。結局，無事に島につくことができたけれども，四日間も苦しんだということから，凶とみなされるようになった。wúú は「とどまる，立つ」，nganiy は「……にむかって，……の方へ」の意。つまり，島を目前にしながら，動かずにとどまることを意味する。

202)　(4+1)(3+2)　likiliklong　凶

この組みあわせの伝承は不明。ただし，likiliki は「水葬にする」，long は方向を指示する接尾辞で「内へ」の意。

203)　(4+1)(3+3)　yitinippi　凶

一つの島で，ある特定の yainang（氏族）の成員が全員殺害された。そして，人々はその死体を浜辺にもっていってならべておいた。yiti は「横たわる」, ppi は「浜辺」の意。つまり，浜辺に多数，横たわる死体のことを意味している。

204)　(4+1)(3+1)　mwoiylong　凶

一つの島の yainang 同志のあいだで争いがおこった。一つの yainang の成員が皆あつまって，一軒の家のなかで集会をひらいていた。そのときに，敵対する yainang の男たちがそこをおそい，家に火をつけた。そして，家のまわりをとりかこんで，火のなかからとびだしてくる人びとを殺した。mwoiy は「集まる」，long は「……なかで」の意。

205)　(4+1)(4+1)　lamwonyaur

この組みあわせの伝承は不明。ただし，これはどこかの島の礁湖の名前とのことである。lamw は「礁湖」の意。

206)　(4+1)(4+2)　yitinifóómongmwááng　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，yiti は「……に面する」，fóó は「家屋の柱」の意。

207)　(4+1)(4+3)　kumwúr　凶

この組みあわせの伝承は不明。ただし，kumwúr は「手首」の意。

208)　(4+1)(4+4)　ppiyalu　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，ppi は「海辺，砂浜」の意。

209)　(4+2)(1+1)　yafairam　吉

一隻のカヌーが洋上を何カ月間も漂流していた。食料がなにもないので，乗組員はカヌーの内部にできるカビをとってたべていた。そうしているうちに，運よく，一つの島に漂着した。そこは，Puluwat 環礁のなかの一つの島であった。yafai は「カビ」の意。

210)　(4+2)(1+2)　lisaneware　凶

二人の男がケンカをして，一人が他の男のひたいを強打して殺した。死んだ男の名前が，Ware である。lisan の意は不明。

211)　(4+2)(1+3)　roomwáang　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，roo というのは，木から落ちて，古くなったココヤシの実のことである。その実の外皮は，水分がほとんどでなくなって，からからにかわいているために，炊事の際に燃料としてもちいられる。そのため，船出のまえに，この組みあわせをえると，たいへん吉とみなされている。航海中に雨にあわないということの前兆だからである。

212)　(4+2)(1+4)　lipanique　吉

この組みあわせの伝承は不明。

213)　(4+2)(2+1)　lauruto　吉

この組みあわせの伝承は不明。

214)　(4+2)(2+2)　lianuk　吉

この組みあわせの伝承は不明。

215)　(4+2)(2+3)　serawikit　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，kit は kitikit の略で「小さい」の意。

216)　(4+2)(2+4)　yasamwáán　吉

この組みあわせの伝承は不明。

217)　(4+2)(3+1)　wónniyangarlong　吉

この組みあわせの伝承は不明。

218)　(4+2)(3+2)　lúkútonlaplap

この組みあわせの伝承は不明。ただし，lúkú は lúkún の略で，「……の外」の意。Tonlaplap は Truk 群島の Moen 島の一つの丘の名前である。

219)　(4+2)(3+3)　lúkúnyaneto　吉

一人の男が命をねらわれてにげていた。あるとき，数人の男に追われてにげまわり，つかまりそうになったけれども，Yaneto という名でよばれる家の外に身をよせてかくれた。そのため，追っ手はついに，かれをみつけることができなかった。lúkún は「……の外」の意。

220)　(4+2)(3+4)　yapúngiŕaang　吉

Puluwat 環礁のカヌーが物々交換のために Truk 群島にいき，ウコンの粉を大量に手にいれて，帰路についた。ウコンの粉は各種の儀礼の際に体にぬるものであり，中央カロリン諸島における社会生活でもっとも重要なものの一つである。しかし，中央カロリン諸島の島々ではウコンがとれないので，Truk 群島にいって，腰布やカヌーなどと物々交換することによって，ウコンの粉を手にいれる必要があった。物々交換をおえて，帰路についたカヌーは，漁具などをいれるための，大きな箱にウコンの粉をつめていた。しかし，途中で突風のために帆の操作をあやまり，船が転覆した。全員が海になげだされたが，そのうちの一人は，ウコンの粉のはいった箱にしがみついて漂流しているところを，もう一隻のカヌーに助けられた。そのために吉である。yapúng は「漁具などをいれておく箱」，ŕaang は「ウコンの粉」の意。

221)　(4+2)(4+1)　lapunpue　吉

この組みあわせの伝承は不明。

222)　(4+2)(4+2)　farakai　吉

この組みあわせの伝承は不明。

223)　(4+2)(4+3)　Kepanikon　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，これは Ifalik 環礁の一つの場所の地名である。

224)　(4+2)(4+4)　safurimpor　凶

この組みあわせの伝承は不明。ただし，占い師によっては，これを吉とする人もいるとのことである。

225)　(4+3)(1+1)　yápinkótoppwél　凶

二人の男がケンカをはじめた。一人の男がすぐそばに立てかけてあった，ココヤシの実の外皮をはぐための棒をひきぬいて，相手になげつけた。それが相手の腹に命中し，その男は棒もろとも地面にたたきつけられた。そして，その棒の先が尖っていたために，大怪我を負った。yápin は「底，下部」，kóto は「ヤシの実の外皮をはぐための棒」，ppwél は「地面」の意。

226)　(4+3)(1+2)　yunermo　凶

この組みあわせの伝承は不明。

227)　(4+3)(1+3)　yóónppuŕwow　吉

一人の男が占い師のもとに通って，数占いをならっていた。その男は教えを乞うときには，いつもヤシ酒をたずさえてきた。

ある日，その男が，カヌーで船出をしようとして，占いをしたところ，この組みあわせをえた。これは吉なので，すぐに船出した。航海中に嵐にまきこまれたり，いろいろな困難に遭遇したが，無事に島に帰りつくことができた。また，別の日に，船出をすることになり，占いをしたところ，ふたたびこの組みあわせをえた。そして，やはり無事に帰ってくることができた。そのようなことが何度もくりかえされたので，この組みあわせを yóónppuŕwow と名づけることにした。yóón は「柄，取っ手」，ppuŕ は「ココヤシの実の殻製の容器」，wow は方向を指示する接尾辞で「外へ，海の方へ」の意。つまり，教えを乞うていた占い師のもとに，ココヤシの実の殻製の容器にヤシ酒をいれて，たずさえてきていたので，それにちなんで名づけたのである。

228)　(4+3)(1+4)　lúkúnyáárrikirik　凶

この組みあわせの伝承は不明。ただし，lúkún は「……の外」，yáár は「環礁への入り口の水路」，rikirik は「小さい」の意。

229)　(4+3)(2+1)　yóónppuŕlong　吉

これは(4+3)(1+3)の伝承と関連するもので，数占いをならっていた男がカヌーで船出をしたあと，その師である占い師がカヌーが無事にもどってくるかどうかを占ったところ，この組みあわせをえた。それは吉であった。そして，その占いのとおりに，無事に島にもどってきた。そのようなことが，何度かくりかえされたので，この組み

あわせを yóónppuŕlong と名づけることになった。yóón は「柄，取っ手」，ppuŕ は「ココヤシの実の殻製の容器」，long は方向を指示する接尾辞で「内へ，陸の方へ」の意。

230)　(4+3)(2+2)　yápinupwoŕ　吉

一隻のカヌーが島の近くで座礁をしてこわれた。乗組員は全員，海になげだされた。島が近いので，泳いでいくことになった。しかし，海が荒れているために，水がにごっており，サメが近づいてきてもわからないし，また前方になにがあってもわからないような状態であった。そのため，泳いでいる者たちは，無事に島にたどりつくのは，むずかしいのではないかとおもった。けれども，幸いなことにサメにおそわれることもなく，無事に島にたどりつくことができた。そのために，吉である。yápin は「……のもと」，pwoŕ は「鮮明でない」の意。

231)　(4+3)(2+3)　yápinommal　凶

これは，(4+2)(2+2)の伝承に関連するものである。先ほどの伝承では，荒海のなかを無事に島にたどりつくことができたが，これは別の方向にむかって泳いでいった男のはなしである。カヌーが座礁して，海になげだされた乗組員のうち，一人の男だけは前方の海がにごっているので，別の方角から島に近づくことにした。そちらの方の海が澄んでいたからである。しかし，不幸にも，この男は途中でサメにおそわれて，命をおとした。そのために凶である。yápin は「……のもと」，mmal は「鮮明な，はっきりした」の意。

232)　(4+3)(2+4)　longmesay Sawleyoong　凶

一人の男が朝おきて仕事に出かける前に，占いをしたところ，この組みあわせをえた。それは吉なので，仕事にでかけた。その男は yoong とよばれる木を切るために，森に入っていった。この木は固くて，そのうえに真直ぐにのびているので，家屋の柱に適していた。しかし，この木を切りにいった男はそのまま行方不明となってかえってこなかった。人びとが島中をさがしまわったけれども，どこにもその姿をみいだせなかった。そこで，人びとは，その木がたくさんはえているところに住む悪霊である Sawleyoong が，その男をどこかにつれていったとかんがえた。long は「……の内」，mesay は「わたしの目」の意。この場合には，Sawleyoong の目の内，もしくは見つかったという意味である。saw は「専門家，熟練者」，le は「……のあいだ」の意。

233)　(4+3)(3+1)　opuemaan　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，maan は「鳥，もしくは動物」の意。

234)　(4+3)(3+2)　Lamwonyéér　吉

Lamotrek 環礁の酋長が，島民をひきいて数隻のカヌーで，Elato 環礁の Lamwonyéér 島をおそった。その島を，自分たちの支配下におくためである。はげしい戦闘の末に，Lamwonyéér 島の人びとは，敵を撃退し，島を守りきることができた。

235)　(4+3)(3+3)　ngúngtá　吉

Puluwat 環礁の一隻のカヌーが，Namonuito 環礁の Pisarach 島にやってきた。しかし，数日たってから，そのカヌーの乗組員の一人が，島の男たちによって殺された。男たちは，死体を切りきざんだのちに，ヤシの葉をかぶせて浜辺に放置した。ちょうどそのとき，一隻のカヌーがやってきた。それは，Pulap 環礁からのカヌーであった。カヌーにのっていた人たちは，切りきざまれた死体をみつけて，おどろき，自分たちも殺されるのではないかとおもった。そこで，カヌーの palú が島の酋長のもとにいき，自分たちの命だけは助けてくれるようにたのんだ。酋長はそれを了承した。ngúng は「細かく切りきざむ」の意。tá は方向を指示する接尾辞で「上に，東に」の意。この場合，なぜ tá がついているかについては，(4+3) をになう yaanúyeŕemas である Pweigak は，(3+3)の Taulap よりもカヌーの下位の席に位置しているからである。したがって，(4+3) から (3+3) への移行は下から上にということになり，tá をともなうのである。

236)　(4+3)(3+4)　waunimaamaw　凶

この組みあわせの伝承は不明。ただし，maamaw は「強い」の意。

237)　(4+3)(4+1)　sapemmal　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，mmal は「鮮明な，はっきりした」の意。

238)　(4+3)(4+2)　wenimát　凶

引き潮のときに，一人の男がタコとりにでかけた。潮が引いているので，タコがみつけやすいからである。ところが，この男は数人に命をねらわれていた。引き潮であるために，その男がリーフでタコ漁をしているのを，容易にみつけることができた。

タコ漁に夢中になっている，その男のもとに数人が近づき，おそいかかった。まもなく，その男は死体となって，海にうかんでいた。weni は「……のときに，……において」，mát は「引き潮」の意。

239)　(4+3) (4+3)　fááynama　凶

一人の男が，Nama 島で殺された。fááy は「……のもと」の意。つまり，Nama 島において，という意味である。

240)　(4+3) (4+4)　maalráán　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，maal は「夜明け」，ráán は「日，日中，昼」の意。

241)　(4+4) (1+1)　faanyuraitip　凶

Pulap 環礁に入るための水路のところに暗礁があった。人びとはその暗礁を Yaraitip と名づけていた。あるとき，一隻のカヌーがこの暗礁にまともにぶつかって，こなごなになった。そして，乗組員全員が死亡した。faan は「……のもと，……の下」の意。

242)　(4+4) (1+2)　kopul　吉

この組みあわせの伝承は不明。

243)　(4+4) (1+3)　wumwanutiw　凶

この組みあわせの伝承は不明。ただし，wumwanu は「トウカムリ貝」，tiw は方向を指示する接尾辞で「下へ，西へ」の意。

244)　(4+4) (1+4)　Tawleirik　吉

Sorol 環礁で，ある一人の男が命をねらわれていた。しかし，当人はそのことを知らなかった。その男を殺そうとおもっている数人の男たちが，かれを魚釣りにさそった。そうとはしらない男は，いっしょにカヌーにのってついていくことにした。その前に，占いをしてもらったところ，この組みあわせをえた。これは吉なので，いっしょにいくことにした。島から相当はなれたところで，男たちは突然，かれにおそいかかり，殺そうとした。しかし，この男はいろいろな格闘術を身につけていたので，な

んなく相手を全員，海にたたきおとした。そして，一人だけ無事に島にもどることができた。それ以来，この組みあわせは，その男の名前にちなんで名づけられることとなった。

245)　(4+4) (2+1)　mesanarlaplap　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，mesan は「……の前」，laplap は「大きい」の意。

246)　(4+4) (2+2)　waarap　凶

一隻のカヌーが航海中に，突風をうけて転覆した。乗組員は全員，海になげだされたが，すぐにカヌーをもとどおりにしようとこころみた。しかし，そのときに，サメの一群におそわれ，なすすべもなく，全員喰い殺されてしまった。waa は「カヌー」，rap は「転覆する」の意。

247)　(4+4) (2+3)　matonrikiriki　吉

Pulap 環礁の Pulap 島から，一隻のカヌーがすぐ近くの Funarik 島にむけて船出をすることになった。船出の前に，占いをしたところ，この組みあわせをえた。これは吉なので，すぐに船出をした。しかし，その途中で暗礁にのりあげ，カヌーがこなごなにこわれた。それによって，乗組員が全員死亡した。それ以来，この組みあわせは，matonrikiriki とよばれるようになった。Matonrikiriki とは，Pulap 島と Funarik 島のあいだの海の名前である。maton は「隣接する島と島のあいだの海」，rikirik は「小さい，短い」の意。

248)　(4+4) (2+4)　lewóórput　吉

Pulap 環礁の一人の男が，小さな手漕ぎカヌーでトビウオ漁にでかけることになった。出発前に，占いをしたところ，この組みあわせをえた。これは吉なので，すぐに出かけた。ところが，漁をしている最中に，突然，天候がわるくなり，海が荒れてきた。その男は必死で島にたどりつこうとして，カヌーを漕いだ。環礁に入るための水路のところまでたどりついたのだが，海が荒れているためにながされてしまい，うまく水路を通過することができなかった。仕方なく，もう一つの小さな水路の方にむかった。そこもまた，海が荒れていたので，通過することが困難であった。しかし，悪戦苦闘の末に，そこを無事に通過することができた。それ以来，この組みあわせは，

その水路の名前である，Lewóórput にちなんでよばれることになった。

249)　(4+4)(3+1)　seŕmwaniyal　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，seŕmwan は「あかりを消す」，yal は Woleai 語で「太陽」の意。

250)　(4+4)(3+2)　pukuwanimir　吉

Puluwat 環礁のカヌーが，Namonuito 環礁の Orol 島をめざして船出をした。しかし，Orol 島のすぐ近くで，座礁した。カヌーはこわれたけれども，島のすぐ近くであったので，乗組員は全員無事であった。この組みあわせは，座礁したところの地名にちなんで名づけられたものである。そして，座礁はしたけれども，乗組員が全員無事であったということから，吉とみなされている。

251)　(4+4)(3+3)　pwat　吉

Puluwat 環礁の Saw 島に住む男が，海にしかけた筌をとりにでかけた。筌は海の底にしずめてあったので，男はもぐっていった。ところが，途中でカメと魚がサメにおそわれてにげまわっているところに行きあたった。そこでまずカメをつかまえてから，筌のところにいった。この筌はたいへん大きいものであったので，その筌の魚の入り口のところに身をよせて，かくれた。サメは魚を追いかけることに夢中で，かくれている人間のことに気がつかずに，遠ざかっていった。その筌のおかげで命びろいをし，あげくにカメまで手に入れることができたので，吉である。pwat は筌の部分名称で，魚の入り口のところを意味する。

252)　(4+4)(3+4)　keŕikeŕwow　吉

一人の男が重い病気にかかっていた。そこで，占い師に助かるかどうかを占ってもらった。すると，この組みあわせをえた。これは吉なので，占い師は助かるといった。ところが，数日して，その男は死んでしまった。助かるはずであったのに死んでしまったので，多くの人びとがその占い師をうたがった。

島の人たちは，死者の葬儀をおこなった。中央カロリン諸島の島々では，キリスト教がはいる以前には，死者を水葬にすることが多かった。しかし，水葬にする前に，死者の体を布でくるむ儀式がおこなわれた。親族の女たちが死体を布でくるみはじめたときに，死者の手がうごき，自分の体をぽりぽりとかきはじめた。人びとがびっく

りして，布をとりはずすと，死んだはずの男が息をふきかえし，目をあけていた。死者がよみがえったのである。それ以来，この組みあわせは，keŕikeŕwow とよばれるようになった。keŕikeŕ は「ひっかく」，wow は方向を指示する接尾辞で「内から，内へ」を意味する。

253)　(4+4)(4+1)　yilinefo　吉

Pulusuk 環礁のカヌーが，Truk 群島をめざして航海することになった。出発前に占いをしたところ，この組みあわせをえた。これは吉であるので，すぐに船出をした。ところが，Truk 群島の島々を目前にして，嵐にまきこまれた。すぐに帆をおろして，漂流することにした。風雨が強いので，どうすることもできないままに，カヌーは，一つの島の近くのリーフに座礁した。カヌーがこわれて，乗組員は全員，海になげだされた。けれども，島が近かったので，全員泳いで無事に島にたどりつくことができた。この組みあわせは，カヌーが座礁したところの地名にちなんで名づけられたものである。

ただし，占い師によっては，カヌーが座礁して，こわれたことから，この組みあわせを凶とみなす者もあるとのことである。

254)　(4+4)(4+2)　kalaishag　吉

この組みあわせの伝承は不明。ただし，これは Woleai 語で，kal は「カヌーで海にでるときにもってゆく食べ物」，i は「わたしの」，shag は「……だけ，……のみ」の意。つまり，この食べ物は，わたしのためだけのもの，という意味である。

255)　(4+4)(4+3)　merentakay　吉

Ifalik 環礁の一人の酋長が Woleai 環礁にきていた。ある日，島の男たち数人が，その酋長をおそって袋だたきにしたあと，大きな穴のなかにほおりこんだ。気絶していた酋長はやがて意識を回復し，夜明けとともに島をぬけだして，泳いで島の近くのリーフのところにいった。日中はそのリーフのところに身をかくして，夜に島にもどって助けをもとめた。meran は「……のおわり，……の端」の意。Takay は隠れ場所としたリーフの地名である。

256)　(4+4)(4+4)　kassupai　吉

むかし，Ifalik 環礁には二人のたいへん好戦的な酋長がいた。その酋長の名前は，

Moyuun と Maineyes であった。あるとき，二人は Lamotrek 環礁を支配下におさめようとして，カヌーの軍団をつらねておそった。しかし，そのときの攻撃は失敗におわった。そののちに，またある日，二人が占いをしたところ，この組みあわせをえた。二人が待ち望んでいたのは，この組みあわせであったのでふたたびカヌーをつらねて，Lamotrek 環礁をおそった。はげしい戦闘の末に，ついに島々の制圧に成功した。そのとき以来，この組みあわせは，kassupai とよばれるようになった。kassu は「あげる」，pai は「手」の意。つまり，つきあげた手という意味である。Lamotrek を手中におさめたということを意味している。

3. koran の分析

Satawal 島の数占いにおける256の koran をいくつかの視点から分類してみると，つぎの諸点があきらかとなる。

1) 256の koran は，一つの例外をのぞいて，のこりのすべてが吉もしくは，凶のどちらかをになっている。そのうち，174の koran が吉，81の koran が凶である。のこりの一つは，吉凶のどちらでもなく，占いでそれをえたときにはもう一度やりなおすことになっている。このことから，吉をえる確率が68.0%，凶をえる確率が31.6%となり，吉をえる確率がかなり高いことがわかる。

2) 256の koran は，一つの例外をのぞいて，のこりのすべてが固有の名前をもっている。255の名前の命名の由来を分類してみると，表2のごとくとなる。表でもあきらかなように，地名や人名などのような具体的な事柄をもとにした命名が多く，超自然的世界との関わりを示唆するものは4例だけである。

表2　命名の由来の分類

地名	66
行為	45
人名	20
植物名	16
カヌーの部分名称	15
自然現象	10
海洋生物の名称	10
身体名称	8
用具名	8
超自然的存在の名称	4
技法名	2
鳥の名称	2
その他	4
名前なし	1
名前の意味不明	45
計	256

3) 256の koran はそれぞれ名前の由来伝承をもっている。そのうち，伝承の内容があきらかなものが139，不明のものが117である。内容があきらかな139の由来伝承を，主たるモチーフにしたがい分類してみると，表3のごとくなる。

表3　伝承のモチーフによる分類

戦闘への参加	42
航海中の事故	37
生命をねらわれる	28
漁撈にでる	10
航海にでる	9
病気	2
超自然的存在の活動	2
島で仕事中の事故	2
その他	7
計	139

主たるモチーフとしては，戦闘への参加，航海中の事故，生命をねらわれるなど，生命に直接関わるものが圧倒的に多い。ここにおいてもまた，超自然的世界との関わりを示唆する伝承は2例だけである。つまり，超自然的世界の事柄よりも現実的世界でのそれが由来伝承のモチーフのすべてを成している。そして，それらの由来伝承の内容が，koran の吉凶を決定する要因となっている。

4)　koran の名前および由来伝承をみるかぎり，koran の吉凶は超自然的世界との関わりにおいて決定されているというよりも，むしろ現実的世界における出来事によって，吉凶が定められている。

5)　koran の伝承のいくつかの事例において，本来，吉であったものが凶にかわったり，その逆もまたありうる。つまり，占いにおける吉凶が不変のものとしてあたえられているというよりもむしろ可変的である。

6)　koran の伝承をいくつか検討してみると，解釈の仕方によっては，吉凶がまったく逆転しうるものがある。事実，いくつかの koran の伝承でもあきらかなように，何人かの占い師が同一の組みあわせに対して，互いに異なる結論を下している事例がある。これからあきらかなことは，吉凶の解釈の仕方に占い師の個人差がありうる点である。

表4　伝承に登場する島々および登場回数

Kusaie	1	Saipan	1
Pingelap	1	Satawal	2
Ponape	1	Lamotrek	6
Ngatik	1	Elato	3
Kapingamarangi	1	West Fayu	1
Mortrocks	3	Olimarao	1
Nama	1	Gaferut	1
Truk	11	Ifalik	9
Namonuito	6	Woleai	15
Pulap	5	Eauripik	2
Puluwat	19	Sorol	2
Pulusuk	7	Fais	2

7)　特定の数が，吉とか凶といったような特定の象徴的な意味をになっているかどうかについて分析をおこなったが，それに関しては規則性を抽出することができなかった。つまり，特定の数の組みあわせが不規則的に吉凶をになっているということである。

8)　名前の由来伝承のなかには，具体的な島の名前がでてくる場合が多い。伝承に登場する島を表に示すと，つぎのごとくとなる（表4参照）。東は Kusaie 島から西は Fais 島まで，カロリン諸島のほとんどの島々が伝承に登場していることがわかる。

V．数占いの比較考察

1．Saipan 島の数占い

Saipan 島には，中央カロリン諸島の島々から移住してきた人々の住む集落がある。移住は19世紀のはじめごろからはじめられたといわれている。Satawal 島からも，1810年ごろに，Agurup 酋長にひきいられた一群の人びとが，Saipan 島にはじめて移住をおこなったといわれている。当時，Satawal 島が大きな台風の直撃をうけ，生活が苦しくなったためといわれている。もちろん，それ以前においても，中央カロリン諸島の島々とマリアナ諸島のあいだで交流があったとおもわれる。しかし，組織的な移住は，19世紀の初頭にはじまると，Satawal 島の人びとは主張している。

このような状況のなかで，松岡静雄は，Saipan 島に居住するカロリン人がおこなっていた，数占いを記録にとどめている [松岡　1943: 156–161]。ただし，これは松岡が直接，調査をおこなってえた資料をもとにしたものではなく，日本統治時代の南洋庁サイパン支庁の役人がえた資料をもとにしたものである。おそらく，1920年代のはじめごろに集められた資料であるとおもわれる。しかも，Saipan 島のカロリン人と書かれているのみで，中央カロリン諸島のどの島からきた人たちからえた資料であるのかについては明記されていない。以下に，松岡の報告にもとづいて，Saipan 島における数占いの概要を記すことにする。

Saipan 島でもやはり，数占いのことは，ボエといわれている。そして，ボエ[7]には，三種類ある。ココヤシの葉の葉片を，1条だけもちいる場合，2条もちいる場合，4条もちいる場合の三種類である。それぞれ，ボエ・リヤシ，ボエ・ペーグ，ボエもしくはウラボエとよばれている。占いの方法は，Satawal 島の場合とまったく同じで

7) 松岡は現地語をカタカナ表記しかしていないので，それにしたがうことにする。

ある。また，占い師のことをサウ・ボエとよんでいる。

つぎに，Saipan 島のボエもやはり，カヌーが関係している。そのカヌーのことを，ウァ・サラクとよんでいる。ウァ・サラクにはやはり，16人の yaanúyeŕemas が乗りこんでいる。16人の yaanúyeŕemas の名前とそれぞれがになっている数字の組みあわせは，表5のとおりである。この16人を Satawal 島の事例とくらべてみると，(2+3)と(3+2)が正反対となっている以外は，すべて名前と数字の組みあわせも同じである。また，カヌーにおける16人の席次は，図3のごとくである。16人がすわる位置については，(1+1)，(2+3)，(3+2)，(4+4)以外は，すべてことなっている。

Saipan 島の事例で重要なことは，数占いにいくつかの規則性のあることが指摘されている点にある。松岡が報告している数占いの規則性を整理して，箇条書きにすると，つぎのごとくとなる（以下，簡約のため，16の yaanúyeŕemas の表記には，表5に記した①から⑯までの番号をもちいる）。

(1) ⑯が先行する組みあわせは，すべて吉である。反対に⑯が後になる組みあわせは凶である。その理由としては，⑯のシェグイヤが，このカヌーの palú であるために，かれが先に声をかけて，他がこれにこたえるのが順当であり，配下がかれに先んずることは非礼とみなされるからである。

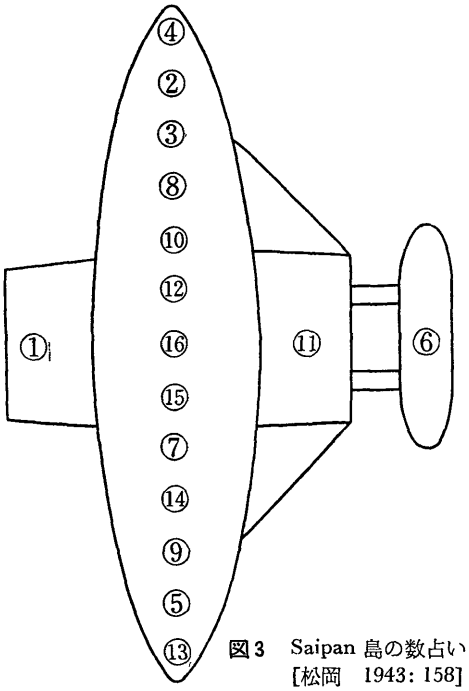

図3　Saipan 島の数占いのカヌー
[松岡　1943: 158] による

表5　Saipan 島の16人

①	(1+1)	テリフォグ
②	(1+2)	ソウペス
③	(1+3)	リプル
④	(1+4)	プゴロマル
⑤	(2+1)	イルバイ
⑥	(2+2)	イラーマル
⑦	(2+3)	ミセウグ
⑧	(2+4)	イリンメル
⑨	(3+1)	ラガパラル
⑩	(3+2)	マーノ
⑪	(3+3)	タウラプ
⑫	(3+4)	リソロワル
⑬	(4+1)	イリファル
⑭	(4+2)	イリファオ
⑮	(4+3)	ボエンアグ
⑯	(4+4)	シェグイヤ

[松岡　1943: 159] による

（2）　図3のカヌーの席次にもとづいて，進行方向にむかって，前席にあるものが先んずる組みあわせは吉であるが，その逆は凶である。

（3）　図3のカヌーの席次にもとづいて，④②③を甲，⑧⑩⑫を乙，⑮⑦⑭を丙，⑨⑤⑬を丁とする。甲が丁に先行する組みあわせは大吉であるが，その逆は大凶である。乙が丁に先行する組みあわせは吉であるが，その逆は凶である。乙が丙に先行する組みあわせは小吉であるが，その逆は小凶である。

（4）　①と甲および丁との組み合わせは，どちらが先行しても，吉である。

（5）　乙および丙が①に先行する組みあわせは吉であるが，その逆は凶である。

（6）　①が⑪に先行する組みあわせは大吉であるが，その逆は吉である。

（7）　①と⑥の組みあわせは，どちらが先行しても，大凶である。その理由としては，どちらが動いても，カヌーのバランスがくずれて，転覆するからである。

（8）　⑪が甲および丁に先行する組みあわせは，吉である。その反対に，甲が⑪に先行する場合には吉であるが，丁が⑪に先行する場合には凶となる。

（9）　⑪が乙および丙に先行する組みあわせは吉であるが，その逆は凶である。

(10)　⑥が甲および乙および丁に先行する組みあわせは，吉である。ただし，この場合に，⑥が⑫に先行する組みあわせだけは，例外的に凶である。同様に，甲および乙および丁が⑥に先行する組みあわせは，吉である。ただし，この場合に，⑫が⑥に先行する組みあわせだけは，大吉である。

(11)　⑥が丙に先行する組みあわせは凶であるが，その逆は大吉である。

(12)　⑥が⑪に先行する組みあわせは凶であるが，その逆は大吉である。

(13)　⑥が⑪に先行する組みあわせは大吉であり，その逆もまた大吉である。これには由来がある。⑥は女性で，カヌーの palú である⑯の妾（めかけ）であったが，あるとき航海中に月経になったために，⑯はそれを不吉として，⑥を海になげいれた。それを⑮がたすけようとしたが及ばず，結局⑭が身を挺して助けたといわれている。そして，その後，⑯の許可をえて，⑭と⑥は夫婦になったといわれている。そのために，この両者の関係はたいへんよいのである。

このように，松岡は Saipan 島の数占いにおける規則性を指摘したのであるが，その結果生ずることになる256の組みあわせの名前および吉凶については，何も記述していない。そこで，上記の規則性にもとづいつ，256の組みあわせの吉凶を解析すると，つぎのごとくとなる。ただし，吉凶における大小の区分，つまり大吉，小吉，大凶，小凶という四分類は，すべて吉と凶の二分類に還元して処理をおこなった。吉凶

を四分類せずに，二分類しかしていない Satawal 島の資料と比較検討しやすくするためである。

松岡が指摘した規則性によると，同じものが重なる場合，たとえば①と①や②と②のような組みあわせについての吉凶が不明である。しかし，それらの16とおりの組みあわせを除く，240の組みあわせについては，規則性にしたがって，吉凶を確定することができた。それによると，240の組みあわせのうち，吉は138，凶は102となり，吉をうる確率は57.5%で，凶をうる確率は42.5%となる。Satawal 島の場合とくらべて，吉の確率が低くなっている。ただし，のこりの16の組みあわせの吉凶が不明であるので，あまり確定的なことはいえない。

2. Namoluk 環礁の数占い

Namoluk 環礁の数占いについては，ドイツ人学者の Max Girschner が，20世紀の初頭に調査をおこない，民族誌的報告をおこなっている [Girschner 1912: 199-208]。その報告によれば，Namoluk 環礁でもやはり，数占いのことは pwe とよばれている。けれども，pwe としては，4条のココヤシの葉片をもちいておこなう占

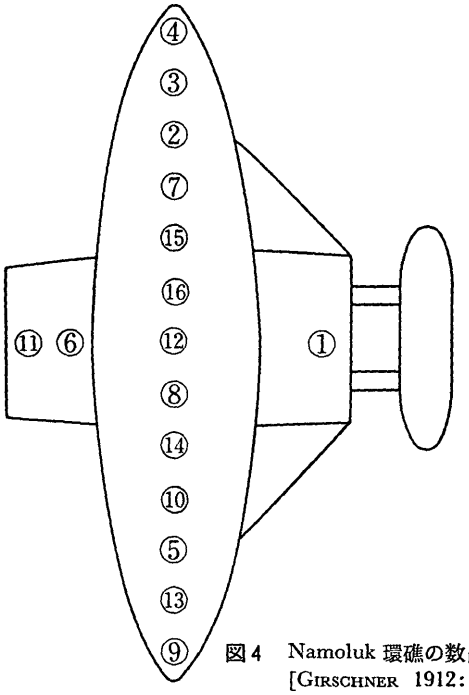

図4　Namoluk 環礁の数占いのカヌー
[Girschner 1912: 200] による

表6　Namoluk 島の16人

①	(1+1)	Tilifek
②	(1+2)	Saupith
③	(1+3)	Lipul
④	(1+4)	Pukenemar
⑤	(2+1)	Inipwai
⑥	(2+2)	Inoaeman
⑦	(2+3)	Mesauk
⑧	(2+4)	Inemain
⑨	(3+1)	Laneperen
⑩	(3+2)	Momo
⑪	(3+3)	Toalefailan
⑫	(3+4)	Lithanwel
⑬	(4+1)	Ilifar
⑭	(4+2)	Ilifau
⑮	(4+3)	Pwainek
⑯	(4+4)	Sauya

[Girschner 1912: 199] による

いだけしか報告されていない。1条もしくは2条もちいる場合についてはなにも記述されていない。しかし，占いの方法については，Satawal 島の場合と同じやり方である。

Namoluk 環礁における数占いの起源伝承については，すでに詳述したので，ここではそこに登場する，16人の yaanúyeŕemas の名前とそれらがになう数字の組みあわせを，表6に示す。この16人を，Satawal 島の事例とくらべてみると，やはり先ほどの Saipan 島の場合と同様に，(2+3)と(3+2)が入れかわっている以外はまったく同じである。また，カヌーにおける16人の席次は図4のごとくである。席次については，各島の資料を後ほど比較検討するので，ここではこれ以上ふれないことにする。ただし，Namoluk 環礁の伝承によれば，数占いのカヌーが天上世界から地上世界におりてきて，まずはじめに Ngatik 環礁にいったが，そのときに環礁の入り口の水路のところで座礁し，それによってそれまで最前席にすわっていた③が④と交替している。そして，それとともに，最後席の⑬と⑨も入れかわっている。図で示したのは，その交替したのちのものである。

Namoluk 環礁の数占いに関する Girschner の報告のなかで，もっとも注目に値することは，256の組みあわせの名前と吉凶がすべて記録にとどめられている点にある。いままでおこなわれた数占いに関する民族誌的報告では，占いの方法と16人の yaanúyeŕemas についての資料の提示はあっても，もっとも重要な256の組みあわせについては断片的資料しか記録にとどめられていなかった。その点で，Girschner が記録した256の組みあわせの名前と吉凶は Satawal 島の事例と比較検討できる唯一の資料である。ただし，256の組みあわせの名前の由来伝承については，ほとんど記録されていない点が惜しまれる。

まず，吉凶については，256の組みあわせのうち，162が吉で，93が凶である。ただし，一つだけは例外的に吉凶のどちらでもない。したがって，Namoluk 環礁においては，吉をうる確率が63.3%，凶をうる確率が36.3%となる。Satawal 島の場合には，吉の確率が68.0%で，凶の確率が31.6%であったので，ほぼ似かよった確率

表7　命名の由来の分類

人間の行為にもとづくもの	64
地名	45
状況にもとづくもの	32
植物名	24
用具名	23
カヌーの部分名称	20
自然現象	11
身体名称	9
人名	9
海洋生物の名称	7
超自然的存在の名称	5
食物名	2
その他	5
計	256

である。

ついで，組みあわせの名前の由来についてであるが，それを分類すると表7のごとくとなる。表でもあきらかなように，人間の行為とか，ある種の状況など，具体的な事柄をもとにして，命名がなされている場合が多い。しかし，名前の由来伝承については，具体的に報告がなされていないので，名前の命名と伝承の内容の関連性については不明である。ただし，数少ないけれども，いくつかの組みあわせについての由来伝承が報告されており，それをみるかぎりにおいては，伝承をもとにして命名がおこなわれていることがあきらかである。また，Satawal 島の場合と同様に，伝承の内容によって，組みあわせの吉凶が定められている。

3. Truk 群島の数占い

Truk 群島における数占いについては，Bollig と Krämer の報告がもっともすぐれている [Bollig 1927: 64–68; Krämer 1932: 336–340]。

Krämer によれば，Truk 群島にはじめて数占いを伝えたのは，Fais 島の人たちであったといわれている [Krämer 1932: 336]。

むかし，Fais 島のカヌーが漂流して，Truk 群島の Tol 島にたどりついた。そのとき，島の人びとが，カヌーの乗組員を殺そうとしたので，すぐにその島を離れて，Udot 島ににげた。そこでも命をねらわれたので，Param 島，Fefan 島などの島々を転々として，最終的に Uman 島の酋長にたすけられた。そこに Torres 島の酋長もやってきて，これらの二人の酋長が Fais 島からきた人たちを手厚くもてなした。それに感激した Fais 島の人たちが，数占いをはじめて教えた。それによって，Truk 群島にはじめて数占いがもたらされたのである。

Krämer が報告しているこの伝承に対して，Bollig は，数占いが Kusaie 島から伝えられたという伝承と Yap 島もしくは Ngatik 環礁から伝えられたという伝承がある，と報告している [Bollig 1927: 64]。

Truk 群島では数占いのことを pue といい，それには2種類がある。4条のココヤシの葉片をもちいる場合と1条だけをもちいる場合の2種類である。前者は pue unus (完全なる数占いの意)，後者は pue eu (一つだけの pue の意) とよばれている [Bollig 1927: 67]。また，占いのやり方は，Satawal 島の場合とほぼ同様であり，占い師は soupue とよばれている。

Truk 群島の数占いにおいても，やはりカヌーにのった16人の yaanúyeŕemas が重要な関わりをもっている。これらの16人の名前とそれらがになっている数字の組みあ

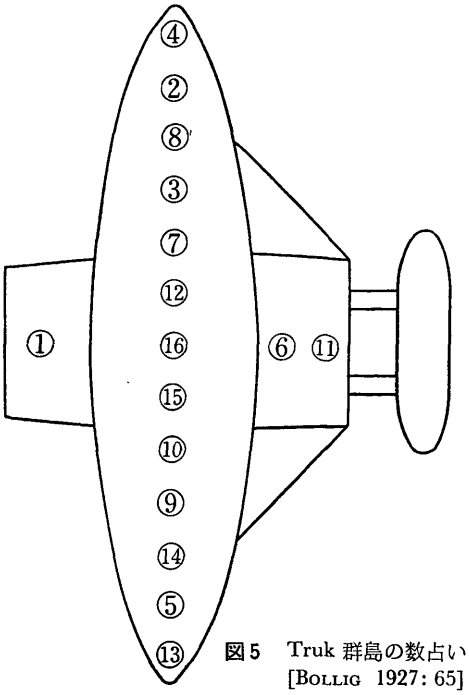

図5　Truk 群島の数占いのカヌー
[Bollig 1927: 65] による

表8　Truk 群島の16人

		Bollig*	Krämer**
①	(1+1)	Telefes	Oilefes
②	(1+2)	Sofis	——
③	(1+3)	Nipun	Saupis
④	(1+4)	Pukulimer	Pukunumar
⑤	(2+1)	Inepoi	Ineboei
⑥	(2+2)	Inomau	Inoman
⑦	(2+3)	Mamau	Mesauk
⑧	(2+4)	Inemein	Inemein
⑨	(3+1)	Nereperen	Lengibaran
⑩	(3+2)	Mesauk	Mamu
⑪	(3+3)	Poula	Taulap
⑫	(3+4)	Nitaluen	Litanual
⑬	(4+1)	Ineper	Inifar
⑭	(4+2)	Inepou	Inefau
⑮	(4+3)	Porongek	Bueigak
⑯	(4+4)	Sauia	Sauia

* [Bollig 1927: 65] による
** [Krämer 1932: 337] による

わせを表8に示す。表でもあきらかなように，16人の名前とそれらがになう数字の組みあわせについては，Krämer と Bollig の報告でことなっている。Bollig の提示するデータは，Satawal 島のものとまったく同一である。それに対して，Krämer の資料は Satawal 島以外の島々における数占いと Truk 群島のそれとの符合を示している。いずれにしても，この点については後ほどくわしく検討する。

つぎに，これらの16人のカヌーにおける席次については，Bollig しか記録にとどめていない。それは，図5のとおりである。なお，Bollig は，これら16人のほかに，Supulumen の存在を指摘している。しかし，それが，yaanú かどうかについては，なにも記録にとどめていない。また，数占いのカヌーに関して，もう一つ重要な指摘がある。それは，数占いのカヌーに2種類あるという点である。一つは ua akamara (帆走カヌー)，もう一つは ua fadil (手漕ぎカヌー) である [Bollig 1927: 66]。そして，これらの2種類のカヌーにおける，16人の席次はことなるそうである。ただし，帆走カヌーにおける席次は図5に示したとおりであるが，手漕ぎカヌーにおける席次については何も記されていないので不明である。しかし，その相違は重要である。なぜなら，Truk 群島の占い師はそのどちらかにもとづいて占いをするので，どちらをとるかによって，占いの結果もことなってくるからである [Bollig 1927: 66]。

けれども，くわしい記述がないので，それ以上のことについては不明である。

最後に，256の組みあわせについては，Bollig がそれらが名前をもっており，吉凶が決められていると指摘している [Bollig　1927: 65]。たとえば，(1+4)(4+4) の組みあわせは tuasip と名づけられ，その逆の組みあわせは tululelog と名づけられていると例をあげている。しかし，それ以外の組みあわせの名前および吉凶については一切ふれられていない。一方，Krämer は256の組みあわせの名前についてはなにも記していないが，12の組みあわせの吉凶についてだけは記録にとどめている。

4. Yap 島の数占い

Yap 島における数占いについても，いくつかの短い民族誌的報告がなされている。Yap 島においては，数占いのことは，bei [Furness　1910: 130], wei [Walleser 1913: 1062], vei [Müller　1917: 373] などとよばれている。占いの方法は，Satawal 島の場合とほぼ共通している。

他の島々と同様に，Yap 島の場合にも，16の yaanúyeŕemas が占いに関わりをもっている。Yap 島では，それらのことを kan とよんでおり，Furness はそれを demon と訳している [Furness　1910: 133]。しかし，kan は demon だけにとどまらず，超自然的存在のすべてを含む，より包括的な概念である [Salesius　1906: 122]。それらの16の kan の名前とそれらがになう数字の組みあわせは，表9のとおりである。

Yap 島の16の kan で重要なことは，性別が明確なことである。Furness によれば，(1+1)，(1+2)，(1+3)，(1+4)，(2+3)，(2+4)，(3+3)，(3+4)，(4+4)が男性であり，それ以外が女性である [Furness　1910: 134–136]。つまり，男性が9人で，女性が7人ということになる。それに対して，Müller によれば，(1+3)，(2+3)，(2+4)，(3+1)，(3+3)，(4+2)，(4+3)，(4+4)が男性であり，のこりが女性である。つまり，男女が同数となる。両者の報告に相違がみとめられるが，それ以外に資料がないので，どちらがより一般的なのか不明である。

ただし，Furness は，男女の性別を明確にしただけでなく，それらの男女間に婚姻関係があると報告している点が注目される。それによると，これらの kan の酋長が(4+4)であり，その妻が(2+2)である。そして，それらのあいだにできた息子が(1+1)である。ついで，男性(1+2)と女性(2+1)が夫婦となる。同様に，男性(1+3)と女性(3+1)，男性(1+4)と女性(4+1)，男性(2+3)と女性(3+2)，男性(2+4)と女性(4+2)，男性(3+4)と女性(4+3)が，それぞれ婚姻関係にあるといわれている。ただ，

表9　Yap 島 の 16 人

		Furness*	Wallese**	Müller***
①	(1+1)	Thilibil	Ziliweg	Tiliveg
②	(1+2)	Saupis	Sopes	Supis
③	(1+3)	Nebul	Newul	Nivul
④	(1+4)	Wunemerr	Wunumer	Vunimor
⑤	(2+1)	Navai	Newey	Navai
⑥	(2+2)	Nagaman	Negeman	Nagamon
⑦	(2+3)	Musauk	Mesog	Masog
⑧	(2+4)	Namen	Namein	Naman
⑨	(3+1)	Languperran	Lanporon	Lineparon
⑩	(3+2)	Fawgomon	Fogomou	Fugomo
⑪	(3+3)	Thugalup	Zogolop	Tagalop
⑫	(3+4)	Trunuwil	Tenuel	Tsanuul
⑬	(4+1)	Liverr	Lifer	Lifor
⑭	(4+2)	Nafau	Nefau	Nifau
⑮	(4+3)	Vengek	Weneg	Vaneg
⑯	(4+4)	Sayuk	Seyok	Sayog

* [Furness 1910: 134] による
** [Wallese 1913: 1063] による
*** [Müller 1917: 375] による

もう一人だけのこる男性(3+3)はいまだに独身とみなされている[Furness 1910: 135–136]。ここで注目すべきなのは，(4+4)，(2+2)，(1+1)，(3+3)以外の kan の婚姻関係には，数字の組みあわせが密接に関わりをもっている点である。つまり，男性の数字の組みあわせの正反対の数字の組みあわせをになう女性が，その男性と婚姻関係にあるとされているわけである。

Yap島の数占いのカヌーの席次については，Müller だけしか記録にとどめていない[Müller 1917: 375]。それは図6のとおりである。このカヌーはアウトリッ

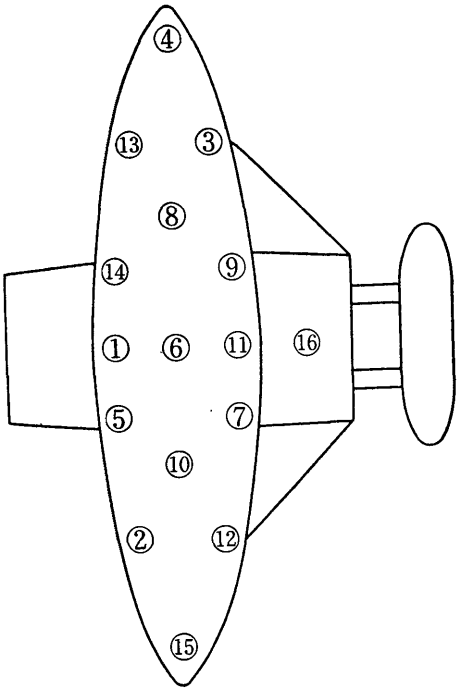

図6　Yap 島の数占いのカヌー
[Müller 1917: 375] による

ガー・カヌーであるが，それが帆走カヌーか，手漕ぎカヌーかについては，正確な記述がないので不明である。ただし，Yap 島のカヌーの席次が，他の島々における席次と，大きくことなっている点が注目される。それについては，のちほど他の島の資料と比較考察する。

16の kan の組みあわせによって生じる256の組みあわせについては，ほとんど記録にとどめられていない。ただ，Walleser がいくつかの組みあわせの吉凶を例としてあげているのみである [Walleser 1913: 1063–1064]。

5. Woleai 環礁の数占い

Woleai 環礁における数占いについては，Alkire が報告をおこなっている [Alkire 1970: 13–16]。

Woleai 環礁においては，数占いは bwe [Alkire 1970: 13]，もしくは be [Sohn and Tawerilmang 1976: 227] とよばれている。占いの方法は，Satawal 島の場合とまったく同じである。そして，ここでもやはり，16人の超自然的存在[8] が関わり

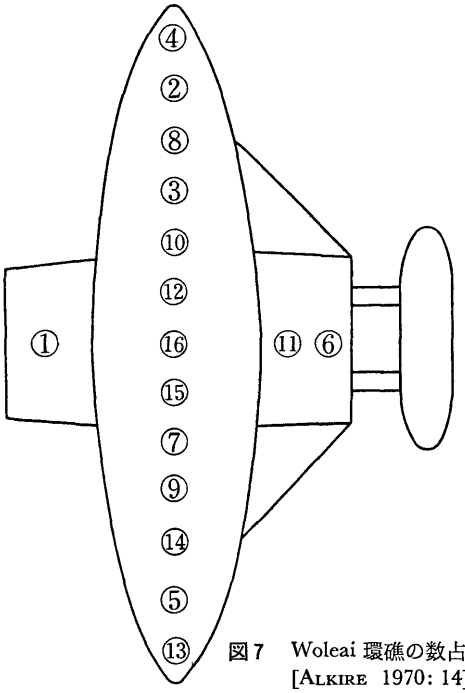

図7　Woleai 環礁の数占いのカヌー
[Alkire 1970: 14] による

表10　Woleai 環礁の16人

①	(1+1)	Tilifug
②	(1+2)	Saopis
③	(1+3)	Lipul
④	(1+4)	Bwogolimar
⑤	(2+1)	Ilubwai
⑥	(2+2)	Ilagomal
⑦	(2+3)	Mesaiug
⑧	(2+4)	Ilimail
⑨	(3+1)	Langaparal
⑩	(3+2)	Magomoi
⑪	(3+3)	Tagolap
⑫	(3+4)	Lechuliwel
⑬	(4+1)	Inifar
⑭	(4+2)	Ilufao
⑮	(4+3)	Bweingug
⑯	(4+4)	Saowaig

[Alkire 1970: 14] による

8) Alkire は，これらの超自然的存在のことを spirit と記しているだけで，それに対応する現地語を記録していない [Alkire 1970: 14]。

をもっている。それらの名前とそれぞれがになっている数字の組みあわせは，表10のとおりである。

Woleai 環礁の16人に関して，重要なことは，格づけがなされている点にある。(4+4)がカヌーの palú であり，最上位にある。次いで，(1+4)が第二位，(4+1)が第三位に位している。(3+3)はそれらに次いでいるが，肉体的にはもっとも強いとみなされている。その次に，(2+4)と(4+3)が同格でそれにつづいている。それ以外については，格づけがなされていない。ただし，(2+2)は女性であり，それ以外は全員，男性である。

Woleai 環礁でもやはり，数占いのカヌーにおける16人の席次が明確に認知されている。それは，図7に示すとおりである。

16の超自然的存在の組みあわせによって生じる256の組みあわせは，maralibwe とよばれている。それらはすべて固有の名前をもち，吉凶があたえられている。しかし，残念ながら，Alkire は，(2+1)と(3+2)の組みあわせが limongoi とよばれ，凶とみなされているという一例をあげているだけで，それ以外の組みあわせについてはなにもふれていない。

6. 比較考察

六つの島々における数占いを比較考察してみると，つぎの諸点があきらかとなる。

1)　数占いには3種類がある。もちいるココヤシの葉片が，1条だけの場合，2条の場合，4条の場合の3種類である。このうち，もっとも一般的なのは，4条のココヤシの葉片をもちいる場合である。1条だけの葉片をもちいる数占いについては，Satawal 島と Saipan 島の事例しか報告されていない。

2)　占いの方法については，六つの島々でほぼ共通している。ココヤシの葉片に結び目をつくり，その数をかぞえて，最後にのこった数の組みあわせによって吉凶を占う。その場合に，結び目の数のかぞえ方が特徴的である。つまり，数を4までかぞえると，また1にもどる。この点に関して，4という数がとくに重要である。

3)　カロリン諸島における数占いの基本は，16とおりの数の組みあわせにあり，しかもそれらを16の超自然的存在がそれぞれになっているとかんがえられている点にある。これらの16の超自然的存在は，どの島々でも共通に認知されており，それぞれが固有の名前をもっている。名前については，Yap 島の事例をのぞいて，ほぼ共通している。また，それぞれがになっている数の組みあわせについても，ほぼ共通している。このように，神話的世界と密接な関わりをもって，数占いが成立している点が一つの特徴

となっている。

4)　数占いのカヌーという観念についても，六つの島々で共通にみとめられる。しかし，16人の超自然的存在がカヌーのどの位置にすわるかについては，各島で見解が異なっている。この点については，各島で独自の展開があったものとおもわれる。しかしここでもまた，Yap 島における数占いのカヌーの座席については，他の島々のものとあきらかに異なっている。それがどのような理由によるものかは，不明であるが，Yap 島の数占いについては異なる系統に属するものかもしれない。なお，Truk 群島の事例によると，数占いのカヌーには，帆走カヌーと手漕ぎカヌーの2種類があるとされているが，他の島々ではそのような報告はみられない。その上に，カヌーの種類の相違によって，数占いがどのように異なるのかについても不明である。

5)　数占いに関わる16人の超自然的存在について，もう一つ重要な点は，Yap 島の事例で，16人の性別が明確にされていることである。そして，それらの16人が夫婦関係および親子関係にあるという指摘は興味深い。同様に，Woleai 環礁の事例で，16人のあいだにおける格付けがなされている点も重要である。それらの諸点については詳細な記述がないので，16人のより具体的な相互関係については不明である。おそらく，本来はもっと完全なかたちで，神話的世界における16人の相互関係についての伝承が存在したとおもわれる。

6)　Saipan 島の事例では，数占いのカヌーにおける16人の座席の位置によって，吉凶が規則的に定められている。これは他の島々においてはみられない点である。しかし，これについても詳細な記述がないので，いかなる理由によって，座席の位置の相違が吉凶を決定するうえで，重要な役割をはたしているのか不明である。おそらく，この点についても，神話的世界における16人の超自然的存在の相互関係についての伝承が存在したはずであり，そこにおいて16人の相互関係が明確に規定されていたようにおもわれる。したがって，Saipan 島の事例の場合には，神話的世界における16人の相互関係が，そのまま数占いにおける吉凶を定める要因となったものとおもわれる。

7)　いずれにしても，これまでの考察から，カロリン諸島の広範囲にわたって，共通の数占いの文化が存在したことを指摘しうる。

Ⅵ. おわりに

筆者らによる，Satawal 島の社会と文化に関する本調査が現在進行中であるため，本稿も中間報告的意図をもって書かれたものである。したがって，本稿のみで，Sata-

wal 島の数占いについてすべてを論じつくしたというものでは決してない。本稿にはなお多くの不備があり，それらの点については，本調査の成果をもって補うつもりである。しかしながら，本稿をとじるにあたって，将来への展望もふくめて，いくつかの問題を記しておきたい。

Satawal 島における数占いについてもっとも特徴的なことは，超自然的世界との密接な関わりにおいて数占いが成立していると観念されている点にある。それについては，数占いの起源伝承でもあきらかなように，数占いは人間が創案したものではなく，天上世界の超自然的存在が人間のもとにもたらしたものであるとみなされている。数占いと超自然的世界との関わりは，このような伝承にのみとどまるものではなく，数占いの基本体系でもっとも重要な点とも密接に関わっている。つまり，Satawal 島の数占いにおいては，1から4までの数が二つ組みあわされることによって生じる16とおりの数の組みあわせが占いの核をなしているが，それらを16人の yaanúyeŕemas という超自然的存在がそれぞれになっているとみなされている点である。さらに最終的に，16とおりの数の組みあわせが相互に組みあわされることによって，256の組みあわせが生じ，それによって吉凶が確定される。それはあたかも，16人の超自然的存在がたがいに関係をもちあうことによって，256の新たなる関係が創造されたようなかたちとなっている。

ところが，そのような16人の超自然的存在の相互関係の結果生じる256の組みあわせについては，超自然的世界とは無関係にその組みあわせの内容，つまり吉凶が定められている。つまり，本来であれば，Saipan 島の事例のように，16人の超自然的存在の神話的世界における相互関係が，占いの吉凶を決めるにあたって規定的要因となるはずであるのに対して，それには関わりなく吉凶が決められている。その点については，256の組みあわせの由来伝承をみればあきらかであり，現実的世界において生じた事件をもとにして，吉凶が決められている。

このように，Satawal 島における数占いは基本的には超自然的世界との密接な関わりにおいて成立しているけれども，最終的に吉凶を確定する際には現実的世界における出来事をもとにしている。つまり，数占いが超自然的存在との関わりですべてが完結しているというよりも，超自然的世界と現実的世界が混淆したかたちで，未来の予測がおこなわれているといえる。それは，256の組みあわせの伝承をみてもあきらかなように，吉凶は不変的にあたえられているというよりも，かなり可変的である。組みあわせの伝承でもあきらかなように，ある事件をきっかけにして，それまで吉とみなされていたものが，凶に変わりうるし，またその逆もありうる。この点について，

換言するならば，数占いの方法がどの占い師にとってもかなり不変的に共通するのに対して，最終的におこなわれる256の組みあわせの解釈は占い師が現実におこった出来事に対応するかたちで，吉凶の解釈を可変的におこなっているためであるともいえる。

最後にもう一つ指摘しておきたいことは，数占いでありながら，数そのものが吉凶を確定する上で，決定的な役割をはたしていないという点である。つまり，特定の数が吉とか凶といったような特定の象徴的な意味をになってはいないということである。もし特定の数が象徴的な意味をになっているならば，占いそのものがもっと規則性をもったものとなっていたはずである。少なくともいままでに得た資料をもとに，数の組みあわせだけをもとにして，吉凶が確定されるメカニズムを解析しても，規則性を抽出できなかった。しかしながら，この点についてはまだ資料が不足しており，本調査でより多くの資料を得たうえで結論すべきであるとおもわれる。

ただし，Satawal 島における数の象徴的な意味について，一ついえることは，2の倍数が社会的に特別な意味をになっている可能性のある点である。占いでは，2条もしくは4条のココヤシの葉片をもちいるのが一般的であり，結び目の数をかぞえる場合にも4までかぞえると1にもどっている。また，1から4までの数が二つ組みあわされることによって，16とおりの組みあわせができ，それがまたもう一度組みあわされることによって，16の二乗の256の組みあわせが生じている。これらのすべてに，2の倍数が関係している。

2の倍数がなぜ社会的に重要なのかについては，まだ確定的なことはなにもいえないが，予備調査でえた資料だけをもとにしても，いくつかの点で，2の倍数が社会的に重要な局面を指摘できる。たとえば，新生児が生れた場合には生後四日間にわたって海の幸をとどけなければならないし，また人が死んだ場合にも死後四日間にわたって近親者が墓地で死者の弔いをしなければならない。そのほか，各種の社会的タブーや方位やココヤシの実の数え方などの多くの局面で，2の倍数が重要性をになっている。この点については，Alkire [1970, 1972] がすでに指摘しているとおりである。しかし，2の倍数の重要性を指摘することはできても，それがかれらの世界観といかなる関わりがあるのかという点については，まだ十分に研究がなされていない。これについては，本調査による，資料の蓄積をみてから論ずることにしたい。

謝　　辞

本稿の大部分は，Satawal 島の Lamonur 氏が有していた，数占いについての伝統的知識を記録にとどめたものである。異邦人の筆者に秘伝の数占いをこころよくご教授下さった Lamonur

氏に対して深甚なる謝意を表するとともに，いまは亡き氏に対して謹んで哀悼の意を表しておきたい。また，筆者の調査助手をつとめてくれた Sabino Sauchoman 氏にも深く感謝する次第である。両氏のご協力なしには，本稿はかたちをなしえなかったものである。

また，本稿をまとめるにあたっては，共同調査者である国立民族学博物館の須藤健一助手および秋道智彌助手との共同討議によって，多くの有益な示唆を得た。さらに，資料の整理・分析にあたっては，国立民族学博物館の小山修三助教授および杉田繁治助教授から有益なコメントを賜わった。加えて，資料の整理の際に，甲南大学大学院でミクロネシア研究をすすめている杉藤重信氏にご協力いただいた。ここに記して，謝意を表しておきたい。

最後に，本稿を脱稿したのち，ただちに本調査のために，Satawal 島にむけて出発するという事態にいたったために，本稿の校正その他で多くの方々にご尽力をお願いすることとなった。その点とくに記して，深く謝する次第である。

文　　献

ALKIRE, William, H.
1970 Systems of Measurement on Woleai Atoll, Caroline Islands. *Anthropos* 65: 1–73.
1972 Concepts of Order in Southeast Asia and Micronesia. *Comparative Studies in Society and History* 14(4): 484–493.

BOLLIG, Laurentius
1927 *Die Bewohner der Truk-Inseln*, Anthropos Ethnologische Bibloothek, Band 3, Heft 1.

BURROWS, Edwin G. and Melford E. SPIRO
1957 *An Atoll Culture: Ethnography of Ifalik in the Central Carolines.* Greenwood Press, Publishers.

CANTOVA, Juan Antonio
1728 Lettre du P. Jean Cantova, missionaire de C. de J. au R.P. Guillaume Daubenton. Mar. 20, 1722. *Lettres édifiantes et curieuses, escrites des missions étrangères, par quelques missionaires de la Compagnie de Jesus*, Vol. 18, pp. 188–247.

DAMM, Hans and Ernst SARFERT
1935 *Inseln um Truk*, 2. Halbband: *Polowat, Hok und Satawal.* In Georg Thilenius (ed.), *Ergebnisse der Südsee Expedition 1908–1910.* II. Ethnographie, B. Micronesien, Vol. 6, Part 2. Friederichsen De Gruyter & Co.

ELBERT, Samuel H.
1972 *Puluwat Dictionary.* Pacific Linguistics, Series C. No. 24, Department of Linguistics, Research School of Pacific Studies, The Australian National University.

FREYCINET, Louis C. D. de
1827 *Voyage autour du monde, Exécuté sur les corvettes de S. M. L'Uranie et La Physicienne, pendant les années 1817, 1818, 1819, et 1820, Historique.* Vol. 1, Pt. 2. Pillet Ainé.

FURNESS, William Henry
1910 *The Island of Stone Money.* J. B. Lippincott.

GIRSCHNER, Max
1912 Die karolineninsel Namoluk und ihre Bewohner. *Baessler Archiv* 2: 123–215.

土方久功
1940 『ヤップ離島サテワヌ島の神と神事』南洋群島文化協会。
1974 『流木―ミクロネシアの孤島にて―』未来社。
1975 『覆刻サテワヌ島民話―ミクロネシアの孤島―』アルドオ。

KOTZEBUE, Otto von
1821 *A Voyage of Discovery into the South Sea and Bering's Straits, Undertaken in the Years 1815–*

1818. Trans. from the Russian by H. E. Lloyd. Vol. 3. Longman, Hurst, Rees, Orme, and Brown.

KRAMER, Augustin

1932 *Truk.* In Georg Thilenius (ed.), *Ergebnisse der Südsee Expedition 1908–1910.* II. Ethnographie, B. Mikronesien, Vol. 5, Friederichsen, De Gruyter & Co.

1937 *Zentralkarolinen,* 1. Halbband: *Lamotrek-Gruppe, Oleai, Fais.* In Georg Thilenius (ed.), *Ergebnisse der Südsee Expedition 1908–1910.* II. Ethnographie, B. Mikronesien, Vol. 11. Friederichsen, De Gruyter & Co.

KRAMER, Augustin & Hans NEVERMANN

1938 *Ralik-Ratak (Marshall-Inseln).* In Georg Thilenius (ed.), *Ergebnisse der Südsee Expedition 1908–1910.* II. Ethnographie, B. Mikronesien, Vol. 11, Friederichsen, De Gruyter & Co.

KUBARY, Jan Stanislaw

1888 Die Riligion der Pelauer. In Adolf Bastian (ed.), *Allerlei aus Volks- und Menschenkunde,* Vol. 1. E. S. Mittler.

LESSA, William, A.

1959 Divining from Knots in the Carolines. *Journal of the Polynesian Society* 68 (2): 188–204.

松岡静雄

1943 『ミクロネシア民族誌』岩波書店。

MÜLLER, Wilhelm

1917 *Yap,* 1. Halbband. In Georg Thilenius (ed), *Ergebnisse der Südsee Expedition 1908–1910.* II. Ethnographie, B. Mikronesien, Vol. 2, Part 1. L. Friederichsen & Co.

1918 *Yap,* 2. Halbband. In Georg Thilenius (ed.), *Ergebnisse der Südsee Expedition 1908–1910.* II. Ethnographie, B. Mikronesien, Vol. 2, Part 2. L. Friederichsen & Co.

PARK, George, K.

1963 Divination and its Social Context. *Journal of the Royal Anthropological Institute* 93: 195–209.

QUACKENBUSH, Edward, M.

1968 *From Sonsorol to Truk: A Dialect Chain.* Ph.D. dissertation, University of Michigan.

SOHN, Ho-min & Anthony F. TAWERILMANG

1976 *Woleaian-English Dictionary.* The University of Hawaii Press.

WALLESER, Sixtus

1913 Religiöse Anschauungen und Gebräuche der Bewohner von Jap. *Anthropos* 8: 607–29, 1044–68.